
西村京太郎
●最新鉄道ミステリー
十津川警部C11を追う

著者のことば

子供の頃、近くの目黒駅に行くと、蒸気機関車が、長い貨物を牽引して通過して行くのを見ることが出来た。陸橋の上から、最後の一両が消えるまで見送るのが、好きだった。従って、ＳＬは、子供の頃の思い出と重なっている。幸い、京都に住むようになって、時々梅小路の蒸気機関車館へ行って、ＳＬを見ている。この作品で、十津川にＳＬを追いかけさせたのも、私自身の子供の頃の思い出の中で、ＳＬが、大きな位置を占めているせいかも知れない。



十津川警部C11を追う

西村京太郎

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーイラストレーション＝辰巳四郎
本文イラストレーション＝柳沢達朗

目次

二階座席（シート）の女——7
十津川警部C11を追う——59
北の廃駅で死んだ女——113
死への近道（アクセス）列車——165

二階座席（シート）の女

1

亀井刑事は、ＪＲに、新しい列車が登場するたびに、胃が痛くなる。

小学六年の息子の健一が、鉄道マニアで、雑誌で見ては、一緒に乗りたいと、ねだるからである。

「ママと一緒に乗って来たらどうなんだ？」

と、いうと、健一は、

「ママは、ぜんぜん、鉄道に興味がないんだ。だから、つき合わせるのは、可哀そうなんだよ」

と、生意気なことをいう。といって、ひとりで行かせるのは、亀井も、不安になる。

「スーパー踊り子号に乗りたい」

と、いい出した時も、そうだった。

「二日がかりの旅行になるんだろう？　そんな休暇は、なかなか取れないぞ」

と、亀井がいうと、健一は、時刻表を調べていたが、

「一日で大丈夫だよ。朝早く家を出れば、終点の下田へ行っても、日帰りできるよ」

と、いい、スケジュール表を、書いてきた。

午前八時三〇分新宿発――一一時〇六分伊豆急下田着。伊豆急下田一三時三六分発――一六時二三分新宿着だという。

それに、家のある三鷹までの時間が、プラスされる。

「すごい強行軍だな。下田には、二時間半しかいられないぞ」

と、亀井は、呆れた顔で、いった。
「それでもいいよ」
と、健一は、あっさりいってから、
「その代り、お願いがあるんだ」
「何だ？」
「一日で行って来るんだから、宿泊費が浮くわけでしょう。だから、グリーン車にして貰いたいんだ」
「グリーン車？」
「うん」
「なぜだ？」
「この列車はね、二階建でね。1号車と2号車は、グリーン車で、そこが、二階建になってるんだ」
「その二階に座りたいのか？」
「当り。行きだけでもいいから、二階の座席にして」
と、健一は、いった。
まあ一日の強行軍なら、片道は、多少、ぜいたくをしてもいいだろうと、亀井は、妥協した。
十一月初旬に、珍しく、日曜日に、休みがとれた。日曜日なので、健一を連れて行かれる。
息子の希望通り、1号車の二階のグリーン席を買った。
ただし、朝は大変だった。新宿発八時三〇分に乗らなければならないので、おそくても、七時半には、家を出なければならなかったからである。前日、品川で起きた事件を、午前二時までかかって、やっと解決したから、やたらに眠かった。
健一は、スーパー踊り子号といっているが、正確には、スーパービュー踊り子号だった。
その名前の由来は、実際に、新宿駅の四番線ホームで、列車を見て、亀井にも、納得できた。
1、2号車と、10号車が、二階建なので、新しい新幹線の「ひかり」のように、その三両だけ、ぴょこんと、背が高くなっているものと思っていたのだ

が、他の七両も、同じ背の高さなのである。

3号車から9号車までは、一階建だが、座席は、高い位置にあるのだ。それだけ、スーパービュー（素晴らしい展望）ということらしい。

確かに、子供に人気の出そうな列車だが、四十五歳の亀井は、その未来的なスタイルがなじめなくて、

「なんだ。いも虫みたいなスタイルだな」

と、いって、健一に、睨まれた。

先頭車の前部が、妙に丸くなっていて、その上、車体がうすいブルーなので、亀井は、どうしても、いも虫を連想してしまうのである。

しかし、ユニフォーム姿のビューレディに迎えられて、車内に入ると、さすがに、よく出来ていた。

二階の座席は、新幹線より間隔が広い感じで、ゆったりとしている。前方の展望は、運転席が一階にあるので、何の邪魔もない。

座席は三列で、亀井は、健一と、二列の側に腰を下した。健一は、窓側に座らせたのだが、列車が走り出すと、車内の写真を撮ってくるといって、カメラを片手に、通路へ出て行った。いつものことで、亀井は、ひとりになれたので、リクライニングにして、眼を閉じた。三時間ほどしか寝てなかったので、たちまち、眠ってしまった。スーパービューも、宝の持ちぐされである。

肩をゆすぶられて、眼を開けた。健一が、ゆすっているのだ。寝ている間に、おしぼりが、配られている。健一が、そのことをいっているのだと思い、亀井は、

「わかってるよ」

と、いい、おしぼりで、顔を拭きかけた。

「違うよ」

と、健一は、小声だが、怒ったようないい方で、

「あそこの女の人、変だよ」

と、いい、三、四列前の座席を、指さした。
二列並びの座席の窓側に、若い女が、腰を下していたが、その肩が、小刻みにふるえているのだ。
その女に、亀井は、見覚えがあった。
この列車に乗るために、新宿駅のホームで、待っている時、ひどく目立つ女がいた。
背が高く、顔立ちが派手で、モデルのようだった。が、亀井が、覚えていたのは、そのためだけではない。
日曜日なので、乗客は、家族連れが多く、全体の雰囲気が、なごやかなのに、彼女だけは、孤立して、冷たい雰囲気を感じさせたのである。
その女が、同じ1号車の二階の座席に乗ったので、覚えていたのである。
その女が、今、小刻みに身体をふるわせている。
亀井は、立ち上り、彼女の前に廻ってみた。
真っ青な顔で、唇を噛みしめ、身体をふるわせているのだ。
「どうしました？」
と、亀井が、声をかけた。
返事の代りに、女は、呻き声をあげ、右手に、何かを、握りしめながら、座席から、転げ落ちた。
その気配に、近くの座席にいた乗客たちが、立ち上って、騒ぎ始めた。
「車掌を、呼んで来て下さい！」
と、亀井は、大声で、いい、倒れて、動かなくなった女の顔をのぞき込んだ。
眼は、瞳孔が開いてしまって、動かない。噛みしめた唇は、破れて、血が吹き出していた。
掌を、鼻に当ててみたが、息をしている気配はなかった。手首を、そっとつまんでみたが、脈も、消えている。
「死んじゃったの？」
と、健一が、声をかけて来た。

「自分の席に、座っていなさい」
と、亀井は、強い声で、叱りつけた。
車掌が、駈け上って来た。床に倒れている女を見て、顔色を変え、
「どうしたんですか？」
と、亀井に、きく。亀井は、それには答えず、
「次の停車駅は？」
と、きいた。
「間もなく、伊東ですが」
「駅に連絡は？」
「とれますが」
「すぐ連絡して、救急車を待機させておくようにいって下さい。それに、警察にも、連絡するようにいった方がいいですね」
「死んでるんですか？　その人」
「早くして下さい！」
と、亀井は、怒鳴った。

2

伊東駅着一〇時一一分。
ホームには、救急隊員と、伊東署の刑事が待っていた。
「あなたも、一緒に降りてくれませんか」
と、伊東署の刑事がいったが、亀井は、
「あの女性には、関係ありませんし、子供と一緒に、下田まで行くことになっていますので」
と、断った。その代りに、亀井は、自分の名刺を渡した。
「本庁の方ですか」
と、相手は、びっくりした顔になった。
「今日は、今もいったように、子供のお守りなんですよ。明日は、警視庁にいますから、何かあったら、電話を下さい」

と、亀井は、いった。

スーパービュー踊り子号は、下田に向って発車した。

健一も、ショックを受けたらしく、終点の下田まで、黙りこくっていたが、帰りの列車では、元気を取り戻して、また、車内の写真を、撮りまくっていた。

亀井が、疲れ切って、三鷹の自宅に帰ったのは、午後六時近くである。

その夜のテレビのニュースで、列車の中の女性が死んだことを、亀井は、知った。伊東駅でおろしたあと、救急車で病院に運ばれたが、すでに、死亡していたというのである。

〈青酸中毒死とみられ、警察は、自殺、他殺の両面から、捜査を始めました〉

と、アナウンサーが、告げた。

翌日、亀井が、出勤すると、すぐ、上司の十津川警部と一緒に、捜査一課長の本多に、呼ばれた。

温厚な本多が、いつになく、厳しい表情をしている。

「今、静岡県警から、電話があってね」

と、本多が、いった。

亀井が、あの事件のことだなと思って、説明しかけると、本多は、それを、手で制して、

「向うさんは、亀井刑事を、訊問したいと、いってるんだ」

「訊問――ですか？」

と、十津川が、眉を寄せた。

亀井も、びっくりした。参考に、車内の様子でも聞きたいというのならわかるが、訊問では、容疑者扱いではないか。

「そうだ。県警は、亀井刑事を、重要参考人と考えているらしい」

「冗談じゃありませんよ。私は、車内で、女性が、

突然、苦しみ出して、倒れたので、車掌を呼び、伊東駅に、連絡させたんです。警察も呼んだ方がいいといいました。それだけですよ」
「では、死んだ女のことは、全く知らないんだな？」
「はい」
「女の名前は、片桐とも子、二十八歳。その名前にも、記憶はないかね？」
「ありません」
と、亀井は、いった。
十津川が、横から、
「カメさんが、疑われている理由は、何なんですか？　まさか、同じ列車に乗っていたからなんていうんじゃないでしょうね？」
「名刺だそうだよ」
「名刺？」
「それなら、私が、伊東署の刑事に、渡したものですよ。協力してくれと、伊東駅でいわれたんですが、息子と、下田まで行くことになっていたので、名刺を渡して、明日にでも、電話してくれと、いっておいたんです」
「その名刺じゃないんだ」
「と、いいますと？」
「死んだ女が、右手に握りしめていたのが、亀井刑事の名刺だといってるんだ」
「まさか――」
「これを、ファックスで、送ってきた」
と、本多は、一枚の用紙を、亀井に見せた。
それには、二枚の名刺が、転写されていた。
どちらも、亀井の名刺である。一枚は、きれいだが、一枚は、くしゃくしゃになったのを引き伸して、ファックスしたらしく、折れた線が、いくつも、ついていた。
「両方とも、確かに、私の名刺ですが、私は、死ん

だ女とは、何の関係もありません。生れて、初めて、会った女です」
「もちろん、私は、君の言葉を信じるが、静岡県警が、疑問を持っているのでね」
と、本多は、いった。
「カメさんが、嘘をいう筈がないじゃありませんか」
と、十津川は、強い調子で、いった。
「それは、そうなんだがねえ」
「県警は、いつ、訊問に来るといってるんですか？」
「今日は、問題の列車の車掌や、コンパニオンの話を聞き、明日、午前中に、こちらへ来ると、いっている」
と、本多は、いった。
「逃げ隠れはしませんよ」
と、亀井は、いった。
その日、おそく、家に帰ると、妻の公子が、
「健一の様子が、変なんですよ」
と、亀井に、いった。
「変って、どんな風にだ？」
「元気がないし、何をいっても、上の空みたいで――」
「昨日、列車の中で、あんなことがあったからかな。それに、疲れてるんだろう。何しろ、強行軍だったから」
「そう思ってるんですけどねえ。いつもと違うんで、心配なんですよ」
「明日は、大変なんだ。早く寝かしてくれないか。健一のことは、明日、聞くよ」
と、亀井は、いった。
次の日の昼前に、伊東署の刑事二人が、やって来た。
一人は、伊東駅のホームで、亀井が、名刺を渡し

た男である。彼は、青木と、自分の名をいい、もう一人の若い方を、森口と、紹介した。
「私も、立ち合いたい」
と、十津川が、二人に、いった。
青木と、森口の二人は、相談していたが、
「いいでしょう」
と、肯いた。
訊問は、取調室で行われることになった。
青木刑事が、ポケットから、二枚の名刺を出して、テーブルに置いた。
「問題は、死んだ片桐とも子が、握りしめていた方の名刺です。当然、亀井さんは、前から、ご存知の女性でしょうね？」
「いや、全く知らない女です」
「それなら、なぜ、この名刺を？」
「わかりません。女が、何か握りしめているのは、気付いていましたが、まさか、自分の名刺だなんて、全く、知りませんでした」
と、亀井は、いった。
「それは間違いありませんか？」
もう一人の森口刑事が、疑わしげに、きいた。こちらは、若いだけに、自分の感情を、露骨に示している。
亀井は、むっとしながらも、
「間違いありませんよ」
「しかし、1号車を担当していたビューレディの古賀千賀子は、こう証言しているんです。おしぼりを配って歩いた時、あなたと、被害者が、並んで座っていたというんですよ。あなたは、眠っていたが、被害者が、二人分のおしぼりを受け取ったと、いっています」
「バカな！」
と、亀井は、思わず、叫んだ。
「古賀千賀子というコンパニオンを、前から知って

いたということはないでしょう？」
「ありませんよ」
「それなら、彼女が、嘘をつくことは、考えられないから、本当のことを、いっていると、思いますね。彼女の証言では、被害者とあなたは、とても、親しそうに見えたと、いっていますよ」
「冗談じゃない。私は、前日、おそくまで仕事をしていたので、あの列車に乗ってすぐ、眠ってしまったんですよ。おしぼりが配られたのも、知らなかったんです。息子に起こされたとき、被害者は、もう、苦しんでいたんです。もちろん、彼女の座席でね」
と、亀井は、いった。
十津川も、それにつけ加えて、
「前日、おそくまで、仕事があったのは、本当ですよ。午前二時近くまでかかって、やっと、殺人事件が解決したんです。それから、家へ帰って、そのまま、朝早く出かけたから、ほとんど、寝ていない筈です。座席で、眠ってしまったのは、当然だと、思いますよ」
と、いった。
「しかし、亀井刑事が、眠っていたとしても、なぜ、被害者が、あなたの隣りに座っていたんでしょうか？」
森口は、追及してきた。
「そんなこと、知りませんよ」
「ここに、古賀千賀子の証言が、書いてあります。それを、読みますよ。『亡くなった女の人は、男の人（亀井）の隣りに腰を下して、ニコニコしながら、男の人の顔を、のぞき込んだりしていました。私が、おしぼりを持っていくと、彼女は、二人分を受け取り、彼は、仕事で疲れているの、ごめんなさいと、いいました』どうですか？　コンパニオンが、知り合いだと思っても、無理はないと思います

が」
「彼女が、一人芝居をしたんですよ」
と、亀井は、いった。
森口は、肩をすくめて、
「何のためにですか？」
「わかりませんよ」
「しかも、死んだ時、彼女は、あなたの名刺を握りしめていたんです。この説明は、つきますか？」
「わかりませんが、私が配った名刺を、誰かに貰って、持っていたんでしょう」
「あの名刺は、いつ、作られたんですか？」
と、今度は、青木が、きいた。
「去年の四月に、百枚印刷しました。あまり、使うことがないので、まだ、二、三十枚、残っています」
「すると、去年の四月から、今年の十一月までに、七、八十枚は、配っているんですね？」
「そうです。しかし、亡くなった女性には、絶対に渡していませんよ」
と、亀井は、力を籠めて、いった。
「それは、間違いありませんか？」
「ええ。渡していれば、そういいますよ」
「亀井刑事の隣りの座席は、お子さんの席だったんですね？」
「そうです。子供にグリーンは、ぜいたくだと思いましたが、鉄道マニアでしてね。どうしても、スーパービュー踊り子号の二階に乗りたいというので、グリーンにしたんです」
「被害者が、隣りに座っていた時、お子さんは何処にいたんですか？」
と、青木は、きいた。
「今いったように、息子は、鉄道マニアなんです。あの新しい列車に乗ったので、カメラを持って、車内を、見物して廻っていたんです。それで、隣り

が、空いていたんです」
「しかし、そこに、なぜ、被害者は、恋人みたいな顔をして座っていたんですかね？　しかも、あなたの名刺を持って」
若い森口刑事が、皮肉な眼つきで、亀井を見た。
「わかりませんよ。多分、あいているんで、座ったんじゃありませんか」
「カメさん」
と、十津川が、注意した。
「わかりました。私は、ずっと眠っていたんで、何が何だか、わからないんですよ。被害者が、隣りに座っていたことも知らないんですよ。だから、全て、驚くことばかりなんです」
と、亀井は、いった。
「どうやって、被害者が、毒を飲んだか、わかっているんですか？」
十津川が、二人の刑事に、きいた。
「コーヒーと一緒に、飲まされたのではないかと、いわれています」
と、青木が、いった。
「コーヒーですか」
「1号車の二階の通路から、紙コップが見つかりましてね。それに残っていたコーヒーから、青酸が検出されたんです。車内販売で売っているコーヒーに、青酸を混入して、飲ませたのだと思います」
「その紙コップから、指紋が、採れたんですか？」
「被害者の指紋は、出ました。申しわけないが、亀井刑事の指紋を、採って帰り、照合したいと思っています」
と、青木が、丁寧だが、かたい口調でいった。
亀井は、開き直った顔で、
「好きなようにしてくれていいですが、毒死した女の素性は、わかったんですか？」
と、逆に、きいた。

「今、調べているところです。本来なら、東京の人間ですから、警視庁に依頼するんですが、何しろ、その警視庁の現職の亀井刑事が、重要参考人になっているので、それが出来ません。それで、まだ、くわしくは、調べていないのですが、モデルあがりのホステスだと聞いています。亀井刑事も、ご存知のように、人の眼を引く美人です」

「所持品は、何があったんですか？」

と、十津川が、きいた。

青木は、手帳を取り出して、そこにメモしたものを見ながら、

「黒いシャネルのハンドバッグを持っていて、その中には、カルチエの赤い財布、これには、二十九万三千円が入っていました。他に、シャネルの化粧品、口紅、香水などです。運転免許証が入っていたので、身元はすぐわかりました。キーホルダー、これには、三つのキーがついています。ハンカチーフ。カード三枚。CDカード、東京のホテルのVIPカード、それと、アメックスですね」

「スーツケースとか、ボストンバッグは、持っていなかったんですか？」

「見つかっていません」

「切符は、何処までの分でしたか？」

「スーパービュー踊り子51号、1号車の二階グリーンのもので、終点の伊豆急下田までの切符です」

「私の三列前の座席で、死んでいましたが、あそこの席の切符だったんですか？」

と、亀井が、きいた。

「その通りです。窓側の席でした」

「連れはいなかったんですか？」

「連れを見かけた人間が、いないのですよ。亀井刑事の他に、彼女の連れがいれば、われわれは、まずそちらに当ってみるんですがね」

「彼女の住所を教えてくれませんか」

と、亀井がいうと、森口刑事が、
「彼女のマンションに、これから、われわれは、行ってみることにしています。亀井刑事は、重要参考人ですから、遠慮して頂きたいですね」
「しかし――」
「カメさん。私が、この人たちと、一緒に行ってくるよ」
と、十津川が、いった。

3

十津川は、彼が、パトカーを運転して、伊東署の刑事二人を、中野へ案内した。
中野駅近くのマンションに、被害者片桐とも子の住んでいた部屋があった。
九階建の703号室である。
エレベーターで、七階にあがり、703号室につくと、青木は、伊東から持参したキーホルダーを取り出した。
被害者のハンドバッグに入っていたものである。
「この一つが、マンションのキーだと思うんですがねえ」
と、青木は、いいながら、キーを試していたが、ドアは、あっさりと開いた。
2LDKの部屋だった。管理人に聞いたところでは、一ヵ月の部屋代が、二十八万円だという。
「東京では、ぜいたくな広さですよ」
と、十津川は、部屋の中を見廻しながら、二人の刑事にいった。
青木と、森口は、黙って、部屋の中を調べ始めた。
十津川は、妙に勘ぐられてはいけないので、見守っていた。
居間の調度品も、三面鏡も、じゅうたんも、全

て、高価な感じだった。
（金のかかる女だったんだな）
と、十津川は、思った。
モデル時代の写真が、何枚か飾ってある。なるほど、背の高い、スタイルのいい女だったようである。
十津川が、その写真を、一枚ずつ見ていると、青木刑事が、
「これを、見て下さい」
と、速達の封書を、差し出した。
三面鏡の上に、のっていたものだという。
宛名は、片桐とも子になっていて、裏の差出人のところには、村田法律事務所の名前が、ゴム印で、押してあった。
中身は、便箋二枚に、ワープロで、次のように書いてあった。
〈前略
二ヵ月前、あなたに対して暴行を働いた刑事は、こちらで調べたところ、警視庁捜査一課の亀井刑事とわかりました。告訴されるのは、結構ですし、われわれも、協力を惜しみませんが、裁判で争うとなると、暴行の事実の証明が、難しいと思われます。また、あなたは、レイプされた事実が、明らかにされることを、覚悟する必要があります。
それよりも、亀井刑事に、賠償金を払わせた方が、ベターと考えます。電話で、本人に当ったところ、あわてふためいており、出来る限りの賠償はすると、約束しました。
彼は、十一月七日の日曜日、子供を連れて、下田まで、新宿午前八時三〇分発の「スーパービュー踊り子51号」に乗るので、出来ればその車内で、あなたと会い、お詫びをし、金額について、相談したいといっています。あなたは、これに応じた

方がいいと、われわれは、考えます。
ご一考下さい〉
「これで、亀井刑事の動機がはっきりしましたね」
と、青木が、したり顔でいった。
十津川は、二度、読み返してから、
「バカげている」
「どこがですか？」
「カメさんは、レイプなんかしませんよ」
「上司の十津川さんが、否定したいのは、わかりますが、最近、警察の不祥事が、次々に明るみに出ていますからね。本庁に、似た事件があったとしても、おかしくは、ありませんよ」
と、森口は、いった。
この若い刑事には、警視庁に対するライバル意識があるのかも知れない。
「私は、この手紙を信じませんよ」
と、十津川は、いった。
「それでは、この弁護士事務所へ行って、確めてみようじゃありませんか」
森口は、挑戦するように、いった。
「いいでしょう。行ってみましょう」
と、十津川はいった。
再び、十津川の運転するパトカーで、新宿西口のビルの中にある法律事務所に廻ってみた。
所長の村田弁護士に会って、手紙のことを話すと、
「それは、谷川君の担当している事件ですよ」
と、いい、谷川弁護士を、呼んでくれた。
六十歳くらいの小柄な男だった。眼鏡の奥から、細い眼で、三人の刑事を見つめて、
「片桐さんが亡くなって、私も、びっくりしています」
と、いった。

「この手紙を書かれたのは、あなたですね？」
と、青木刑事が、きいた。
「そうです」
「これは、事実なんですか？」
と、十津川が、きいた。
「全て、事実です」
「くわしく話して下さい」
「一ヵ月ほど前ですかね。片桐とも子さんが、訪ねてみえたんです。私が、話を聞きました。自分は、現在、銀座のクラブSで、ホステスをしているが、二ヵ月前の夜、店から帰ったあと、自宅で、男に襲われ、レイプされたというのです。相手は、警察手帳を見せ、近くで起きた殺人事件のことで、話を聞きたいというので、何の疑問も持たずに、男を、部屋に入れてしまった。ところが、男は、豹変して、襲いかかってきたというのです。そのあとで、男は、お前はホステスだから、今夜のことを訴えても、誰も、お前の証言なんか、信用しないといったというのです。彼女にしてみれば、ホステスということでバカにされたことが、口惜しくてならないというわけですよ。私も、権力を笠にきた男のやり方に、腹が立って、調べてみたのです」
と、谷川は、いった。
「なぜ、その男が、亀井刑事と、思ったんですか？」
と、十津川が、きいた。
「それは、二つの理由からです。男が、警察手帳を見せて、部屋に入ったことが一つです。その時、さすがに、名前はいわなかったし、見せませんでしたが、私は、それが、本物だと直感しました。もう一つは、彼女が覚えていた人相です。その二つを合せると、捜査一課の亀井刑事しかいないのですよ」
と、谷川弁護士は、いった。
「それで、亀井刑事に電話をかけて、確めたという

んですか？」

と、十津川は、きいた。

「そうです。片桐とも子さんは、非常に腹を立てていましてね。どうしても、亀井刑事を告発するといっていたんです。しかし、そうすれば、自分も、傷つきますよと、私はいいました。レイプ事件の裁判というのは、私も、二件扱いましたが、例え、勝訴したとしても、原告も、ずたずたに傷ついてしまうのです。それで、裁判にはせず、亀井刑事に謝罪させ、賠償金というか、慰謝料というか、払わせた方がいいのではないかと、忠告したんですよ。幸い、亀井刑事は、自分の非を認めました。それで、私は、いつ、彼女に会って、謝罪し、賠償金を払ってくれるのかと、亀井刑事に聞きました。そうすると、彼は、こういいました。私も、刑事として、第一線で働いている。だから、彼女に会うとしても、ひそかに会って、話をつけたい。次の日曜日に、子供を連れ、新宿から、スーパービュー踊り子51号に乗って下田へ行く。その時、彼女も、乗って来て、偶然、会ったことにしてくれないか。そして、私の方から、先に謝罪し、それを、彼女が認める形にして欲しい、とですよ。私が、立ち会いますかと聞くと、そうなると、自分が、追い詰められた形になってしまうと、いわれましてね。私は、それなら、彼女を説得してみようと、いったわけです。まさか、亀井刑事が、裏切るとは思いませんでしたからね」

谷川は、肩をすくめて見せた。

「それで、あなたは、片桐とも子に、この手紙を出されたんですね？」

と、青木が、手紙を見せて、きいた。

「そうです」

「なぜ、電話で説得せずに、手紙を出したんですか？」

と、十津川が、きいた。

「電話でも話しましたよ。しかし、彼女は、ホステスですからね。昼間は寝ているし、夜は、店に出ているんです。電話がつながっても、酔っていることが多くて、うまく、話が通じないんです。それで手紙を書いたんです。電話と、両方で、話したんです」

「しかし、亀井刑事から、私は、何も聞いていませんがね」

十津川は、眉をひそめていった。とても、信じられなかったからである。

谷川弁護士は、笑って、

「亀井刑事にしてみれば、誰にも知られたくない汚点ですからね。上司のあなたに、喋る筈がありませんよ」

と、いった。

森口刑事が、肯いている。その通りだと思っているのだろう。

「今の証言を、変えるようなことはないでしょうね？」

と、青木が、谷川に向って、念を押した。

「私は、弁護士ですよ。自分の言葉には、責任を持っていますよ」

谷川は、胸を叩くようにしていった。

村田法律事務所を出て、車に戻ると、十津川は、

「彼は、嘘をついていますよ」

と、二人の刑事にいった。

「私は、事実を話していると、思いますね」

と、若い森口が、いう。

「なぜ、そういえるんですか？」

「事件は、あの弁護士が、話した通りだし、彼は、亀井刑事が、十一月七日に子供を連れて、問題の列車に乗ることを知っていたじゃありませんか。それは、亀井刑事が、話したからですよ」

「信じられませんね」

「十津川さんが、亀井刑事を信じたい気持は、よく

わかりますが――」
と、青木は、肩をすくめた。
「これは、願望じゃなくて、事実だよ。カメさんは、レイプなんか出来ないよ」
十津川の声が、自然に大きくなった。
「しかし、人間はわかりませんよ。聖人君子に見えても、ある時、突然、劣情に駆られることがありますからね」
青木は、悟ったようなことをいった。
(わかったようなことをいうな!)
と、十津川は、腹の中で叫んだが、それは、声には出さなかった。
警視庁に戻ると、十津川は、亀井を外に連れ出した。
二人で、皇居の周囲を散歩しながら、
「君は、谷川という弁護士を、知っているかね?」
と、きいた。
「その弁護士が、何かしたんですか?」
「明らかに、カメさんについて、嘘をついている。被害者片桐とも子のことで、電話したといっているんだ」
「私にですか?」
「ああ、そうだ」
「私は、そんな弁護士から、電話を貰ったことは、ありません」
「だが、向うは、電話したと、いっている」
「嘘です」
「そう思うよ。あの弁護士は、嘘をついている。カメさんの不利になるような嘘をね。問題は、なぜかということだ。君が、谷川という弁護士を、全く知らないとすると、なぜ、あんな嘘をつくのか、わからなくなる」
「谷川ですか――」
「六十歳くらいの小柄な男で、眼鏡をかけている」

「覚えがありませんね」
「虐殺された片桐とも子にも、前に、会ったことがないと」
「そうです」
「そうなるとなぜ、この二人が、君を巻き込むようなマネをしたのかな？」
「私を、罠にかけるようなことをですか？」
「そうだよ。特に、谷川弁護士だ。彼が、君と無関係なら、なぜ、君の不利になるような証言をしたのか、なぜ、あんな嘘をついたのか、それが、わからない」
「私は、第一線の刑事で、検事じゃありません。弁護士と接触することは、めったにありませんから」
と、亀井は、いった。
「だが、向うは、君のことを知っていて、罠にかけるようなことをしたんだ」
「谷川という男の顔を、ひそかに見たいと思いま す。その法律事務所に、連れて行って下さい」
と、亀井は、いった。
十津川は、腕時計に眼をやった。
「すぐ行こう。昼休みに、事務所を出てくるかも知れない。あの事務所のあるビルには、食事をする店は、ないようだったからね」
十津川は、タクシーをとめ、亀井と乗り込むと、すぐ、西新宿に向った。
村田法律事務所のあるビルの近くで降り、二人は、ビルの入口が見える喫茶店に入った。
窓側のテーブルに腰を下して、コーヒーを注文した。
「間もなく、十二時だ」
と、十津川が、いった。
附近のビルから、サラリーマンや、OLが、出て来た。昼食をとりに出て来たのだ。
「カメさん。出て来た。二人連れの男の小さい方

だ」
と、十津川が、小声でいった。
亀井が、スプーンを止めて、じっと見つめた。
谷川は、同僚の弁護士と、デパートの方へ歩いて行った。
「どうだ？」
と、十津川は、亀井にきいた。
亀井は、当惑した表情になって、
「わかりません。ひょっとすると、前に、何処かで、会ったかも知れません」
「前は、全く会ってないといっていたんだ。それに比べれば、進歩だよ」
と、十津川は、微笑した。
「進歩ですか？」
「ああ。そうさ。谷川弁護士が、カメさんのことをよく知っていて、カメさんは、向うを、全く知らないんじゃ、勝負にならないからね」
「確かに、そうですね」
「このままだと、君は、谷川弁護士の証言で、殺人容疑で、静岡県警に逮捕されてしまう。しかも、君は、レイプした女の口をふさぐために、毒殺したことになってしまうよ。その君が、谷川弁護士のことを、ぜんぜん知らないのでは、どう戦っていいか、わからないんだよ」
「申しわけありません」
「謝るよりも、思い出してくれ」
と、十津川は、いった。

4

伊東署の刑事二人は、亀井の指紋と、谷川弁護士が、被害者に出した手紙、それに、谷川の証言記録を持って、帰って行った。
問題のコーヒーカップに、亀井の指紋がついてい

る筈はないと、十津川は、思う。
だが、それでも、静岡県警は、亀井に対する逮捕状を出すのではないか。
「何とかして、それを防ぎたい」
と、十津川は、亀井に、いった。
「私もです。息子のためにも、何とかしたいんです」
と、亀井は、いった。
「健一君のためというと――？」
「あの日から、彼の様子がおかしいんです。父親である私を見る眼が、普段と違います。どうやら、健一は、私の隣りの座席に、片桐とも子が座っているのを、見たようなのです」
「コンパニオンは、彼女と、君が、仲良くしているように見えたといっているらしいが」
「健一にも、そう見えたんだと思います。派手な美人が、自分の座席に座って、父親の私に、しなだれかかっていた。ショックを受けるのが当然です。私が知らなかったと話しても、私が逮捕されたら、もう、信じないでしょう」
と、亀井は、いった。
「逮捕はさせないさ」
「しかし――」
「君と谷川弁護士は、前に、何処かで会っているか、何か関係があったんだ。その結果、彼は、君を憎んでいた。そして、片桐とも子を利用して、君を、罠にかけたんだ」
「私が逮捕した犯人の弁護で、谷川が負けたんでしょうか？」
「それなら、相手の検事と、判決を下した裁判官を恨むよ」
「そうですね」
「とにかく、考えるんだ。まず、この手紙の検討だ」

十津川は、例の手紙のコピーを、机の上に広げた。

封筒のコピーもある。

その消印は、十一月三日になっている。事件のあった四日前である。

「しかし、この手紙が、三日に書かれたとは限らない」

と、十津川は、いった。

「すり替えですか？」

「そうだよ。片桐とも子が、前から、谷川弁護士と交渉があったとすれば、手紙は、何通か出していても、おかしくはない。十一月七日に、列車内で、片桐とも子を毒殺したあと、東京に引き返し、彼女のマンションに入って、手紙をすり替えたんだと思うね。マンションのキーは、前もって、スペアを作っておいたんだろう」

「ただの連絡の手紙を、四日前に出しておけば、三日の消印のついた封筒が、出来あがるわけですね」

「そうだよ」

「しかし、それにしても、スーパービュー踊り子号で、私を罠にかけたんですから、私が、息子の健一と、十一月七日に、あの列車の二階グリーンに乗ることは、知っていた筈です。なぜ、知っていたんでしょうか？」

と、亀井が、十津川にきいた。

「健一君から、その列車に乗りたいということは、前からいわれていたんだろう？」

「そうです。一ヵ月以上前からです。それと、二階のグリーンにしてくれということをです」

「切符を買ったのは？」

「前日の六日です。今日は、品川の事件が解決するようだというので、あわてて、東京駅に行って、切符を買ったんです」

「多分、君は、見張られていたのさ」

と、十津川は、いった。

相手は、東京駅まで尾行し、亀井が、七日の踊り子51号の切符、1号車の二階グリーンの切符を、二枚買ったのを知り、自分たちも、二枚買ったのだろう。被害者のと、犯人のとである。

ここまでは、想像がついた。

「次はレイプだな」

と、十津川は、いった。

「と、いいますと？」

「なぜ、君に、レイプの罪を押しかぶせたかということさ」

「それは、私が警官だからでしょう。法秩序を守る筈の人間が、女を暴行したなんてことは、一番、恥しいですからね」

「確かにそうだ。しかしね。レイプは、証明が難しいし、彼女は、ホステスだ。だから、余計に難しい筈だよ。一般の人も、彼女の方から、カメさんを誘ったと思うかも知れない」

「それは、そうですが――」

「カメさんが、車で人をはねて殺し、それを、片桐とも子が目撃していたのでもいい筈だよ。それで、彼女が、カメさんをゆすっていたので、殺したというストーリィでもいい」

「ええ」

「だが、レイプにした。なぜだろう？」

「――――」

「こういうのは、どうだろう？　実際に、彼女は、レイプされていた」

「よして下さいよ」

「君じゃないよ。他の男にだ」

「全くの第三者にですか？」

「いや、谷川弁護士にだよ」

「しかし、彼は、もう六十歳ですよ」

「六十歳でも、レイプは出来るさ」

「それは、そうですが」
「カメさん。こういうことだって考えられる。片桐とも子は、したたかな女で、弁護士で金のありそうな谷川を、引っかけた。自分の方から誘っておいて、レイプされたといって、谷川を責めた」
「なるほど」
「弁護士としては、命取りになりかねない。そんな噂が立っただけでも、信用を失うからね」
「ええ」
「そこで、谷川は、カメさんに、同じレイプの罪を着せることを考えたんじゃないかね」
「列車の中で、彼女が、私の隣りに腰を下したりしたのは、なぜなんですか？　犯人に、協力しているとしか思えませんが――」
「片桐とも子も、悪党だということさ」
と、十津川は、いった。
「悪党ですか？」
「彼女は、金が欲しかった。だから、谷川弁護士をゆすったりしていた。そこで、谷川は、逆に、金儲けの話を持ちかけた。彼女にね。亀井という刑事を、罠にかけるのを手伝ってくれたら、大金を払うといってね」
「――――」
「多分、写真を撮られているよ。カメさんは」
「私がですか？」
「君と、片桐とも子がさ。疲れて、正体なく眠っている君の隣りに、彼女が腰を下し、君にもたれかかって、ニッコリしているのを、犯人が写真に撮る。そうしてくれれば、大金を払うと、いってね」
「息子は、そんなところを、見たのかも知れません」
と、亀井は、いった。
「かも知れないな。犯人は、彼女に、ご苦労さんといって、コーヒーをすすめる。彼女は、緊張から解

放されて、そのコーヒーを、喜んで飲んだ。青酸入りのコーヒーをね」

と、十津川は、いった。

5

「しかし、肝心のことが、思い出せません」

と、亀井は、悲しそうに、いった。

「谷川弁護士との関係だね？」

「そうです。彼が、なぜ、私を恨んでいるのか、前に、どこで会ったか、どうしても、思い出せません」

「谷川という男のことを、徹底的に、調べてみよう」

と、十津川は、いった。

「それなら、これから、すぐ――」

と、亀井が、立ち上ろうとするのを、十津川は、手で制して、

「君は、駄目だ」

「なぜですか？　罠にかけられたのは、私ですよ」

「だからだよ。君が、谷川弁護士の周辺を、嗅ぎ廻ってみろ。自分に不利な証人の口をふさごうとしているとか、圧力をかけているとかいわれるよ。だから、これは、西本刑事と、日下刑事の二人にやらせる」

と、十津川は、いった。

「では、私は？」

「カメさんは、少し休めよ」

と、十津川は、いった。

西本と日下の二人が、谷川弁護士のことを調べに行くことになった。

「どんな小さなことでもいいから、調べるんだ。いや、違うな。どんな小さなことでも、見逃さずに、調べて来てくれ」

と、十津川は、二人にいった。
西本たちは、その日の夜まで走り廻った。弁護士仲間に会い、大学時代の友人に話を聞き、税務署や銀行で、彼の資産を聞いた。
谷川がよく行くクラブや、バーにも、出向いた。
「どうしても、谷川と、カメさんとの関係は、見つかりませんでした」
と、西本刑事は、まず、十津川に報告した。
だが、落胆している顔ではない。十津川は、それを見て、
「しかし、何か見つけたんだな？」
と、きいた。
「そうです。谷川弁護士の娘と、カメさんとが、接点がありました」
「どういうことなんだ？」
「谷川には、子供が三人います。男の子二人と女の子一人です。奥さんとは、十二年前に離婚していて、その時、男の子は、父親の谷川が引き取り、女の子は、母親が引き取りました。その娘の名前は、母方の姓になって、中村ひろみになっています」
「その中村ひろみと、カメさんとが、どう関係してくるんだ？」
「彼女は、高校を卒業したあと、二年浪人したんですが、大学受験がうまくいかず、グレまして、不良グループとつき合うようになりました」
「今は、何をしているんだ？」
「死んでいます」
「まさか、カメさんが殺したのじゃないだろう？」
「今年の夏、八月二日ですが、深夜に、ボーイフレンドと、車を盗んで、暴走行為をしていたのです。それも、ひどい暴走で、ボーイフレンドは、車を走らせながら、窓から物を投げて、次々に、ショーウインドウを、こわしていったんです。それで、一一〇番が入っていました。その時、たまたま、殺人犯

人を追って、パトカーを走らせていた亀井刑事が、目の前の彼等の行動を見て、追いかけたわけです」

と、西本が、いう。

「思い出したよ」

と、十津川は、眼を大きくした。

猛スピードで逃げた車は、亀井刑事のパトカーに追われ、コンクリートの電柱に激突した。

運転していた青年は、三ヵ月の重傷。助手席に乗っていた中村ひろみは、頭蓋骨骨折で死亡した。

〈無謀運転の果て〉

と、新聞は、書いた。

よくあるケースの上、名前が、中村ひろみとなっているので、この事件を、谷川弁護士と結びつけて考えることは、しなかったのである。

「離婚したあと、谷川弁護士は、奥さんには未練はないが、娘のひろみは、可愛いいと、いつも、いっていたそうです。それだけに、娘の死は、ショックだったと思いますし、カメさんに殺されたように思っていたんじゃないかと、思うのです」

と、西本は、いった。

亀井も、もちろん、この事件を覚えていた。しかし、パトカーで追いかけたことは覚えていても、それが、若い女を死なせてしまったという自覚はなかった。

「あの時、彼等の車を見失ってしまったんです。とにかく、目茶苦茶なスピードを出していましたからね。見失ったあとは、私は、本来の仕事を思い出して、引き返しました。そのあと、彼等が、電柱にぶつかって、女が死亡したことは、正直にいえば、翌日になって、知ったわけです」

と、亀井は、いった。

「だが、谷川弁護士は、カメさんが、あの時、追いかけなければ、娘は死ななかったのにと、思ったんだろうね」



「それこそ、大変な誤解ですよ」
亀井は、ぶぜんとした顔になった。
「誤解というより、甘えですよ。誰が一番悪いかといえば、死んだ娘なんですが、次に、そんな娘にした親です。それを、カメさんのせいにしてるんです。卑怯なやり方ですよ」
と、西本が、いった。
「だが、どうであれ、谷川弁護士は、カメさんが、娘を死なせたと思い込み、罠にかけたんだ。それを、何とかしないとな」
と、十津川は、いった。
「片桐とも子を毒殺したのは、谷川ですよ」
西本が、決めつけるように、いった。
十津川は、肯いて、
「多分、そうだろう。だが、どうやって、それを証明できる？」
「谷川を、片桐とも子殺害容疑で、逆に逮捕したらどうですか？」
若い日下が、十津川を見ていった。
十津川は、苦笑して、
「そうしたいのは山々だがね。証明できなければ、誤認逮捕ということで、カメさんの立場が、ますます、不利になるよ。われわれが、カメさんを助けようとして、無実の谷川弁護士を逮捕したということでね」
「しかし、このままでは、カメさんが、逮捕されてしまいますよ」
と、日下が、いった。
「わかってるよ」
と、十津川は、いった。
その日のうちに、もっとまずい事態が発生した。
夜おそく、十津川の大学時代の友人で、中央新聞の記者をやっている田口から、電話があった。至急、会いたいというのである。亀井刑事のことだと

いわれて、十津川は、銀座の中央新聞まで、会いに出かけた。

田口は、黙って、大きな茶封筒から、一枚の写真を取り出して、十津川の前に置いた。

十津川の顔が、ゆがんだ。

亀井と、片桐とも子が、並んで、座席に腰を下している写真だった。とも子が、亀井の首に手を回して、ニッコリ笑っている写真である。

しかも、亀井の眼の部分は、黒い線が入っているので、余計に、いわくありげな写真に見えるのだ。

「これを、何処で？」

と、十津川は、きいた。

「うちで出している週刊誌の編集部に、送られて来たんだ。匿名でね」

「眼を消してあるが、これは、君のところで書いたのか？」

「いや、最初から、そうなっていたんだ。メモがついていた」

と、田口はいい、ワープロで書かれた手紙を見せてくれた。

〈十一月七日、下田行の特急「スーパービュー踊り子51号」の車内で、片桐とも子というホステスが殺されたが、その犯人は、驚くべきことに、警視庁捜査一課の現職の刑事、亀井氏と思われている。彼は、被害者を知らないと主張しているが、この写真が、それが、真っ赤な嘘であることを、証明していると思う。彼は、こんなふうにして、女を安心させておいて、毒殺したのだ。マスコミの力によって、このハレンチな刑事に、お灸をすえて貰いたい〉

「週刊誌では、のせたいといっているんだが、おれは、押さえたんだ。間違っていたら、大変なことだ

し、この匿名の主も、何となく、うさん臭いんでね」

と、田口は、いった。

「助かったよ」

と、十津川は、いった。

「亀井刑事とは、君の紹介で会ったことがあるが、浮気をかくすために、女を殺すとは、思えないんでね」

と、田口は、いってから、

「うちは、おれが押さえたが、こういう相手は、他のマスコミにも、同じものを送っている可能性があるよ」

「のせると思う週刊誌は、想像がつくかい？」

と、十津川は、きいた。

「新聞社系の週刊誌はうちと同じで、ためらうんじゃないかな。新聞の信用というのが、あるからね。出版社系の週刊誌は、のせるところが多いんじゃないかな」

「一番早く出る週刊誌は？」

「明後日に出る週刊Nだな。これは、もし、写真を送っていれば、必ずのるよ」

と、田口は、いった。

「明後日か」

「明後日の午後に出る」

と、田口は、いった。

「頼んで、押さえてくれないかな？」

「駄目だね。のせないでくれなんていったら、これは、本当だなと思って、逆に、のせる会社だよ」

と、田口は笑った。

6

十津川は、警視庁に戻ると、部下の刑事たちを集めて、コピーしてきた写真を、見せた。

「明後日の午後になると、これをのせた週刊Nが、出てしまうと思われる。だから、それまでに、絶対に、事件を解決しなければならない」

と、十津川は、いった。

「あと二日ありますね」

と、西本は、いった。

「眼を消してあると、余計に、生々しいなあ」

と、いったのは、日下だった。

「犯人は、知能犯だよ。もし、眼を消してなければ、カメさんが、寝ていて、女の方が、勝手に、ひとり芝居をしているとわかるんだが、こうしてあると、カメさんも、喜んでいるように見える。顔を隠してやっていると見せかけて、真実を隠してるんだよ」

十津川は、腹立たしげに、いった。

「それにしても、カメさんは、いい思いをしたんですねえ」

と、清水刑事が、感心したように、いった。亀井は、苦笑して、

「私は、何も知らずに、グースカ、眠っていたんだ」

「この写真を撮ったのは、誰かな？」

と、十津川が、呟やいた。

「そりゃあ、決っていますよ。谷川弁護士ですよ。彼が、同じ列車に乗っていて、片桐とも子に、こんな芝居をさせ、写真を撮ったんじゃありませんか？」

と、西本が、いう。

「そのあと、ご苦労といって、青酸入りのコーヒーをすすめて、殺したか」

「そうですよ。何とか、谷川が、同じ列車に乗っていたことを証明できれば、それが、解決の糸口になるんじゃありませんか？」

と、西本が、十津川に向っていった。

「谷川の写真は、手に入れてあるか？」
「大丈夫です」
と、日下が、いった。
「では、明日、あの列車に乗務していた車掌と、ビューレディに会って、彼の写真を見せてくれ」
と、十津川は、いった。
「私は、これから、家に帰って、息子の撮った写真を、見て来ます。今、あの時のことを思い出していたんですが、眠る前に、車内を見たとき、写真を撮っている人間は、ほとんどいなかったんです。私の息子は、車内を飛び廻って、写真を撮っていました。だから、ひょっとすると、谷川弁護士が、写っているかも知れません」
と、亀井は、いった。
亀井は、家に帰ると、妻の公子に、小声で、
「健一は、どうしてる？」
と、きいた。
「もう寝ましたよ」
「相変らず、様子は、おかしいか？」
「ええ」
「この間の旅行の写真は、もう、出来て来てるんじゃないのか？」
と亀井は、きいた。
いつも、健一が一緒に旅行したときは、写真は、彼が撮り、帰ると、さっさと、DPに持って行っていたからである。
今度のスーパービュー踊り子号でも、健一が、写真を撮りまくっていたから、帰ってすぐ、DPに出しているとと、思っていたのだ。
「それが、まだ、出来てないみたいですよ」
と、公子が、いう。
「おかしいな」
「いつもなら、自慢そうに、見せてくれるのに、今度は、違うんですよ。みどりが、早く見せてって

ったら、今度は、写真を撮って来なかったんだって、怒ったみたいに、いってましたけど」
「そんなことを、いってるのか」
「何かあったんですか？」
公子が、心配そうに、きいた。
亀井は、これ以上、妻に黙っているわけにはいかないと思い、自分が、疑われていることを、打ち明けた。
「知らないうちに、谷川弁護士に、恨まれていたというわけなんだ。ひどいもんだが、今のところ、反証が見つからないんだよ。健一の撮った写真の中に、ひょっとして、谷川弁護士が、写っていないかと思ってね。もし、写っていれば、彼が、片桐とも子を殺した可能性が出てくる」
と、亀井は、いった。
「健一は、フィルムを、何処へ置いてあるのかしら？」
公子は、呟やきながら、そっと、子供たちの部屋を、のぞき込んだ。
六畳の洋室に、兄妹の机と、ベッドが入っている。
「探してみましょうか」
と、公子が、いった。
二人で、そっと、子供たちの部屋に入り、健一の机の引出しや、服のポケットを探してみるのだが、フィルムは、見つからなかった。カメラは、壁にぶら下っていたが、その中にも、フィルムは、入っていないのである。
（捨ててしまったのだろうか？）
もし、そうなら、健一の写真に、何か手掛りをと思ったのだが、諦めなければならないだろう。
翌朝、いつもは、時間帯が違うので、子供たちが寝ている間に、亀井は、出勤してしまうのだが、今日は、どうしても、写真を見たくて、健一を、起こ

した。
「列車の車内を写した写真が、必要なんだよ。何処にあるんだ？」
と、亀井は、きいた。が、健一は、熱のない顔で、
「ないよ」
「ない筈はないだろう。列車の中で、カメラを持って、飛び廻ってたじゃないか」
「あの日は、写さなかったんだ」
「どうして？　いつも、フィルムの二本も、三本も写すじゃないか」
「あの日は、フィルム入れるの忘れちゃったんだよ」
と、健一は、面倒くさそうにいい、そっぽを向いてしまった。
亀井は、だんだん、腹が立ってきた。見えすいた嘘と、思ったからである。健一は、小心なところがあって、明日、何処かへ出かけるという時には、前の日の夜、きちんと、用意をするのだ。フィルムだって、ちゃんと、カメラに入れてから寝るのを、亀井は、知っている。
「いい加減にしろ！」
と、亀井は、怒鳴りつけ、そのまま、家を出てしまった。
おかげで、定期券を忘れてしまい、久しぶりに、切符を買って、電車に乗る破目になった。
十津川は、片桐とも子と、谷川弁護士の関係を、調べさせた。
谷川は、彼女が、亀井にレイプされたので、告訴したいといい、その相談にのっていたと、いっている。つまり、弁護士と、依頼人の関係ということである。
しかし、十津川は、そう見てはいない。もし、彼女が、レイプされたのなら、その相手は、谷川弁護

士ではないのかと、思っていた。
西本たちは、彼女のことを、もう一度、徹底的に調べ直した。
その結果、一つのことが、印象づけられた。それは、銀座のクラブで働く同僚のホステスたちの、彼女についての証言である。
片桐とも子が、レイプされて、告訴について弁護士に、相談していたというと、ホステスたちは、一様に、笑い出した。
「それ、何かの間違いじゃないの」
と、ホステスの一人は、西本に、いった。
「なぜだ？」
「そんな純情というか、純粋な女じゃないわよ。彼女が、引っかけたというんならわかるけど」
と、そのホステスは、いった。彼女のマンションで聞いたのだから、嘘ではないだろう。他のホステスや、ママや、マネージャーに、気を遣うことはないからである。
「彼女が引っかけたというと、前にも、そんなことがあったのかね？」
と、西本は、きいてみた。
「これは、聞いた話なんだけど、彼女、土地成金のおじいさんを引っかけて、一千万ばかり巻きあげたって、聞いたことがあるわ」
「どんな風に、引っかけるんだろう？」
「古典的な方法みたい」
「古典的？」
「よくあるじゃないの。愛し合ってるように振る舞っておいて、二人だけの写真を撮るのよ。男の方は、ニヤついて、裸で抱き合ってる写真だって、喜んで撮らせるわ。その写真で、ゆするわけ。特に、相手が、妻帯者で、まじめな仕事をしていれば、何百万か何千万か、取れることになるのよ。土地成金のおじいさんも、市会議員だったから、スキャンダ

ルが怖くて、一千万ばかり、払ったんだと思うわ」
「そういう前科があれば、レイプされたんで、告訴するというのは、おかしいね」
「そんなヤワな女じゃないって」
と、そのホステスは、いった。
もう一つは、片桐とも子が働いていたクラブに、谷川弁護士が、客として、来たことがあるかどうか、ホステスの一人一人に、聞いて廻った。谷川の顔写真を見せてである。
クラブで、ナンバーワンといわれるホステスが、谷川を覚えていた。
「四、五人で、見えたんだと思うわ。その後、一人で来たこともあったけど、一人の時は、彼女が、ぴったり、くっついてたみたいね」
と、ナンバーワンのホステスは、いった。
「それは、谷川弁護士が、彼女を、気に入っていたからかな？」
「それもあるだろうけど、彼女が、谷川さんのことを、いいカモだと、思ったんじゃないかしら」
と、相手は、笑った。
「いいカモというのは？」
「谷川さんね。自分で、大変な財産家だといっていたからだわ。それに、弁護士なら、悪い相手じゃないと、思ったんじゃないかしら」
「財産家というのは、嘘だと思うけどね」
「それなら、彼女、欺すつもりで、欺されたんじゃないかな」
と、相手は、いった。

7

どうやら、これで、レイプ云々という話は、嘘と、わかった。亀井はもちろん嘘だが、谷川弁護士が、レイプしたのでもないようだった。

片桐とも子が、金になると思って、谷川弁護士に近づいたというのが、真相と見ていいだろうと、十津川は、思った。

問題は、そのあとである。

とも子が、古典的な方法で、谷川をゆすったとする。つまり、写真を使ってである。弁護士は、一応、正義の味方だから、スキャンダルは、命取りになりかねない。

といって、谷川の家が、資産家だという話は、聞いていないから、谷川は、今度は、彼女を欺してやろうと、考えたのではないか。

「例えば、一千万やるから、ちょっとした芝居をしてくれと、谷川は、片桐とも子に、いったんじゃないかね」

と、十津川は、亀井に、いった。

「私に抱きついて見せることですか？」

と、亀井は、例の写真を、思い出しながら、いった。

「そうだよ。まず、十一月七日のスーパービュー踊り子号に乗ること。そして、車内で、君と親しくしているように、振る舞うことをね」

「私が、寝ていなかったら、どうするつもりだったんですかね？　それに、私の息子が、席を離れなかったら、どうする気だったんでしょう？」

と、亀井が、きいた。

十津川は、笑って、

「相手は、男に対しては、ベテランのホステスだよ。そこは、臨機応変にやる筈だったんだろうさ」

「そうでしょうね」

「そして、谷川が、写真を撮る。そのあと、ご苦労さんといって、青酸入りのコーヒーを渡す。彼女は死に、谷川は、列車から降りてしまうということだよ」

と、十津川は、いった。

「やはり、あの列車には、谷川が、乗っていたんですね」
「写真を撮ったり、毒入りのコーヒーを飲ませるのを、他人に委せたりはしないよ。失敗したら、命取りになるからね」
と、十津川は、いった。
「何とかして、谷川が、あの日、あの列車に乗っていたことが、証明できればいいんですが」
「息子さんの写真は、どうだったの？」
と、十津川が、きいた。
亀井は、首を振って、
「それが、どうも、息子の機嫌を損じてしまいまして」
と、いった。
「息子さんの写真が、駄目だとすると、他に写真を撮った乗客を探すよりないか」
「そうですね」
「その場合は、見つかっても、あまり期待は、持てないかも知れないよ」
「なぜですか？」
「息子さんなら、カメさんのことを写していると思うが、他人なら、カメさんの周辺は、撮らないから、近くに、谷川弁護士がいても、写してないだろうからね」
と、十津川は、いった。
「ただ、息子が、私の周辺を撮っていたので、まずいことになっているんですよ」
と、亀井は、いった。
「逆にいえば、期待は、持てるということだな」
「そうですが、怒って、捨ててしまっているかも知れません」
と、亀井は、悲し気にいった。
その時、若い警官が、入って来て、亀井に、紙袋を渡した。

中をのぞくと、フィルムのパトローネが三本と、メモが、入っている。メモには、妻の公子の文字で、

〈健一が、出してくれました。　公子〉

とだけ、書いてあった。

亀井は、すぐ、三本のフィルムを、現像して貰うことにした。時間がないので、急いで貰った。

現像し、引き伸された百枚を越す写真を、机の上に並べて、十津川と、亀井が、一枚ずつ、見ていった。

鉄道マニアの健一らしく、写真の大部分は、列車そのもので、乗客は、写っていなかった。

列車の正面、側面、二階のグリーン席に行く階段、10号車のプレイルーム（子供部屋）、1号車のサロン室などの写真である。

残りの十六枚には、乗客が、写っていた。中には、片桐とも子が、亀井の隣りに、腰を下している写真もあった。カメラを向けたのが、子供だったせいか、とも子は、眠っている亀井の肩に手を回し、片手で、Vサインしている。

（これで、健一は、つむじを曲げたんだな）

と、亀井は、思った。

ビューレディを、写しているものもあった。だが、谷川が写っている写真は、見つからなかった。

「ありませんね」

亀井は、がっかりした顔で、いった。

「もう一度、見てみようじゃないか」

と、十津川はいい、人間が写っている写真だけを、一枚ずつ、もう一度、調べていった。

列車の前で、記念写真を撮っているグループは、その一人一人の顔を、虫めがねで見た。その中に、谷川がいるかも知れなかったからである。

だが、いなかった。どの顔も、谷川ではなかった。
「ないねえ」
と、今度は、十津川が、溜息をついた。
「残念ですが、谷川は、自分が見つかっては困るので、カメラの中に入らないようにしていたんだと思います」
と、亀井は、いった。
「そういえば、そうだな」
と、十津川は、肯いていたが、突然、立ち上ると、
「カメさん。谷川弁護士に会いに行こう」
「しかし、当事者の私が、直接会うのは、まずいんじゃありませんか？」
「いや、構わないさ。会って、文句をいってやりたまえ」
と、十津川は、いった。
タクシーで、村田法律事務所に行き、谷川弁護士に会った。
「亀井です」
と、名乗ると、さすがに、谷川は、気まずそうな顔になったが、それでも、
「あなたには、申しわけないが、事実は、曲げられないので――」
と、いった。
「なぜ、嘘をつくんですか？　私は、片桐とも子という女は、全く知りませんでしたよ」
と、亀井は、谷川の顔を、睨むように見た。
「レイプした女を、知らないというのは、まあ、無理もありませんがね」
「何だと！」
と、思わず、亀井が、怒鳴るのを、十津川は、手で制して、
「カメさん、帰ろう」
と、いった。
法律事務所を出たところで、亀井は、

「警部」
「何だい？」
「あれだけのために、谷川に会いに行ったんですか？　他に、用があったんじゃないんですか？」
と、亀井は、思わず、文句をいってしまった。
十津川は、笑って、
「用は、すんだんだよ」
「どんな用ですか？」
「戻ってから、話すよ」
と、十津川は、いった。
警視庁に帰ると、十津川は、もう一度、机の上の写真を、見ていった。
「カメさん」
と、十津川が、急に、興奮した声を出した。
「何です？」
「谷川は、やっぱり、乗っていたんだよ」
「そうでしょうが、写真がなければ、どうしようもありません」
「あるよ。ここに、ちゃんと写っているよ」
と、十津川は、一枚の写真を、指さした。
亀井は、変な顔をして、
「これは、1号車の二階のグリーンですが、後方から、前部の展望を、撮った写真ですよ。人間は、一人も、写っていませんよ」
「写っているじゃないか。手前に、大きく、人間の左手が写ってるよ」
「これは、座席に置いている乗客の左手ですが、顔は、写っていませんが」
「そうさ。だが、その左手をよく見てみたまえ。指先をだ。小指に、指輪をはめている。それも、面白い模様のついた金の指輪だよ。花の模様が、彫り込んであるんだ。これは、すずらんだ」
「そういえば、すずらんみたいですが」
「それで、今日、谷川に、会いに行ったんだ。カメ

さんが、喋っている間、私は、彼が、左手の小指にはめている指輪だけを見ていた。間違いなく、これと同じ指輪だったよ」

十津川は、きっぱりと、いった。

「それなら、もう間違いありませんね」

「もう一つ、写真の左手の手の甲に、小さい傷が、見えるだろう。明らかに、ナイフか何かで切った傷だ。治ったが、傷痕が、残ったというやつだ」

「その傷も、ありましたか？」

亀井が、きくと、十津川は、嬉しそうに、

「ビンボーン」

と、おどけて、いった。

8

問題の写真は更に、大きく引き伸された。

左手の指輪と、傷も、大きく、はっきりしてきた。

それに、よく見ると、前から、何番目の座席かも、わかってくる。

前から五列目の、通路側の座席である。

亀井の顔が、輝やいた。

「片桐とも子が、死んだ座席は、前から五列目でしたよ。窓側でしたが」

「つまり、最初、谷川は、彼女の隣りに、腰を下していたんだよ。それから、彼女を、君の隣りに座らせて、写真を撮り、そのあと、毒入りのコーヒーを、飲ませたんだ」

「そう思います」

と、亀井は、肯いた。

「しかし、車掌は、片桐とも子の顔は、覚えていたが、その隣りの男が、谷川だとは、覚えていなかったんじゃありませんか？」

と、いったのは、西本刑事だった。

十津川は、笑って、
「それでいいんだよ」
「というのは、どういうことなんですか？」
「谷川弁護士が、素顔で乗ったとは、思わないんだよ。とにかく、車内で、片桐とも子を毒殺するんだからね。だから、きっと、変装して、乗っていたと思うよ。かつらをかぶるとか、眼鏡を変えるとか、つけひげをするとかね。だから、健一君の写真に、谷川の顔が写っていなくて、かえって、よかったんだよ。もし、写っていても、谷川と、わからなかったかも知れないからね。この左手の写真の方が、谷川であることの証明になるし、彼は、絶対に、写真に撮られていないという自信があるんだろう」
と、十津川は、いった。
「これから、どうしますか？」
西本がきいた。
十津川は、ニッコリして、
「もちろん、逮捕する」
と、いった。
十津川たちが、逮捕令状をとって、村田法律事務所に出向くと、谷川弁護士は、眼をむいた。
「部下の亀井刑事を、かばいたい気持はわかりますが、証人の私を逮捕して、口封じを図るのは、卑劣すぎませんか？」
と、谷川は、いった。
村田所長も、十津川を睨んで、
「谷川弁護士は、事件の日、自宅で、寝ていたんですよ。風邪をひいてですよ。それが、なぜ、車内で、被害者を、毒殺できるんですか？」
「谷川弁護士は、乗っていたんですよ」
と、十津川は、いい、問題の写真を見せた。
十津川が、写真の左手について、説明していくにつれて、村田所長の顔色が、変っていった。
谷川弁護士は、不安気に、村田を見ている。

十津川が、写真に写っている指輪について、説明を始めると、村田の表情は、更に暗くなっていった。

（この所長は、谷川の指輪のことを、よく知っているんだ）

と、十津川は、思った。

「私は、関係ない。七日は、家にいたんだ。スーパービュー踊り子号には、乗ってなかったよ」

と、谷川は、大声で、わめいた。

今まで、谷川を擁護していた村田は、急に、冷たい口調で、

「谷川君。黙っていたまえ」

と、突き刺すように、いってから、十津川に、

「彼が乗っていたとして、なぜ、亀井刑事を罠にかける必要があるんですかね？」

と、きいた。

谷川も、力を得たように、

「そうだ。私には動機がない。私は、前から亀井刑事を知っていたわけじゃないんだから」

と、いった。

「谷川さんの娘さんのことが、動機だと思っていますよ」

と、十津川は、いい、谷川の離婚のこと、母親についた娘が、グレて、青年と車を盗み、暴走して、死亡するまえ、その車を追ったパトカーに、亀井が乗っていたことを、話していった。

今度は、谷川本人の顔が、急速に、青ざめていった。

「あんな娘のために、なぜ、私が、仇を討たなければならないんだ！　私のことなんか、バカにしていた娘のために、なぜ私が――」

谷川の声が乱れ、急に、泣き出した。

十津川も、気付かなかったのだが、谷川弁護士にとって、一人娘の存在は、アキレス腱だったらし

い。恐らく、彼女を、谷川は、溺愛し、同時に、憎んでいたのだろう。

だから、十津川が、彼女のことに触れたとたんに、谷川は、激しく動揺してしまったのだ。

「わかりました」

と、村田所長は、かたい表情で、十津川にいった。

そんな所長の態度に、谷川は、狼狽した顔で、

「所長。妥協しないで下さい。私は、別れた家内も、娘も、愛してなんかいませんでしたよ。あんな娘のために、仇討ちなんかしませんよ！」

と、甲高い声をあげた。

「谷川君」

と、村田は、抑えた声で、呼びかけて、

「私はね。君がいつも、若い女の写真を、机の中に入れているのを、知っているんだよ。あれが、君の娘さんの写真なんだろう？」

「――――」

「十津川さん」

と、村田は、十津川の顔を見て、

「私が、谷川君の弁護を引き受けますよ。今度は、バカなことをしたが、いい奴ですからね」

と、いった。

＊

谷川弁護士を逮捕したあと、十津川は、静岡県警にも、この間の事情を、電話で説明した。

最初は、驚き、疑問を持って、質問をぶつけてきたが、最後には、納得してくれたようだった。

十津川は電話を置くと、今度は、亀井に向って、

「これで、事件は終ったが、カメさんは、当分、健一君に、頭が上らないね。彼の写真がなかったら、なかなか、カメさんの無実を証明できなかった筈だ

からね」
と、いった。
「その通りです。今回は、息子に助けられました」
と、亀井は、いった。
この日、家に帰る途中、亀井は、新宿でおりて、カメラ店に寄った。
息子の健一は、三年前に買い与えたカメラを使っていて、毎年のように、新しいカメラが欲しい、列車の写真を撮るのに、望遠レンズつきのカメラが欲しいと、いっていたのを、思い出したからだった。
まだ、年末のボーナスには、間があるので、高いカメラは買ってやれない。だから、カメラを安く売るという専門店に、やって来たのである。
「望遠レンズのついているカメラが、欲しいんだがね。多少、旧式でもいいんだ」
と、亀井は、店員にいった。
普通と、望遠の二通りに切りかえられるカメラがあると、店員は、いった。その中から、去年に発売されたものを、三割引で買って、家に帰った。
だが、健一は、もう寝てしまっていた。
亀井は、メモ用紙に、「写真をありがとう。おかげで、パパは、助かった。これは、そのお礼だ」と、書いた。
「これを、明日、健一に渡しておいてくれ」
と、亀井は、妻の公子に、いった。

十津川警部C11を追う

1

十津川に限らないだろうが、成人した人間にとって、いくつかの同窓会がある。高校まで出ている人間でも、三つの同窓会がある筈である。

十津川も、大学の同窓会には、何回か出席していたが、高校の同窓会に出るのは、今回が、初めてだった。というより、同窓会の知らせが来たのが、初めてのような気がした。

来ていたのかも知れないが、十津川が、眼にしたのは、社会に出てから、初めてである。

十津川が出たのは、世田谷区内にある公立のS高校で、今でもそうだが、野球の弱い学校だった。都の大会でも、一回戦で負けるような具合で、今でも、春、夏の高校野球で、母校の名前を聞いたことがないくらいである。

こんな学校では、時々、妙に強い部があるものだが、S高でも、十津川のいた頃、バドミントンが、男女とも、強かった。

全国大会に出たくらいだが、当時、十津川の親友だった宮下も、バドミントンの選手で、三年の時には、確か、チームの主将で、全国大会に出た筈である。

十津川の記憶の中では、痩せて、長身で、カッコが良かった男だった。事実、仲間の間では、女生徒に、よくもてていた。ただ、何といっても、二十年以上も前のことだから、どんな中年になっているだろうか？

S高の同窓会の知らせが届いた時、十津川が、最初に思い浮べたのは、その宮下のことだった。

大学時代の同窓生は、時々、連絡があって、誰が、今、何をしているか、だいたいわかるのだが、高校時代のとなると、ほとんど、知らないのである。それがわかるのは、嬉しいと思い、十津川は、出席の返事を出しておいた。

二月十七日に、十津川は、会合場所である新宿の「ふくい」という鍋料理の店へ出かけた。

十津川が、高校時代にいたクラスは、男子と女子で、四十人。卒業後、全員が、東京に住んでいるとは限らないし、女子の場合は、結婚して、子供も出来ている年齢だから、半分も集まればいいと、十津川は、思っていた。

通知にあった午後六時少し前に行ったのだが、来ていたのは、幹事役の三田ひとりだった。

小太りの中年男に、「三田だよ」といわれても、十津川は、すぐには、ぴんと来なかった。

高校時代の三田は、小柄な美少年で、文化祭で女装すると、女生徒より美しく見えたものだったからである。それが、無残に太って、髪も、うすくなっている。

十津川は、改めて、二十三年間の月日の長さを感じて、

「見違えたよ」

と、いうと、三田も、笑って、

「そりゃあ、お互い様だ」

「おれも、変ったかね？」

「変ったよ。よくいえば、貫禄がついたんだろうが、十代の面影今いずこだ」

と、三田は、無遠慮にいった。

十津川は、いささか、がっかりした気分になった。おかしなもので、自分だけは、昔の通りの若さを保っていると、錯覚しているのだ。精神的には、

若さは保てる。だが、悲しいことに、肉体は、どんどん衰え、変っていく。そのことを、嫌でもわからされてしまう瞬間というものがある。今が、それだった。

（おれも、こいつみたいに、変ってしまったのか）

と、十津川は、思いながら、

「今日は、何人くらい集るんだ？」

と、三田に、きいた。

「十六人から、出席の返事が来てるんだが、みんな、働き盛りだからね。仕事で、来られなくなる奴が、必ずいると思うし、今日も二人、出席できなくなったと、電話して来たのがいる。だから、まあ、十二、三人だろうね」

「そんなものかね。女子は、殆ど来ないんだろう？」

「まあね。理解のある旦那というのは、今の世の中でも、少いからね。それでも、三人は、来ることになっているよ」

「三人か」

「クラスメイト同士で、結婚した奴がいる。この二人は、来るよ。それに、もう一人。美人が来る」

「美人？　四十歳の美人か」

「竹中みよ子って、覚えてるか？」

「名前は、何となく覚えてるんだが、顔を思い出せないな」

「そうだろう。高校時代は、目立たない女の子だったからね。S高を出てから、彼女は、俳優学校に入って、女優の道を選んだ」

「ほう」

「それが、結婚してやめたんだが、三年前に、離婚してね。また、芸能界に復帰したんだ」

「しかし、竹中みよ子という女優は、知らないがね」

「芸名は、江口亜紀だ」

「その名前なら、聞いたことがある」
「美人だぞ」
と、三田は、また、いった。
「宮下も来るのか？　バドミントンをやっていた」
と、十津川がきくと、三田は、
「そうだ。彼とは、仲が良かったな」
「ああ」
「来ることになってるが、例のことには、触れないようにしてくれよ。あいつは、神経が、細かいからな」
と、三田は、いった。
「例のことって、何だい？」
「例のことだよ」
「何のことか、わからないんだが」
「本当に知らないのか？」
「ああ」
「八年前、おれが幹事役で、初めて、同窓会をやったんだ。そういえば、あの時、君は、来なかったな」
「八年前なら、おれは、一年間、パリのインターポール本部に、出向していた筈だ」
「それで、例の事件を、知らないんだな」
と、三田は、いい、事件というのを、説明してくれた。
その時の同窓会には、二十三人が集った。宮下は、丁度、結婚したばかりで、大いにからかわれ、羨やましがられもした。
宮下と、特に仲の良かった五、六人が、次の日曜日に、新婚の宮下夫婦を誘って、旅行しようということになった。
その一人が、アメリカ製の大型バンを借りて来て、それに七人が乗り込んで、一泊二日の旅行に出かけた。
ところが、運転を誤って、車は、三十メートル下

の谷に転落し、宮下の新妻が即死し、三人が、重軽傷を負った。

「おれは、参加しなかったんだが、誘った連中だって、良かれと思って、したことだしね。宮下の気持を考えて、その後、同窓会をやらなかったんだ」

と、三田は、いった。

「それが、今度、やることにしたのは？」

「宮下の気持が、やっと癒やされて、今度、再婚の話が起きていると、聞いたからだよ。宮下が来るというので、今夜は、賑やかにやって、八年前の傷を、完全に、治してしまおうと思ってね。だから、宮下本人が話すんならいいが、他所から、あの事件に触れるのは、よそうと思っているんだ」

「わかった」

と、十津川は、いった。

六時になると、その宮下も、顔を見せた。

2

その夜、集ったのは、結局、十二人だった。

その中には、三田のいっていた女優の江口亜紀も入っていて、一座の人気をさらってしまった。

女性は、あと二人で、同じクラスメイトの高梨と結婚した鈴木みどり、それに、ずっと独身で、現在、大手の自動車会社で、セールスの仕事をしているという原可奈子だが、やはり、二人とも、年相応の女になっていた。

幹事役の三田が、多分、計画したのだろうが、静かに始まった会は、途中から、飲めや歌えになり、二次会、三次会と続いて、別れたのは、夜明け近かった。

酒に弱い十津川は、ひどい二日酔いになり、二月十八日は、電話して、休みをとる破目になった。

それから二日後の二月二十日、警視庁捜査一課

に、三田から、電話があった。
「先日は、どうも有難う。久しぶりに、みんなに会えて、嬉しかったよ」
と、十津川が、いうのを、三田は、さえぎるようにして、
「内密で、君に相談したいことがあるんだ。すぐ、会ってくれないか」
と、いう。
切羽つまったいい方に、十津川は、心配になって、午後六時に会うことを、約束した。
幸い、事件が起きなかったので、西新宿の喫茶店で、三田に、会った。
「君は、秘密が守れるだろうね？」
と、三田は、真剣な表情で、きいた。
「刑事というのは、秘密を守るのも、一つの仕事みたいなものでね」
十津川は、コーヒーをかき回しながら、いった。
「それならいい。困ったことが、起きた。いや起きそうなんだ」
「どんなことなんだ？」
と、十津川は、きいた。
「或いは、おれの勝手な妄想かも知れないんだが、心配でね」
「何を心配しているのか話してくれないと、相談にのれないんだがね」
十津川は、苦笑しながら、いった。
三田は、ニコリともしないで、
「宮下のことなんだよ」
「彼が、どうしたんだ？　同窓会の時は、元気だったじゃないか」
「彼が、再婚することは、話したね」
「ああ。宮下からも、写真を見せて貰ったよ。きれいな人だったが、それが、どうかしたのか？」
「明日、結婚式をあげる」

「それは、聞かなかったな。おれは、招待されてないよ」
と、十津川は、いった。
「おれもなんだ」
「しかし、S高を出てから、二十三年もたっているんだから、仕方がないさ。宮下だって、二十三年の間に、友人は出来た筈だからね」
と、十津川は、いった。
十津川だって、自分の結婚式に、S高の友人は、一人も、招待しなかった。
「もちろん、それに文句をいってるわけじゃないんだ」
と、三田は、いった。
「じゃあ、何を心配してるんだ？」
「宮下は、S高の仲間五人を、明日の結婚式に、招待しているんだ」
「なるほどね。それで、君は、文句をいいたいわけか？　同窓会の幹事役までしたのに、なぜ、おれを、招待しないのかって」
と、十津川が、いうと、三田は、眉を吊りあげて、
「馬鹿なことをいわないでくれ！」
と、怒鳴った。
十津川は、あわてて、
「悪かった。君の心配を聞かせてくれ」
「おれは、誰が招待されても、構わないよ。ただ、招待された人間が、問題なんだ」
「ちょっと待ってくれよ」
と、十津川は、相手を制して、
「五人が招待されたといったね？」
「そうだ」
「八年前、大型のバンに、七人が乗っていて、事故を起こし、宮下の奥さんが亡くなった。宮下夫婦を除くと、五人だ。その五人が、招待されたというこ

となのか？」
と、十津川は、きいた。
「そうなんだよ」
「なるほどね。君の心配の理由が、わかってきたよ」
「杞憂に過ぎなければ、いいんだがね」
「しかし、八年前の事故は、偶発的なものだったんだろう？」
「もちろんだよ。小雨が降っていて、道路が、スリップしやすかったこともあるんだ」
「だが、宮下は、五人のせいで、奥さんが死んだと思っているんじゃないか。君は、そう思うのか？」
「あくまで、おれの勝手な心配だがね」
「しかし、宮下は、その傷を忘れて、再婚するんだろう？　五人を恨んでいて、復讐する気なら、再婚なんかしないんじゃないか」
と、十津川は、いった。
「おれも、そう思っていたんだが――」
「だが、何なんだ？」
「再婚の相手が、八年前に死んだ奥さんの妹なんだ」
「妹？」
「ああ、新婚早々の宮下夫婦を、昔の悪友が、無理矢理、旅に誘って、そのために、姉が死んだと、妹は、思っているかも知れない」
「宮下は、何処で、結婚式をあげるんだ？」
と、十津川は、きいた。
「それが、わからないんだ」
「なぜ？」
「なぜって、おれは、招待されてないからな」
「じゃあ、招待されている五人に、電話して、聞けばいいじゃないか」
「もちろん、今日、ずっと電話してるよ。だが、いないんだよ」

と、三田は、いった。
「いないって、五人ともか？」
「ああ。五人とも、東京にいないんだよ」
「なぜだ？」
「そういわれても困る。電話しても、いないんだ」
「五人の名前は、わかるんだろう？」
「ああ。ここに書いてある」
三田は、手帳を広げて、十津川に見せた。
八木章二
中西文明
高梨啓一郎
〃　みどり（旧姓鈴木）
江口亜紀（竹中みよ子）
名前の下には、電話番号も、書き込まれていた。
「これ、全部に、電話してみたのか？」
と、十津川は、もう一度、きいた。
「してみたよ。江口亜紀は、マンションにいない」
「しかし、プロダクションで、居場所が、わかるんじゃないのか？」
「プロダクションにも、電話をかけたよ。ところが、彼女は、友人の結婚式に出席するといって、今日と明日の二日間、休みたいと、いったんだそうだ」
「二日間？　二日間もかけて、結婚式をやるのか？」
「いや、おれは、明日、二十一日と、聞いているだけだ」
「高梨夫婦は、二人とも招待されているんなら、夫婦で、いなくても、仕方がないな。八木は、どうなんだ？　奥さんは、家にいるんだろう？」
と、十津川は、きいた。
「それが、いないんだ。恐らく、八木が、二日間、出かけるので、奥さんは、子供を連れて、実家へで

も、帰ったんだと思う。おれは、奥さんの実家が何処か、知らないんだよ」
「中西は？」
「同窓会の時に、中西がいってたが、ずっと、奥さんと、うまくいかなくて、別居中らしい。だから、奥さんも、中西の行動を、知らないんだ」

3

「それで、五人とも、どこにいるか、わからずか」
「そうなんだ」
「宮下の結婚式は、明日、二十一日なんだな？」
と、十津川は、念を押した。
「確か、中西に、そう聞いたことがあるんだ。こんなことになるんなら、場所も、聞いておけばよかったと、思っているんだが」
三田は、口惜しそうに、いった。
「東京以外で、式をあげるのかも知れないな」
「東京以外？」
「ああ、宮下の故郷は、何処だったかな？」
「彼は、東京の生れだが、もともとは、札幌が故郷だと聞いているよ」
「それなら、札幌で、式をあげるんじゃないのか。当日に行ったのでは間に合わないんで、五人は、前日の今日、向うへ行ってるんじゃないかな？」
「なるほど」
と、三田は、肯いたが、すぐ、首を横に振って、
「それは、違うね。八年前、宮下が、結婚した時、東京で、式をあげているんだ。だから、今回も、札幌へ行くとは、思えないよ」
「宮下の両親に聞けないのか？」
「駄目だよ。両親だって、式に出るんだから、宮下が、いなければ、両親も、いないよ。何処かへ、行ってしまってるんだ」

と、三田は、肩をすくめた。
「お手上げか」
「刑事の君に、そんなことをいわれたら困るよ。助けて貰いたいんだから」
と、三田は、いう。
「君は、本当に、宮下が復讐を考えていると思うのか？」
十津川は、改めて、きいた。
「そうでなければいいがと、思っているんだがね」
「どうしたらいいか――」
と、十津川は、しばらく、考えていたが、
「君は、同窓会の世話役だったから、宮下の住所は、知っているね？」
「ああ、行ったことはないが、住所も、電話番号も、知っているよ」
「ともかく、そこへ行ってみよう」
と、十津川は、いった。
三田の手帳に控えてあった阿佐谷のマンションへ、二人は、行ってみることにした。
ＪＲ阿佐ケ谷駅から、歩いて十二、三分のところにある七階建のマンションだった。
「ヴィラ阿佐ケ谷」という名前を確めてから、エレベーターで、五階にあがった。
５０３号室の前に行くと、「宮下」の小さなネームプレートが、ドアについていた。
〈二十日から五日間留守にしますので、新聞と牛乳は入れないで下さい〉
宮下の字で、そう書いた紙が、貼ってある。
「やはり、今日から、何処かへ出かけているんだよ」
と、三田は、十津川に、いった。
「五日間というと、そんなに長いハネムーンじゃな

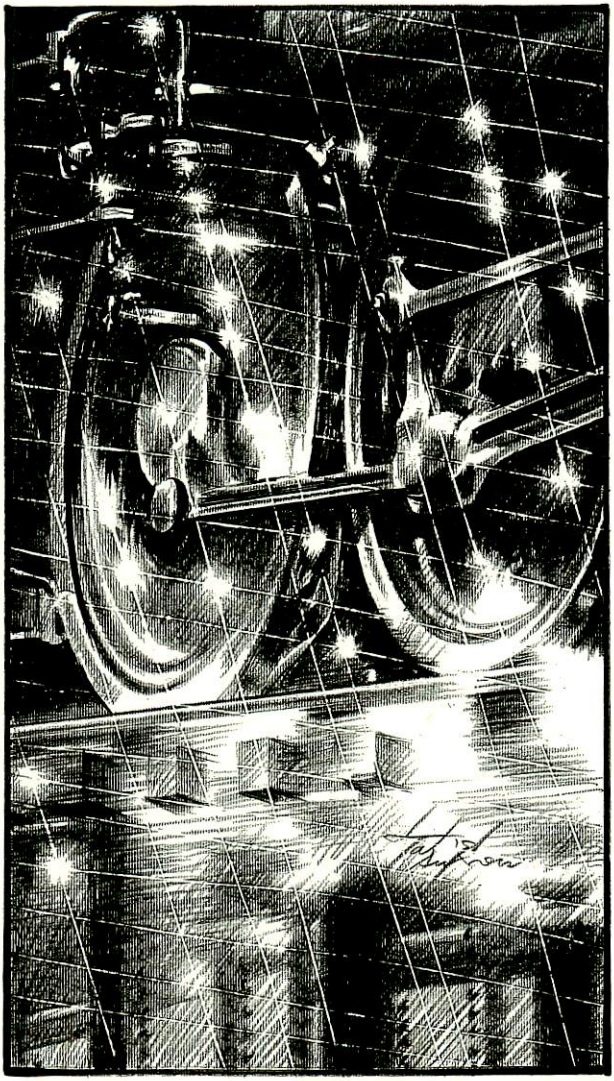
いね。しかも、結婚式が明日だとすると四日間だ」
十津川は、小声で、いった。
「何をぶつぶつ、いってるんだ？」
「おれがいいたいのは、四日間だと、遠くには行けないということだよ。ハネムーンは海外には行かないだろうということだ。国内のハネムーンになっていると思うね」
「そんなことは、君にいわれなくても、わかってるよ」
三田は、怒ったような声を出した。
「まあ、冷静に考えてみようじゃないか。明日二十一日が、結婚式とすると、ハネムーンに使えるのは、三日間だ。その上、宮下の故郷の札幌で、式をあげるとは思えない。だが、東京での式ならば、前日の今日、全員が、何処かへ出かけることは、考えられない。と、すると、国内旅行だが、東京を離れた場所で、式をあげることは、間違いないと思うんだよ」
と、十津川は、いった。
「それも、わかってるよ」
「宮下が、復讐のために、五人を招待したと、考えてみよう」
「それで？」
「君だったら、どんな結婚式に、招待すると思うね」
「そんなこと、わからんよ」
「例の事故は、何処で、起きたんだ？」
と、十津川は、きいた。
「あれは、確か寸又峡温泉へ行く途中だったよ。おれが、行ったわけじゃないので、はっきりは、わからないんだが、大井川に沿って、寸又峡へ行く途中だった筈だ。笹間というダムの先だったと思うよ」
と、三田は、いってから、
「それが、何か、関係があると思うのか？」

「復讐という場合、因縁のある場所でということが多いんだ」
と、十津川は、いった。
「じゃあ、宮下は、寸又峡へ五人を招待したというのか？」
「君が、五人の中の一人だとして、宮下から、寸又峡に招待されたら、行くかね？」
十津川は、逆に、きき返した。
「おれが？　多分、二の足を踏むねえ。何しろ、八年前のことがあるからね」
「それなら、五人も、遠慮するさ」
「じゃあ、考えても、仕方がないじゃないか」
三田は、怒ったような声を出した。
十津川は、笑って、
「すぐ腹を立てるのは、S高時代のままだな。今、思い出したんだが、あの頃、君は、物理の教師を殴って、停学をくらったことがあったじゃないか」
「昔の話だよ。それより、君の考えを、教えてくれ」
と、三田はいう。
「寸又峡へ来てくれと宮下がいえば、誰も行かないだろう。それは、当然だよ。宮下が、何を考えているか、わからないからだ。だが、五人は、招待を受けている」
「寸又峡じゃない所へ招待されたからだろう」
「それなら、宮下は、五人に復讐はしないとみていいよ。もし、復讐を考えているのなら、奥さんの死んだ場所を選ぶ筈だからね」
「これじゃあ、ちっとも、前に進まないじゃないか」
と、三田は、文句を、いった。
「君の心配する通りなら、宮下は、五人を、寸又峡か、或いは、車が転落した場所に、招待した筈だよ」

「しかし、それじゃあ、五人は、招待を断った筈じゃないか」
「現場近くで、結婚式をあげるといったが、五人は、断らなかった。多分、そういう、うまい場所があったんだ」
「そんな場所があるかね？」
「一つだけあるよ」
と、十津川は、いった。

4

「どんな場所だ？」
と、三田が、きいた。
「前に聞いたことがあるんだが、大井川沿いを走っている大井川鉄道には、いろいろなイベント列車が走る」
「大井川鉄道なら、乗ったことはないが、おれも知っているよ。蒸気機関車を、走らせたりしているんだろう？」
「そうだ。面白い私鉄で、普通の電車の他に、電気機関車や、SLを走らせている。イベント列車も、夏のビール列車、ジャズ列車など、いろいろあってね。その中に、結婚式列車も、あったと思うんだよ」
「結婚式列車？」
「車内で、式をあげるのさ。ひょっとすると、宮下は、それで、結婚式をやるといって、五人に、招待状を出したんじゃないかな。列車の中での結婚式は、とっぴで面白い。まさか、復讐を考えているとは思わず、五人は、招待に応じた。ところが、列車は、いやでも、八年前の転落場所の近くを通って行く」
と、十津川は、いった。
「しかし、なぜ、五人は、当日の明日ではなく、今



日中に、行ってしまったんだろう？」

「明日は、別に、大井川鉄道の休みの日じゃない。定期の列車は、ちゃんと走っている。その間をぬって、イベント列車を走らせるんだから、希望する時間というわけには、いかないんじゃないか。もし、午前中の早い時間になっていれば、明日では間に合わない。だから、今日、出かけたんじゃないかな。それに、静岡なら、温泉がある。宮下が、今日、二十日は、五人を、温泉に招待しているのかも知れない。明日早く、結婚式列車に、乗って貰うためにね」

と、十津川は、いった。

「とにかく、調べてみる」

と、三田は、いった。

三田は、十津川を阿佐ケ谷駅前の喫茶店に、連れて行き、そこで、時刻表を借りた。

三田は、索引地図を広げ、東海道本線の金谷駅を見つけ出した。

静岡の少し先である。

その金谷から、北に向って、私鉄の線が延びている。それが、大井川鉄道だった。

途中の奥泉駅から、寸又峡に向って、バス路線が、延びている。

静岡の近くなら、伊豆半島が傍だから、温泉に招待することも、あり得ると、みていいだろう。



「電話をかけて、聞いてみる」
と、三田はいい、時刻表に出ている大井川鉄道の電話番号をメモし、レジのところにある電話に、歩いて行った。
テーブルに戻ってくると、十津川に向って、肩をすくめて見せた。
「違っていたの？」
と、十津川が、きいた。
「わからないんだ。それが――」
「わからないって、どういうことだい？」
と、十津川は、重ねて、きいた。
「結婚式列車は、走らせているが、プライバシイに関係もあるので、明日、誰々の結婚式があるかは、教えられないというんだよ」
と、三田は、いった。
「なるほどね。そういうこともあるかも知れないな。当人が、教えないでくれと、頼んでいるケースもあるからね」
「君が、刑事の肩書きで、相手に喋らせてくれないか」
と、三田は、いった。
十津川は、苦笑して、
「それは、無理だよ。第一、電話じゃ、こっちが、刑事だといっても、相手が信用するかどうかわからない。かえって、うさん臭いと、思われてしまうんじゃないかな」
「無理か――」
と、三田は、呟やいてから、腕時計に、眼をやった。
すでに、午後九時を回っている。
「どうしたらいい？」
と、三田は、十津川に、きいた。
「そういわれてもね。おれが非番なら、明日、金谷へ行って、果して、宮下が、大井川鉄道のイベント

列車で、結婚式をあげるかどうか、五人が、それに招待されていたかどうか、調べてみるんだがね。あいにく、明日は、非番じゃないんだ」

と、十津川は、いった。

「おれもだよ。心配だが、おれも、明日は、仕事がある。明日、この大井川鉄道で、宮下が、五人に復讐するとわかっていれば、仕事を放り出して、出かけるんだがねえ」

三田も、当惑した顔で、いった。

十津川は、相手を、なぐさめるように、

「宮下が、八年前の復讐をするとは、限らないよ。心の傷も癒えて、明日、めでたく、再婚するんじゃないかね。その方が、可能性が高いと思うよ」

「そうかな」

「あまり、悪い方にばかり考えない方がいいかも知れないさ」

と、十津川は、いった。

三田は、一応、肯いたが、

「あの辺は、静岡県警の縄張りだろう？」

「ああ、そうだが」

「君から、明日一日、大井川鉄道を警戒するように、頼んでくれないか。同じ警察のよしみというやつでさ」

と、三田は、いう。十津川は、苦笑して、

「まだ起きてもいないことで、そんなことを、頼めないよ」

「しかし、ひょっとして、殺人に発展するかもしれないんだよ」

「ひょっとしてだろう？　そんなことで、警察が動かなければならないとしたら、警官は、何十万人いても足らなくなってしまうよ」

と、十津川は、いった。

三田は、眉をひそめて、

「やはり、駄目かね」

「刑事というのは、不自由なものでね。まだ起きていない事件については、何も出来ないんだよ」
と、十津川は、いった。
「わかったよ。おれも、心配のしすぎかも知れない。まあ、八年もたって、復讐なんてことも、ないだろうからね。死んだ奥さんの妹と再婚するんだって、別に、特別なことじゃなくて、よくあるケースかも知れない」
と、三田も、いった。
「大丈夫だよ。宮下は、何があっても、それを、いつまでも、根に持つ奴じゃない」
と、十津川は、いった。
そのあと、一杯飲んで、三田と別れ、十津川は、自宅に帰った。
翌二十一日、出勤したが、やはり、三田の話が、気になった。
こんな時、大きな事件でも起きてくれれば、気がまぎれるのだが、えてして、何も起きないものなのだ。
じっと、机に向って、事件を待っていると、自然に、三田のことや、宮下のことが、思い出されてしまう。
「ちょっと、資料室に行ってくる」
と、十津川は、亀井刑事に断って、席を立った。
資料室で、八年前の三月の新聞縮刷版を借り、席に戻って、ページを繰っていった。
三月二十一日に起きた事件である。翌日の朝刊に、大きくのっていた。新婚一ヵ月の新妻が死んでいるからだろう。

〈悲運の新妻、交通事故死〉
〈夫の眼の前で、新妻死ぬ〉

そんな言葉が、並んでいる。記事の内容は、三田

が話したのと、同じようなものだった。新婚の宮下夫婦を、宮下の高校時代の友人たちが、一泊二日の旅行に誘い、大型バンに乗って、寸又峡温泉に向った。だが、その途中小雨が降り出し、運転を誤って、谷底に転落し、新婚一ヵ月の宮下の妻が、死亡した。宮下自身も、三ヵ月の重傷を負ったと、書かれている。

この時、運転していたのは、中西とある。中西自身は、軽傷で、警察の事情聴取を受けたという。

その他、江口亜紀(竹中みよ子)と、高梨みどりも、負傷して、病院で、手当てを受けていた。

運転していた中西の責任は重いが、別に、事故を起こそうと思ってのことではあるまいから、不運ということで、終ってしまったに違いない。

夕刊にも、この事故の続報が、のっていて、それには、中西の談話があった。

「亡くなった宮下君の奥さんには、申しわけなさで一杯で、死にたい気分です。宮下君にも、すまないと思っています」

中西も、辛かったろうが、宮下は、もっと辛かったろうと、十津川は、思った。

「どうされたんですか？　何か、心配ごとですか？」

と、亀井が、きいた。

「人間というのは、どのくらい憎しみを、持ち続けられるものかね？」

「憎しみ――ですか？」

「それも、発散しにくい憎しみなんだ。例えば、カメさんの友だちが、ビルの持ち主で、うちの屋上から、夏の花火がよく見えるから、家族で、いらっしゃいという。それで、出かけたが、子供が屋上から落ちて死んでしまう。その時、カメさんは、どう思う？　その友だちを憎むかね？」

「難しいですねえ。その友だちが誘ってくれなけれ

ばとは、考えるでしょうね。憎むまでいくかどうか、その時にならないと、わかりません」
「そうだろうね」
「警部は、そんな事件に、巻き込まれているんですか？」
「私の友人なんだ」
と、十津川は、いい、名前を伏せて、三田や、宮下たちのことを、話した。
「なるほど。八年間ですか」
「八年で、忘れることが出来るとも思えるし、逆に、八年の間に、憎しみが高まってくることも考えられるからね」
「そういえば、子供の時にいじめられたので、成人してから、復讐しようとした男がいましたね。ちょっとしたいじめだったのに、十五年後に、その復讐をやろうとした。いじめた方は、すっかり忘れて、あっけにとられたという事件です」
「その事件なら、覚えているよ」
「だから、他人の心の中というのは、理解するというのが、もともと、不可能なのかも知れません」
「だから、私も、心配なんだよ」
と、十津川は、いった。
八年もたち、再婚するのだから、もう傷は治っているだろうと、他人は考える。だが、本人の気持は、わからない。
「たとえ、復讐しようと思っても、なかなか、人は殺せませんよ」
と、亀井は、いった。
確かに、その通りなのだ。百人中九十九人は、さまざまな苦しみを持っていても、一生の間に、殺人は起さない。だが、最後の一人は、突然、人を殺すのだ。第三者が見れば、全く、信じられないような理由で。
三田が心配しているのも、そういうことなのだろ

う。宮下は、まさか、S高のクラスメイトを殺すまいと思いながら、一パーセントの不安を覚えているに違いない。

午後になっても、珍しく、事件がなかった。

十津川は、頼んでおいて、夕刊が来ると、すぐ持って来て貰った。

恐る恐る、社会面を開いてみる。とたんに、いきなり、大きな見出しの文字が、眼に飛び込んできた。

〈大井川鉄道で、客車が転落。死者が出ている模様！〉

と、いう文字だった。

十津川は、小さく息をついてから、記事に、眼を通していった。

まだ、はっきりしたことはわからないとしながら、C11型蒸気機関車に牽引された四両編成の客車のうち、最後尾の一両が、大井川にかかる鉄橋上から転落したという。

この列車は、結婚式列車で、東京のMさんが、K子さんと、車内で式をあげることになっており、各客車には、親戚、友人、知人が、乗っていたと、書かれてあった。

読みながら、十津川は、自分の顔が、こわばっていくのを感じた。

十津川は、警察に勤めて、二十年近くなり、たいていの事件には、驚かなくなっている。だが、この事件だけは、違った。事件の渦中にあるのが、友人だったし、予測されていた事件だったからでもある。

「警部。三田さんという方から、お電話です」

と、受話器をあげるようにして、西本刑事が、声をかけてきた。

十津川は、切りかえて、受話器を取った。

「おれだよ。大変だよ。心配してたことが、起きちまったんだ」
三田が、声をふるわせて、いった。
「ああ、今、夕刊で見たよ。Mさんと書いてあるが、宮下のことだろう」
「どうしたらいい？」
「君は、どうするんだ？」
「おれは、すぐ、金谷へ行ってみたいと思ってる。一緒に、行ってくれないか？」
と、三田は、いった。
「上司に許可を貰ってからになるが――」
「じゃあ、東京駅で、落ち合おう。三時半でいいか？」
「いいよ」
と、十津川は、肯いた。
十津川は、上司に事情を話し、亀井には、あとを頼んで、地下鉄で、東京駅に向った。
三時半に、新幹線の改札口の前で、三田と会った。
三田は、疲れ切ったような顔をしていた。
「昨日、眠れなくてね」
と、彼は、かすれた声を出した。
新幹線で、静岡まで行き、その先は、タクシーでということになった。一刻も早く、向うに着きたかったからである。
静岡から、タクシーで、金谷に着いたのは、六時近かった。
まず、大井川鉄道の営業所へ行ってみると、TVや、新聞が、押しかけて来ている。十津川は、仕方なく、警察手帳を見せて、強引に、責任者に会った。
四十五、六歳の男だったが、マスコミとの応待で、疲労の深い表情をしていた。
「県警の方にも、お話しましたが、これは、第三者

が、悪意を持って、脱線させたものです。まだ、詳細は、わかりませんが、爆発物を仕掛けた形跡がありますから」

と、関根という相手は、地図を見せて、十津川たちに説明した。

場所は、長さ二七六メートルの大井川第一橋梁の中ほどだという。C11型が、四両の客車を牽引して渡っている途中、突然、最後尾の客車で、爆発が起き、その一両が、橋から、大井川に転落した。

「その客車には、誰が乗っていたんですか？」

と、三田が、きいた。

関根は、溜息をついて、

「今までに、確認されたところでは、五人の男女が乗っていて、二人の遺体は、確認されまして、あとの三人は、行方不明です」

「その五人の名前は、わかりませんか？」

三田は、声を大きくして、きいた。

関根は、メモを見ながら、

「お二人の遺体が、エグチ・アキ、ナカニシ・フミアキということだけは、わかっています」

「やっぱり、あいつらだ！」

と、三田が、大声を出した。

十津川は、努めて、冷静にと思い、関根に、今日の結婚式列車の状況を聞いてみた。

関根の話によると、今日の結婚式列車は、午前九時三〇分に、金谷を出発している。

C11型蒸気機関車に、四両の客車が、連結された。

金谷を出てすぐ、1号車で、神前結婚式をあげた。そのあと、1号車は新婚夫婦、2号車に両親と親戚、3号車、4号車が、友人たちということで、千頭に向った。

終点の千頭には、新婚夫婦のために、リムジンが、待っていて、それに乗って、寸又峡に向うこと

になっていた。
宮下の希望で、式は簡素で、参列者も少かったという。
「4号車には、新郎の高校時代のご友人が、五人、乗っているということでした」
と、関根は、いった。
「4号車で、爆発があったというのは、間違いないんですか？」
と、十津川は、念を押した。
「間違いありません。3号車に乗っておられた方が、爆発音を聞いていますし、今、連絡があったところでは、客車の床に、仕掛けられていたらしいと、いうことです」
「今、列車は、動いているんですか？」
「一時間前に、やっと、復旧しました」
と、関根は、いった。しかし、次の列車が出るまでに、二十分近く、間があるという。
「待っているのは嫌だ」
と、三田が強くいい、二人は、タクシーに乗って、現場に向うことにした。
「道路は、混んでますよ。新聞や、テレビでね。それに、野次馬も、来てるから」
と、運転手が、いった。
県道36号線を、北に向って走る。大井川に沿って、というより、大井川鉄道に沿って走る国道である。
運転手がいうように、今日は、車が多い。
抜里を過ぎたところで、前方に、パトカーや、TVの放送車などが、とまっているのが、見えた。
すでに、周囲は暗くなりかけている。
十津川と、三田は、タクシーを降りて、大井川第一橋梁のたもとへ、歩いて行った。
まだ、川の中に沈んでいる客車が見える。
「あの先に、例の鵜山七曲りがあるんだ」

と、三田が、思い出したように、いった。
「八年前、転落事故を起こしたところか？」
「ああ、地図では、そうなっている」
と、三田は、いう。
十津川は、県警のパトカーのところへ歩いて行き、現場で、指揮に当っている三浦という警部に会った。
三浦は、十津川が、警視庁の刑事ということに、びっくりしたようだったが、事情を聞くと、納得した表情になって、
「詳しいことは、あの客車を引き揚げて、調べなければならないんですが、何しろ、川の流れが早いので、大変です」
「爆破されたのは、間違いありませんか？」
「ほぼ、間違いありませんね。他の客車の乗客の証言がありますし、橋の上から見ましたが、転落した客車の床に、穴が開き、爆破の跡が、はっきりしています」
と、三浦は、いった。
「二人の遺体が、見つかったそうですね？」
「さっき、三人目が見つかりました。名前はタカナシ・ケイイチロウです」
「私の友人です」
「誰が、何のために、あんなことをしたんですかねえ。お目出たい列車に、爆発物を仕掛けるなんて」
三浦は、首をかしげて見せた。
「私も、それを知りたいと思います」
とだけ、十津川は、いってから、
「それで、残りの人たちは、今、何処ですか？」
「千頭まで行き、向うの旅館に、落ち着いていると聞いています。うちの刑事二人が、事情聴取に行っています」
三浦は、その旅館の名前を、教えてくれた。
十津川は、三田のところに戻ると、

「千頭まで、行ってみるかね？」
「ああ。だが、宮下に会うのは、辛いな」
と、三田は、いった。
待って貰っていたタクシーに戻り、千頭へ行ってくれるように、頼んだ。
鵜山七曲りは、大井川が、鋭く蛇行しているのだ。川に沿って延びる県道36号線も、同じように、S字を描いている。
鉄道の終点千頭に着いた。ここから先も、アプト式の列車が、井川まで、走っている。
千頭からも、寸又峡温泉へ行くバスが出ていて、旅館も、十軒ほどあるということだった。
その一軒「日の出旅館」には、宮下たちが泊っているということで、ここにも、パトカーや、TVの放送車などが、群がっていた。
「宮下に会うのが、怖いな」
と、三田が、いった。
「われわれも、まず、旅館を決めておこうじゃないか。今日は、帰れそうもないからね」
と、十津川は、いった。
日の出旅館の近くに、泊ることにした。が、この旅館も、入ってみると、TV局の人間や、新聞記者が、泊り込んでいて、ガヤガヤとうるさかった。
十津川は、外に出ると、公衆電話から、東京の亀井に、連絡をとった。
「爆破は、間違いないようだよ。これは、殺人だ」
と、十津川がいうと、亀井は、
「ショックだったでしょう？」
「ああ。その通りだよ。夕刊を見ていたから、ある程度、覚悟して来たんだがね」
「となると、静岡県警から、こちらに、捜査の協力要請が来ますね」
「だろうね。それで、カメさんに、頼みなんだが」
「何んでも、いって下さい」

「宮下のことを、くわしく調べて欲しいんだ。特に、今度の再婚話についてね」
「わかりました」
「彼は、八年前に事故死した奥さんの妹と、再婚している。その間の事情を特に調べてくれ」
と、十津川は、いった。
彼が、旅館に戻ると、三田が、眉を寄せて、
「今聞いたんだが、宮下には、会えそうもないよ。マスコミの連中が、会おうとしても、警察が、会わせないそうだ。やはり、警察は、宮下をマークしているんだよ」
「当然だろうね」
「おれは、会えないが、君は、刑事だから、会えるんじゃないか？　会って、宮下を、励まして来てくれよ」
と、三田は、いった。
「そうしよう」
と、十津川は、いった。
夕食をすませてから、日の出旅館へ行ってみると、宮下夫婦は、事情聴取のため、千頭の警察署へ、同行されたということだった。
十津川は、そちらへ、廻ってみた。
さっき会った三浦警部が、顔を見せて、
「まだ、宮下夫婦の訊問は、続けています」
と、十津川に、いった。
「県警は、二人を疑っているんですか？」
と、十津川は、きいた。
三浦は、難しい顔で、
「疑っています。これは、殺人事件です」
「なぜ、宮下たちを？」
「理由は、いくつかありますが、まず、八年前のことがありますからね。十津川さんも、ご存知なんでしょう？」
と、三浦は、逆に、きいてきた。

「知っています」
「それなら、話をしやすいんですが、宮下は、多分、そのとき、奥さんが死んだのは、五人の友人たちのせいだと、思っていたんでしょうし、今回、結婚した女性は、その奥さんの妹だということですからね。彼女も、五人を恨んでいて、今度の事件を起こしたと考えられるのですよ」
「そう決めつけるのは、危険じゃありませんか？」
と、十津川は、いった。
「十津川さんは、宮下の友人だから、そう思われるのは、無理ありませんが、他に、誰が、あの五人を狙うでしょうか？　それに五人が、最後尾の4号車に乗っているのを知っていたのは、宮下夫婦です。彼等が、4号車に五人を乗せると、決めたわけですからね」
三浦は、確信ありげに、いった。
「宮下は、何といっているんですか？」
と、十津川は、きいた。
「否定してはいますがね」
「彼が、やったという証拠は、ないんでしょう？」
「今のところ、物証はありませんが、状況証拠は、十分ですよ」
「八年前の交通事故ですが、それも、静岡県警が、調べられたんでしたね？」
「そうです。うちの管轄ですから」
「その時の話を、聞きたいんですが」
と、十津川が、いうと、三浦は、
「あれは、交通課が調べましたが、今度の殺人事件と、関係ありとみて、その時の調書を、持って来させてあります。あとで、お届けしましょう」
と、いってくれた。
宮下夫婦の訊問は、長く続きそうなので、十津川は、いったん、自分の旅館に戻った。
「どうだった？」

と、待ちかねていた三田が、きいた。
「どうやら、県警は、宮下夫婦を容疑者とみているようだよ」
「やっぱり、そうか」
三田は、溜息をついた。
「しかし、まだ、容疑の段階なんだ。問題は、これからだよ」
と、十津川が、いうと、三田は、急に、笑顔になって、
「そうだな。まだ、宮下がやったとは、決ったわけじゃないんだ。今の世の中は、神経のおかしな人間が多いから、そういう奴が、爆薬を仕掛けたのかも知れないな」
「とにかく、宮下本人に会ってみたいよ」
と、十津川は、いった。
「その時には、おれも、会えるように図らってくれないかね。宮下と一刻も早く会って、あいつの気持を聞きたいんだ」
「努力してみるが、今日は、無理だと思うよ。ここの警察も、大事件というので、いきり立っているからね。おれだけでも、会わせて貰うつもりだ。その結果を、知らせるよ」
と、十津川は、いった。
十津川は、一時間ほどして、もう一度、千頭警察署に出向いてみた。
宮下夫婦への訊問が、丁度、終ったところで、三浦警部は、疲れた顔で、椅子に腰を下していた。
十津川を見ると、顔をあげて、
「疲れましたよ」
と、いった。
「宮下夫婦は、どういっているんですか？　自分たちがやったといっているんですか？」
「頑固に、否認していますよ。自分たちこそ、こんなことになって、びっくりしているとね」

「二人が、嘘をついていると、思っているんですね？」
と、十津川は、きいた。
「もちろんですよ。五人ですよ。三人の死体が見つかって、あと二人は、行方不明ですが、絶望だと思っていますよ。この五人は、さまざまな職業についています。夫婦者も一組いるし、サラリーマンも、女優もいる。この五人全部と関係があるのは、宮下夫婦だけですからね。しかも、二人とも、この五人を恨んでいる可能性があるんですよ」
「しかし、五人を招待したのは、宮下なんでしょう？」
「そういっていますね。つまり、殺すために、招待したと、私は、思っていますよ」
と、三浦は、いった。
「しかし、一番、疑われるでしょう？　こんな形で殺せばね。そんなバカなことをしますかね？」
十津川が、きくと、三浦は、笑って、
「多分、宮下は、うまくやれば、4号車が脱線して、川に落ちたことになると、考えていたんじゃありませんかね。素人は、時々、そんな風に簡単に考えて、殺人に走るもんなんですよ」
と、いった。
「しかし、1号車にいた宮下が、どうやって、4号車に仕掛けた爆薬を、爆発させたんですか？」
と、十津川は、きいた。
「無線ですよ。無線」
「電波で？」
「そうです。ダイナマイトに、受信装置をつけておいて、宮下夫婦が、発信装置を持っている。あの鉄橋にさしかかった時、電波を飛ばして、爆発させたんですよ」
「発信装置は、見つかったんですか？」
と、十津川が、きくと、三浦は、首をすくめるよ

うにして、
「そんなものを、犯人が、ずっと持っている筈がないでしょう？　4号車が転落するのを見届けてから、川に捨てたと思いますよ。あのイベント列車は、C11型に牽引されていますが、客車も全て、昭和初期のものです。つまり、窓が開くんですよ。発信機を捨てようとすれば、いつでも、窓から捨てられます。今、部下に、大井川のあの鉄橋附近を、探させています。見つかったら、お見せしますよ」
「宮下夫婦以外にも、親族が乗っていたわけでしょう？」
「ええ。宮下夫婦の他に、二十四人、乗っていましたよ」
「その人たちから、事情聴取はしているんですか？」
と、十津川は、きいた。
「もちろん、手分けして、事情聴取をしていますよ」
「その結果は、どうなんですか？」
「3号車に乗っていた人たちは、突然、大きな爆発音が聞こえ、驚いて、外を見たら、最後尾の4号車が、脱線して、川に落ちるのが見えた。そう証言していますよ。2号車の人たちは、爆発音らしいものは聞いたが、4号車が、転落したのは、知らなかったと、いっています。当然でしょうね」
「そうした証言では、宮下夫婦が、クロだということにはならんでしょう？」
「確かに、有罪の証拠にはなりませんが、といって、無罪の証拠にもなりませんよ」
と、三浦は、いった。
「宮下夫婦が有罪とすると、動機は、八年前の交通事故ですか？」
「そうです。ああ、その時の調書が届いています。私は、もう眼を通したので、お貸ししますよ」

と、三浦はいい、その調書を、十津川に、渡してくれた。
十津川は、ありがたく、借りることにしてから、
「宮下夫婦には、まだ、会わせて貰えませんか？」
と、きいた。
「奥さんの方は、興奮気味で、今、寝かせていますが、宮下の方だけなら、会って、結構ですよ」
と、三浦は、いってくれた。
十津川は、取調室で、宮下に会った。先日、同窓会で会ったばかりなのだが、別人のように見えた。
十津川を見ると、青ざめた顔で、
「おい。助けてくれよ」
と、かすれた声を出した。
「正直に、話してくれないと、助けられないよ」
と、十津川は、いった。
「ここの警察には、正直に話したさ。だが、信じてくれないんだ」
「なぜ、あの五人を招待したんだ？　他の同窓生は、呼ばずにだよ」
十津川は、一番、聞きたいことをきいた。
「前に、あの五人とは、ちょっとしたことがあって、気持の上で、わだかまりがあったんだ」
と、宮下は、いった。
「例の交通事故で、前の奥さんが死んだことだね？」
「知っているのか？」
「三田に教えて貰ったし、静岡県警が、この交通事故の調書を貸してくれたよ」
「そうか」
「君は、あの五人を、恨んでいたのか？」
十津川は、ずばりと、きいてみた。
「恨んではいなかった。あの事故は、偶発的なものだったし、小雨が降っていて、スリップしやすかったからね。それに、他の誰かが死ぬかも知れなかっ

たんだ」
「しかし、わだかまりはあったんだろう？」
「そりゃあ、全くないとはいえなかったよ。あの五人が、誘わなかったら、彼女は、死ななかったのにと、思ったりしたからね」
「それなのに、今度、結婚式に、あの五人を招待した。なぜなんだ？」
「今いったように、どうしても、わだかまりがあった。この際、それを、払拭しようと思ったんだ。それで、わざわざ、招待したんだよ。もう、何でもないことを、連中に、行動で示そうと思ってね」
「五人は、昨日から、こっちへ来ていたのか？」
と、十津川は、きいた。
「午前九時三〇分の金谷発だったからね。今日、東京から来るんじゃ大変だと思ったから、昨日、五人を、日本平に招待して、そこのホテルに泊って貰ったんだ。Kホテルだから、調べて貰えば、わかるよ」
「その時、君は、五人と、話し合ったのか？」
「ああ、今度の嫁さんも、式の前だが、紹介しておいたし、もう、あの事故のことを、気にしてないと、いったんだ。連中も、喜んでくれたよ」
と、宮下は、いった。
「今日の列車の編成だが、最後尾の4号車に、五人を乗せるというのは、君が、考えたのか？」
と、十津川は、きいた。
「あれは、五人が、希望したんだ。おれも、まあ、おれの親戚なんかとは、初対面だから、やはり、気楽な4号車がいいと思ってね」
「五人を招待するというのは、君一人の考えだったのか？」
「今度の嫁さんも、賛成してくれたし、三田も、すすめてくれたんだ」
「三田が？」

「ああ。あいつは、世話好きだからね」
「ちょっと待ってくれよ。三田本人がすすめたのか？」
「いや、中西が、三田にいわれたといって、おれに、話しに来たんだ。クラスの世話役として、同窓生の間に、わだかまりがあるのは困ると、三田がいったそうだ」
「それで、結婚式列車のことは、三田に連絡したのか？」
「いや、しなかった。五人のことばかり、考えていたからね。三田には、悪いことをしたな。彼が、仲直りのお膳立てをしてくれたのに」
「三田がお膳立てをしたって、結婚式列車のことは、彼が考えたことなのか？」
「いや、中西の考えだよ。大井川鉄道のイベント列車のことを、彼が教えてくれたんだ」
「例の事故のあった鵜山七曲りの傍を、列車が走るのは、気にならなかったのかね？」
「逆だよ。わだかまりを捨てた証拠として、わざと、あの列車で、結婚式をあげようということになったんだ」
「それも、中西の考えかい？」
「そうだよ、おれも、面白いと思ったから、賛成したんだ」
「招待状を出したのは、いつなんだ？」
と、十津川は、きいた。
「確か一月の下旬頃だったよ」
「じゃあ、同窓会のずっと前じゃないか」
「一ヵ月ぐらい前かな」
「じゃあ、同窓会の時には、もう、五人が出席することは、決っていたのか？」
「まあ、そうだね」
「そのあと、君の気持は変らなかったのか？」
「変るって？」

「また、腹が立ってきて、爆薬や発信機を手に入れて、鉄橋の上で、脱線させたということだよ」
「そんなことはない。おれは、再婚して、新しい気持で、やり直そうと思っていたんだ。そんな時に、なぜ、友人を殺す必要があるんだ？」
宮下は、大きな声で、十津川に、きき返してきた。
「君が犯人じゃなければ、誰が、やったんだ？」
「そんなこと、わからないよ。五人全員に恨みを持ってる人間なんか、いやしないだろう？」
「その中の一人を殺すために、爆薬を仕掛けたのかな？」
「よしてくれよ。そんなバカげた犯行なんてあるものか」
「いや、あるかも知れないんだよ」
と、十津川は、いった。事件は、いつでも、意外な面を持っているし、常識では判断できない形で起きるのだ。
十津川が、旅館に戻ると、三田が、待っていて、
「宮下に、会えたのか？」
「ああ、会って来たよ。さすがに、青い顔をしていたよ」
「彼は、無実だと思うか？」
「わからないな」
と、十津川は、いった。
「友人のくせに、冷たいじゃないか。無実だと、信じてやらなければ、可哀そうだよ」
と、三田は、いった。
「無実の証拠がないんでね」
「しかし、君は、刑事なんだ。何とか、見つけてくれよ」
「一つだけ見つけたよ」
「どんなことだ？」
と、三田が、身をのり出してきた。

「例の結婚式だが、あれは、中西にすすめられたものだとわかった。宮下が考えたものじゃない」
「宮下が、そういったのか？」
「ああ。しかも、中西は、君にいわれて、宮下に会いに行ったそうじゃないか」
十津川は、じろりと、三田を見た。
三田は、あわてた顔で、
「それは、違うよ」
「どう違うんだ？」
「中西は、例の交通事故の時、バンを運転していた。それだけに、宮下との仲を気にして、おれに、相談しに来ていたんだ。だから、おれは、奴にいったんだ。お前の方から、宮下と話し合ったらどうなんだってね。遠慮して、声をかけなければ、わだかまりが、いつまでも残ってしまうよと、忠告したんだ。それだけだよ。あとは、宮下が、考えたんだろう」
「君は、本当に、今日、宮下たちが、結婚式列車に乗るのを知らなかったのか？」
と、十津川は、きいた。
「知らなかったよ。知っていたら、昨日のうちに、ここへ来てるよ」
「わかった」
と、十津川は、いった。
彼は、布団に寝転がると、三浦警部から借りた調書に、眼を通した。
かなり詳しく調べて、書かれている。特に、バンを運転していた中西への訊問は、長いものだった。
事故の原因が、どこにあったかを、警察として、判断する必要があったからだろう。
前日は、よく眠れたか、酒は飲まなかったか、体調はどうだったか、車内で、友人とふざけていなかったかなどを、質問していた。
十津川が、興味を持ったのは、小雨が降っていた

ことについてのところだった。

「小雨は、運転していて、気になったか？」

――いや、そんなに気になりませんでした。視界も、よかったし、タイヤが滑るということもありませんでしたから。

「すると、谷底に転落したのは、小雨のせいではないと思うのだね？」

――そうです。

今まで、十津川は、事故の原因は、路面が、雨でぬれて、スリップしたせいだと思っていたのである。そう聞いていたといってもいい。それが、違っていたらしい。少くとも、運転していた中西は、小雨のせいではないと、いっているのだ。

すると、事故の原因は、何だったのだろう？　十津川は、それが知りたくて、ページを繰っていった。

そして、十津川が、眼を止めたのは、突然、ベンツが出てきたところだった。

「車って、何だね？」

――僕たちのバンの前を、車が一台走っていたんです。

「どんな車だね？」

――白いベンツです。確か５００ＳＥＣだったと思います。

「そのベンツが、どうしたのかね？」

――やたらに、こっちの通路を邪魔するんですよ。急に、車を寄せてきたりしてです。ヤーさんの車かも知れないと思うから、ぶつけないように運転していたんですが、鵜山七曲りのＳ字カーブのところで、突然、また、車を寄せてきたんです。あわてて、ハンドルを切ったら、谷底に、転

落してしまったんです。
「その話は、本当かね？」
――嘘じゃありません。実際に、こすったんですよ。だから、ああ、いけないと思って、あわてたんです。
「本当に、暴力団の車なのかね？」
――わかりませんが、窓にフィルムが貼ってあって、車内が見えないんです。だから、ヤーさんの車に違いないと思ったんです。

ベンツについての訊問は、それだけである。
（おかしいな）
と、思った。東京で、十津川は、この事故のニュースののった新聞を見ている。その記事には、ベンツのことは一行も出ていなかった。
「どうしたんだ？」
と、三田が、きいた。
「いや、何でもない。ちょっと、出てくる」
「もう、十時過ぎだぞ」
「先に寝ていろよ」
と、十津川はいい、外出の支度をして、旅館を出た。彼が行ったのは、千頭警察署である。
三浦警部は、まだ、眠らずに、がんばっていた。
十津川は、彼に、交通事故の調書を返してから、
「その中に白いベンツのことが、書いてありますね」
「ああ。書いてあります」
「なぜ、事故の原因として、ベンツのことが、ニュースにのらなかったんですか？」
と、十津川が、きくと、三浦は、一言の下に、
「あれは、中西の嘘ですよ」
「嘘？　調べたんですか？」
「もちろん、調べましたよ。しかし、白いベンツは、見つからないし、誰も、見ていないんです」

「バンに乗っていた連中がですか？」
「そうです」
「しかし、雨が降っていたんだから、外の景色を楽しむより、車内で、騒いでいたんじゃありませんか？」
「それは、何ともいえませんが、誰も見ていないのは、間違いないんですよ。従って、中西が、運転のミスを、他に転嫁しようとしてついた嘘だと、断定したんです」
「白いベンツの５００ＳＥＣで、窓に、フィルムを貼っていたので、車内が見えなかったと、中西は、具体的に、説明していますが、それでも、嘘だと？」
「いろいろというのに、肝心のプレートナンバーについては、何もわからなかったと、いっているんですよ」
「しかし、それは、雨のせいじゃありませんか」
「とにかく、信じられなかったということですよ」
と、三浦は、いった。
十津川は、千頭署の電話を借りて、東京の亀井に、電話をかけ、個人的に、調べて貰うことを、いった。
旅館に帰ったのは、十二時近かった。
三田は、まだ起きていた。
「十一時のニュースで、残りの二人も、死体で見つかったと、いっていたよ。かなり下流まで、流されていたんだ」
と、いった。

5

翌日、これも、大井川の川の中から、発信機が見つかった。大井川第一橋梁の近くである。
三浦警部は、4号車を爆破したあと、宮下が、発

信機を、窓から川の中に、投げ捨てたと、判断したようだった。

記者会見が行われ、宮下夫婦に、容疑がかかっていると話したため、イニシャルでの記事だったが、「交通事故の復讐か？」の文字が、新聞にのった。

十津川は、じっと、東京の亀井からの連絡を待った。

亀井からの電話は、夜おそくになってだった。

亀井の話の内容は、十津川を、満足させ、同時に、憂鬱にさせた。

「大丈夫ですか？　警部」

と、亀井が、電話の向うで、心配そうに聞いたのは、十津川の返事が、だんだん、重いものになっていったからだろう。

「ああ、大丈夫だ。カメさんの話は、役に立ったよ。ありがとう」

と、十津川は、あわてて、いった。

翌朝も、千頭には、新聞や、テレビが押しかけていた。

何しろ、五人もの人間が、列車の爆破というセンセーショナルな方法で、殺されたのだから、当然だろう。

しかも、動機は、八年前の復讐らしいというし、被害者の中には、四十歳だが、女優もいる。ニュースとしては、申し分ないのだ。

地元の警察は、完全に、宮下夫婦の犯行という考えで、固まっている感じだった。

十津川が、千頭署に顔を出すと、三浦警部が、

「何度来られても、無駄ですよ」

と、いった。

「何がですか？」

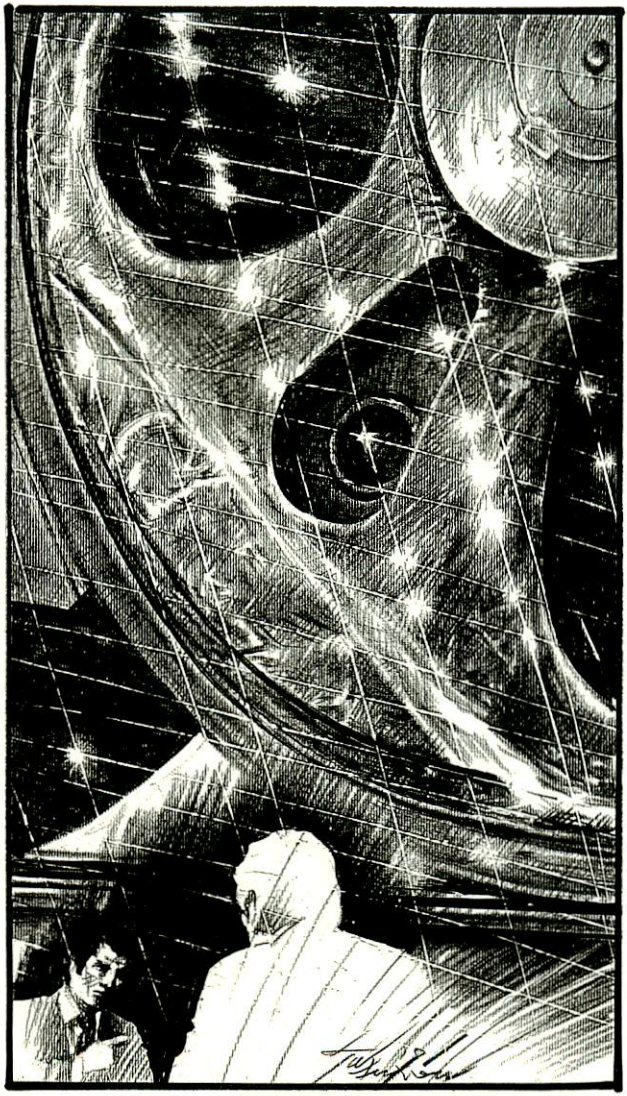
「宮下夫婦のことです。高校時代のクラスメイトだから、無実を信じたいお気持は、わかりますが、無駄ですよ。彼等以外に、犯人はいないんです」

「私は、もう一度、宮下に会いたくて来たんですよ。会わせてくれませんか」
と、十津川は、いった。
「妙な知慧をつけるのでなければ、構いませんがね」
と、三浦は、いった。
「ただ、話を聞くだけですよ」
と、十津川は、いった。
また、取調室で、宮下と会った。彼は、昨日よりも、更に、疲れた顔をしていた。
「どうしたらいいんだ？　おれは、本当に、犯人として、拘束されてるのか？」
と、十津川に、きいた。
「そうらしい。だが、助けてやるよ。だから、話してくれ」
「列車転覆のことは、もう、話したよ。他に、付け加えることはないんだ」
「八年前の事故のことだよ。あの時、バンを運転していたのは、中西だったんだな？」
十津川は、念を押した。
「そうだよ。中西が、大型免許を持っていたからね。しかし、おれは、あの事故の復讐なんかしたわけじゃないんだよ」
「おれの質問に、答えてくれればいいんだ。事故の時、他の六人は、車の中で、何をしていたんだ？」
と、十津川は、構わずに、質問を続けた。
「雨で外は見えないっていうんで、みんなで、トランプをしてたよ。ちょっとだが、賭けていたんで、夢中になってたんだ。誰かが、のどが渇いたっていって、家内が、冷蔵庫のところへ行ったとき、転落した。それで、彼女だけが、死んだ」
「やっぱり、外は、見てなかったのか」
「ああ」
「中西が、ベンツに道路を妨害されたと、いってな

かったか？」
「いっていたよ。しかし、おれは、下手ないいわけだと、逆に腹が立ったよ。事故だから、仕方がないと、思っていたのに、いいわけがましいと、思ってね」
「なぜ、三田が、その時一緒じゃなかったんだ？　あいつは、世話好きだから、役に立つだろうに」
と、十津川は、きいた。
「それは、あの五人が、決めたんだ。三田も、一緒に来たがっていたらしいんだが、五人が、誘わなかったんだ」
「なぜ？」
「三田は、確かに、世話好きで、同窓会の幹事なんかも、一生懸命にやってくれるんだが、時々、悪ふざけをするんだ。それが過ぎてケンカになったこともある。中西たちは、おれが新婚だから、三田が、また悪ふざけをすると困ると思って、連れて来なかったんだと思うよ」
と、宮下は、いった。
「あの頃、三田は、何をやっていたか知らないか？」
「仕事か？　確か、大学時代の友人と、車の輸入みたいな仕事をやっていて、景気がいいと聞いていたよ。三田が、どうかしたのか？」
「彼は、八年前、君たちが、大型バンで、寸又峡温泉に行くことを、知っていたのかな？」
「今もいったように、彼も、来たがっていたということだから、知っていたと思うよ。三田が、どうかしたのか？」
と、宮下は、また、きいた。
「三田が、君のことを、心配しているよ」
と、いって、十津川は、席を立った。

6

旅館に戻ると、十津川は、待っていた三田に、
「宮下に会いに行こう」
「警察が、許可してくれたのか？」
「ああ、そうだ」
と、十津川は、肯き、二人は、旅館を出た。
十津川が、先に立って歩く。三田が、急に立ち止った。
「千頭署は、違うんじゃないか？　そこは、千頭駅だろう？」
「そうだよ」
「駅に、宮下がいるのか？」
「彼はいないが、C11が、とまっているよ」
と、十津川は、いった。
千頭駅の構内には、C11の他にも、古いSLが、展示されている。
「なぜ、ここへ来たんだ？」
三田は、眉を寄せて、十津川に、きいた。
「結婚式列車に使われたC11の前で、話したいことがあってね」
「何を話すんだ？　おれは、宮下と話をしたいんだよ」
「自分が、今度の事件の犯人だと、宮下に告白するためにか？」
「からかうのは、止めてくれよ」
「そんな気はないよ」
と、十津川は、無表情にいった。三田の表情が、変った。
「君は、何を？」
「おれは、悲しいんだ。同窓会に行かなければ、よかったと思うよ。そうすれば、今度の事件にだって、知らん顔が出来たんだ。だが、関係してしまった以上、仕方がない。それに、おれは刑事だから、犯人を見つけなければ、ならないんだ」



「だから、刑事の君に、宮下を助けてくれと、頼んでいるんじゃないか」
「君は、頼む人間を間違えたか、おれを、甘く見たかのどっちかだな。宮下を助けるためには、真犯人を見つけなければならない。そして、真犯人は、君なんだ」
「冗談じゃない！」
「おれは、冗談なんか、いってないよ。君が、爆薬と、発信機を使って、列車を転覆させ、五人を、殺したんだよ」
「なぜ、おれが、そんなことをしなければ、ならないんだ？」
「動機は、八年前の事故で、宮下の奥さんが、死んだことだよ」
と、十津川は、いった。
「おれは、あの事故とは、無関係だよ」
「いや、君が、事故の原因なんだ。あの時、中西たち五人が、大型バンに、新婚の宮下夫婦を乗せて、寸又峡温泉に向った。君は、参加したかったのに、断わられた。君が、悪ふざけをする癖があるからだ。君にしたら、心外だったろう。同窓会の世話役を買ってでるくらいだから、当然、一緒に行けると思っていたろうからね。そこで、君は、連中を脅してやろうと考えた。フィルムを窓に貼って、一見、暴力団風に見せたベンツで、先廻りし、やって来た彼等のバンの前に行って、邪魔を始めたのだ。運転していた中西は、すっかり、暴力団員のベンツと思い込んでしまい、必死になって、ぶつけまいとした。その結果、運転を誤って谷底に転落してしまったのだ。君が、転落させようと考えていたとは、思わないよ。君のいつもの悪ふざけだったんだろう。だが、その結果、宮下の、結婚したての奥さんは、死んでしまったんだ」
「やめてくれよ。どこに証拠があるんだ？」

「中西の証言だけさ。それに、そのベンツだってすぐ処分してしまったと思うよ。八年前のことだから、問題のベンツを見つけるのも、大変だ」
「それなら、おれが、そんなことをしたという証拠は、ないじゃないか」
「だが、君は、怖くなっていたんだ。中西は、ベンツを見ている。それに、当時の君のことを知っている連中が、いろいろ、思い出すかもしれない。中西や、八木たちが、君が、自慢げに、ベンツを乗り廻していたのをね。それに、中西だけでなく、他の連中も、ベンツを見ているかも知れない。そうなると、この事故を、また、警察が調べ直すかもわからない。特に、ベンツのことをね。そこで、君は、問題の五人を、殺してしまうことを考えたんだ。中西を通じて、宮下に、八年前のわだかまりを解消するために、再婚の時、五人を招待するように、すすめた。あの結婚式列車の考えも、最後尾に五人を乗せることも、君が、すすめたというじゃないか」
「そんなことは、知らんよ」
「そうしておいて、君は、おれに、宮下が、五人を殺しはしないか、心配だと、いった。あれは、心理的なアリバイ作りだよ。まるで、結婚式列車のことは、知らないみたいにしてね」
「本当に、知らなかったんだよ」
「それは、おかしいじゃないか。宮下は、同窓会の前に、五人に招待状を出してるんだ」
「それが、どうしたんだ？」
「五人は、まさか、君が、自分たちを罠にはめて殺そうとしているなんて知らないから、結婚式列車のことを話した筈なんだ。第一、詮索好きの君が、同窓会の時、聞かない筈がないのさ。それなのに、君は、ひたすら、おれに対して、何も知らないから、心配だといいつのった。それだけじゃない。少しずつ、ヒントを出して、おれに、大井川鉄道ではない

かと推理させた。うまいやり方さ。そうしておいて、昨日、君は、早朝、結婚式列車の4号車の床下に、爆弾と、無線装置を取りつけておき、大井川第一橋梁に先廻りした。連中の乗った列車が、この鉄橋に入ったとき、発信機を操作して、爆破させ、4号車を、大井川に転落させたんだ」

と、十津川は、いった。

三田は、顔を真っ赤にして、

「止してくれ。おれは、一昨日、君と、東京駅で待ち合せて、一緒に金谷に行ったんじゃないか」

「ああ、その通りさ。しかし君は、大井川第一橋梁で、列車を転覆させてから、おれに電話をかけて来たんだ。ニュースで、初めて事件を知ったような顔をしてね」

と、十津川は、いった。

「それを、証明できるのか？」

三田は、十津川を、睨むようにしてきいた。

「おれは、嫌だったが、東京の刑事に頼んで、君の車を調べさせたんだよ」

と、十津川は、いった。

「車？　ベンツをか？　おれは、ベンツなんて、持ってないぞ」

と、いう三田の言葉に、十津川は、苦笑した。

「ベンツじゃないよ。今、君が持ってる車だよ。確か、白のソアラだったね」

「なぜ、調べたりしたんだ？」

「君は、昨日車で、大井川第一橋梁へ行ったに違いない。爆薬や、発信機なんかを持って、電車では、行けないし、走り廻れないからね。そのあと、君は、同じ車で、東京駅に戻り、おれと会って、初めて金谷へ行くふりをしたんだよ」

と、十津川は、いった。

「それを、証明できるのか？」

三田は、挑戦的な眼をした。十津川は、小さく笑

って、
「おれはね、君は、車で戻って来て、東京駅で、おれに会うまでに、そんなに時間的な余裕はなかったと考えたんだよ。とすれば、東京駅周辺の駐車場に入れたに違いない。ここへ来てからは、君は、東京へ戻っていないから、車は、そのままの筈だ。だから、刑事たちに、探させたんだよ」
「――――」
「亀井という優秀な刑事がいてね。君の車を見つけ出したよ。東京駅の八重洲口の駐車場で、見つけたんだ」
「ずっと前から、あの駐車場にとめているんだよ」
「違うね。駐車場の管理係が、一昨日の午後三時十五分に、君が預けに来たといっているんだ。おれと、東京駅で落ち合う十五分前だよ」
「おれは、自宅から、車で東京駅に行って、預けたのさ」
「タクシーで来れば、駐車場も要らなかったんじゃないのかね」
「そんなことは、おれの勝手だろう」
三田は、ケンカ腰でいった。
「確かに、その通りだよ」
と、十津川は、一応、肯いてから、
「ところで、亀井刑事が、調べたところ、君のソアラの側面に、新しい感じのかすり傷があったそうだよ」
「それが、どうしたんだ？」
「それで、亀井刑事は、こう考えたわけだよ。君は、ここから、急いで東京駅に戻る必要があった。かなり乱暴な運転をしたんじゃないのかね。そのために、他の車に、ぶつけたのじゃないかとだよ」
「――――」
三田は、急に、黙ってしまった。
「そこで、亀井刑事は、ここから、東京までの間

で、一昨日、それらしい事故がなかったかと、調べてくれた。各県警の交通課に協力を仰いでね。そうしたら、見つかったんだよ」

「――――」

「東名高速の吉田インターチェンジの近くだ。ぶつけられたのは、タクシーの運転手で、名前は、五十嵐太郎さん。五十六歳だった。客をおろしている時に、がりがりと、横腹をこすられたと、いっている。そこで、五十嵐さんは、その車をとめて、抗議した。そうしたら、相手の男は、とにかく、急いでいるので、損害賠償などは、あとで、話したいといって、運転免許証を見せた。もちろん、五十嵐さんは、しっかりと、免許証の名前や、住所を、書き取った。三田。君の名前をだよ」

「――――」

「君は、二つミスをやったんだ。東京駅に近いところで、事故を起こしたのなら、何とか、いいわけが出来るが、金谷の近くでは、それは無理だよ。もう一つは、タクシーにぶつけてしまったことだ。それも、個人じゃなくて、タクシー会社の車だった。運転手は、当然、事故のことを、会社に報告し、会社は、警察に報告するからね。君の事故は、場所と時間が、記録に残ってしまったんだ」

「――――」

「もちろん、五十嵐という運転手は、君の顔だって、よく覚えている。そして、この事故は、一昨日の午前十時四十八分に起きている。これを、五十嵐運転手が報告しているんだ」

「――――」

「一昨日、結婚式列車は、午前九時三〇分に、金谷を出発した。大井川第一橋梁に差しかかったのが、午前十時五分頃だといわれている。君は、その時、爆破させ、発信機を、川に投げ込み、車で引き返した。金谷を通り過ぎ、東名に入る手前で、十時四十

八分に事故を起こした。時間的に、ぴったり一致するんだよ。そして、東名を飛ばし、その途中で、おれに電話を入れたんだ。ニュースで、事件を知ったといってね」

「――――」

「まだ、否定するのなら、君と、君の車の写真を、何百枚もコピーして、金谷から、大井川第一橋梁までの間に、ばらまこうか。きっと、誰かが、あの事件の前後に君か、君の車を目撃している筈だからね。それに、東京では、君が、どうやってダイナマイトを手に入れたか、調べているよ」

と、十津川は、最後の一撃を下すように、三田に、いった。

「許してくれ」

と、突然、三田が、いった。

「それは、おれにではなく、宮下と、亡くなった五人にいうんだな」

と、十津川は、いい、続けて、

「これから、一緒に、千頭警察署に行こう。向うで、そこの警察に全部話すんだ」

と、いった。

北の廃駅で死んだ女

1

国鉄時代、北海道の鉄道の長さは、四千キロといわれていた。

JRに変った現在、その長さは、二千八百キロになった。千二百キロが、消えてしまったのである。

北海道は、赤字ローカル線の多いことで有名だったが、最近になって、そうした路線が、次々に、廃線となっていったのだ。

その中には、名寄本線のように、幹線として期待されているものもあった。消えてしまった列車の代りに、バスが走っているといっても、寂しいことに、かわりはない。

若い写真家の河西は、まだ、雪の残っている三月二十二日、廃止された天北線をカメラにおさめたくて、千歳行の飛行機に乗った。

天北線は、稚内に向う宗谷本線から、途中の音威子府で分れ、オホーツク側に回って、稚内に到る線だった。

一時は、このルートの方が、宗谷本線と呼ばれたこともあったのに、赤字が続き、平成元年四月限りで、廃止になってしまった。

河西は、この線が好きで、稚内へ行く時、よく、この天北線を利用した。今でも、よく覚えているのは、小さな駅が、手入れの行き届いた花々で飾られていることだった。無人駅でも、近くの人々が、ホームに花壇をこしらえていた。それは、訪ねてくる客へのもてなしであると同時に、厳しい冬に耐えて

いる、あの北方の人々の、花の咲く季節への憧れだったのだろう。

河西は、千歳空港で、レンタ・カーを借り、それに乗って、音威子府に向った。札幌を抜け、岩見沢まで、ハイウエイを走り、そのあと、国道12号線を、旭川に向った。

旭川から先は、40号線を音威子府まで。見覚えのある音威子府の駅に着いたのは、午後三時過ぎである。

昨日降った雪で、駅も、町も、白く被われていた。

左にカーブしている宗谷本線のレールは、さすがに除雪されていたが、かつての天北線のレールは、雪に被われたままだった。

その天北線の代りに、音威子府から、バスが出ている。昔の駅だった中頓別や、浜頓別は、バスターミナルになっていた。

河西は、レンタ・カーで、このバスの走る国道275号線を、走ってみた。道路は除雪されていて、両側に雪の山が生れている。根雪の上に、何度も、除雪された雪が、積み重ねられたとみえて、何重もの層が、出来ていた。

バスは、一時間に一本程度しか、走っていない。

かつての駅舎の傍に、バス停があるところもあれば、遠い場所に、バス停が設けられているところもあった。

河西は、いちいち、車をとめ、かつての駅舎のあった場所まで歩いて行き、写真を撮った。

駅舎はこわされ、レールは、深い雪に埋もれ、ホームの駅名板だけが見えるところもあった。錆つき、雪の積った表示板を見ていると、昔、その小さな駅に降りたときのことが、思い出された。赤色の一両か、二両の気動車からおりると、「ローカル線廃止反対」の垂れ幕が下りていたのも、ついこの

間のことのように、思い出されるのだ。

浜頓別で、オホーツク海に出る。ここから、北見枝幸まで走っていた興浜北線も、廃止されてしまった。

浜頓別の駅舎は、バスターミナルになっている。

ここから、代替バスは、オホーツク沿いの国道238号線を走るのだが、かつての天北線と離れているために、山軽、安別、飛行場前といった昔の駅の傍に、バス停はない。

その中の山軽は、小さな駅だった。ホームの長さは、二十メートル余りで、やっと、一両の列車が停車できる短かさだった。河西は、この小さな駅で、昔、降りたことがある。

白鳥の飛来で知られるクッチャロ湖に、この駅が、一番、近かったからだった。

山軽の駅も、雪に埋もれていた。駅名の表示板を、写真に撮る。

ホームの小さな待合室は、潰れかけていた。この辺りは、豪雪地帯だから、屋根に積った雪の重さで、こわれ、それを直そうとする人もいないからだろうか。

河西は、ホームに積った雪に、足をとられながら、潰れかけた待合室の傍まで、歩いて行った。

割れた窓ガラスのところから、中をのぞく。吹き込んだ雪が、ぶ厚く積っている。ホームの雪が溶けても、この中の雪は、残っているのではないだろうか。

北国の旅館などに泊ると、中庭の雪が、陽当りが悪いせいで、いつまでも残っている。

河西は、そんな景色を思い浮べながら、のぞいていたのだが、急に、こわばった表情になった。

廃虚になった待合室の中に積った雪から、人間の手らしきものが、突き出ていたからである。

2

河西は、浜頓別まで戻って、一一〇番した。
そのあと、河西が、山軽に戻っているところへ、道警のパトカーが、やってきた。
警官二人が、こわれた待合室に踏み込み、スコップを使って、残雪の山を、掘っていった。
やがて、一人の女の死体が、雪の中から、現われた。
セーターに、スラックス姿の若い女だった。
ホームの雪の上に、彼女の身体が、仰向けに横たえられた。刑事が、手袋をはめた手で、女の顔や、服にこびりついた雪を払い落とした。
美しい顔だと、河西は、思った。年齢は二十一、二歳だろうか。雪に埋もれていたせいか、透きとおるように、白く見える顔だった。
河西が、写真を撮ろうとすると、刑事の一人が、手で制した。
「なぜ、いけないんですか？」
と、河西は、文句をいった。
中年の刑事は、眉をひそめて、
「撮って、どうするんです？」
「別に、どうもしませんよ。僕は、カメラマンだから、何でも、記録しておきたいんです」
「事件かも知れないんだ」
「事件って、殺されたんですか？」
と、河西が、きいたが、その刑事は、答える代りに、同僚の刑事に向って、
「鑑識に、早く来るようにいってくれ。殺人の疑いがある」
と、大声で、いった。
五、六分して、鑑識もやって来た。河西は、邪険に追い払われ、仕方なしに、離れた場所に移動した。その代り、刑事たちに気付かれないように、シ

ヤッターを、切り続けた。
刑事と、鑑識たちは、雪まみれになりながら、待合室の中の雪を、かき出し始めた。死んだ女の所持品を、探しているらしい。
その一方、検死官が、ホームの死体を、仔細に調べていた。特に後頭部を念入りに診ているところをみると、そこに、裂傷か、打撲傷があるのだろう。
かき出された雪の中から、白いショルダーバッグや、カメラが出てくるのが見えた。
河西は、ショルダーバッグの中身や、カメラに撮られているフィルムを見たいと思ったが、刑事たちは、さっさと、パトカーに運び込んでしまった。
死体も、運ばれて行った。
さっきの中年の刑事が、河西の傍にやってきた。
彼は、改めて、三浦と名乗ってから、
「発見した時の状況を、話してくれませんか」
と、いった。
「やはり、殺人なんですか？」
河西は、逆にきいた。
「それは、明日の新聞を見て下さい。それより、まず、ここへ、何しに来たのか、それから話してくれませんか？」
「僕は、カメラマンで、廃止になった赤字ローカル線の写真を、撮りに来たんです。天北線は、好きな路線だったんで、一駅ずつ、写真に撮ってきて、この山軽へ来たら、待合室の雪の山の中から、手首が突き出しているのが、見えたんですよ」
と、河西は、いった。
「それで、すぐ、一一〇番した――？」
「ええ。浜頓別に戻って、一一〇番したんです」
「現場で、何もしませんでしたね？」
「しませんよ。僕は、警官じゃないんだから、する筈がないでしょう？」
「写真は、撮りましたか？」

「何の写真です？」
「死体を発見した時の写真です。この駅の写真です」
「ええ、撮りましたが、それが、どうかしたんですか？」
「ひょっとすると、提出して頂くことになるかも知れませんのでね」
「つまり、殺人事件だからですか？」
「そんなところです」
と、三浦刑事は、いった。
すでに、陽が暮れかけていた。三浦は、河西の住所と電話番号、それに、今後の旅行日程を聞き取ってから、パトカーで、帰って行った。
河西は、ぽつんと、ひとり、廃駅に取り残された。
待合室の周囲には、警察が、ロープを張り、「立入禁止」の札を下げていった。
河西は、もう一度、そのロープの外から、こわれた待合室を、のぞいてみた。
刑事たちのかき出した雪が、ホームに、山となっている。その作業の邪魔になる窓や、柱は、叩きこわされて、それも、ホームに、放り出されていた。
冷気が襲いかかってくる。河西は、身体をふるわせた。警察が、立入禁止のロープを張っただけで、警官を置いていかなかったのも、多分、この寒さのせいだろう。それに、現場には、もう、何もないと思ったからか。
河西は、ロープをまたぎ、うす暗くなった待合室に、入ってみた。カメラマンとしての野次馬根性が、働いたのだ。
雪は、かき出されたが、それでも、残った雪が、溶けずに、凍りかけていて、足元がすべる。
河西は、ライターを取り出して、火をつけた。
それで、待合室の中を、照らした。頭上の屋根

は、半分以上こわれて、大きな穴があいている。死体を埋めた雪は、そこから降りつもり、ガラスのなくなっていた窓から、吹き込んだのだろう。

警察が、何もかも、持ち去ったので、待合室の中には、何も落ちていなかった。

河西は、肩をすくめて、外へ出た。

月がのぼって、雪に埋ったホームを、青白く、照らし出した。

刑事たちの足跡や、待合室からかき出した雪の汚れが、雪景色に、現実的なアクセントをつけていた。

(おれが、写真を撮りに来なければ、多分、雪溶けの頃まで、この廃駅は、美しい雪景色の中で、眠っていたに違いない)

河西は、そんなことを考えながら、フラッシュをたき、何枚か、写真を撮った。

(おや?)

と、急に、河西が、シャッターにかけた手を止めたのは、フラッシュをたいた瞬間、雪の上で、何かが、光ったからだった。

それは、刑事たちが、スコップでかき出した雪の中だった。

河西は、雪の上に屈み込み、ライターの明りで、それを探した。

小さな金属だった。手にとってみると、カフスボタンとわかった。

ポケットに入れ、自分の車に戻ってから、車内灯の明りの下で、ゆっくりと、見直した。

プラチナか、或いは、プラチナゴールドだった。

日本の家紋のカフスボタンである。

確か、これは、下り藤の家紋だろう。よく見れば、小粒のダイヤが、何粒も、埋め込まれている。

(ぜいたくなものだな)

と、河西は、感心した。

死体を掘り出した刑事や、鑑識が落としたとは、思えなかった。

刑事たちが身につけるには、ぜいたく過ぎるからである。多分、死体と一緒に、雪の中に埋もれていたに違いない。

河西は、車を稚内まで走らせ、三浦刑事に話したように、そこで、一泊することにした。

3

翌二十三日になると、死体の解剖結果が出た。

死因は、後頭部を強打されたことによる頭蓋骨破損である。道警の刑事たちが考えたように、殺人なのだ。

死亡推定時刻は、三月二十一日の午後四時から五時の間だろうという。

その後、雪が降り、死体は、その下に埋もれたために、腐敗は進行していず、きれいなままでいた。

ショルダーバッグの中には、シャネルのハンドバッグ、下着、化粧バッグなどが入っていたが、身元を証明するものは、見つからなかった。

ハンドバッグの中には、十七万二千円の入った財布があったから、物盗りの犯行ではないのだ。

カメラは、コンタックスT1で、十万円以上するものである。だが、フィルムは、入っていなかった。道警では、犯人が、抜き取ったものと、判断した。フィルムの入っていないカメラを、持ち歩くとは、考えられなかったからである。

死体は、指輪も、腕時計も、身につけていなかったが、これも、犯人が、持ち去ったに違いない。

捜査本部は、稚内署におかれ、佐伯警部が、指揮をとることになったが、彼は、捜査会議の席で、

「もう一つ、おかしいのは、被害者の服装です」

と、本部長に、いった。

「三月とはいえ、かなり寒いと思われるのに、セーターと、スラックスという格好でした」
「その上から、何か羽おっていたということかね？」
「そうです」
「なぜ、それが、失くなっているのかね？」
「恐らく、そのコートに、名前がついていたか、特別に作らせたもので、持主を特定できるものだったからだと思います。この事件の犯人は、被害者の身元を隠すのに、非常に熱心です。指輪や、腕時計などが、失くなっているのも、そのせいだと思われます」
「指紋の照会はしているのかね？」
「すでに、警察庁に、送ってあります」
「あとは、顔写真の公開などで、身元を調べるより仕方がないな」
「そうです」
「この顔写真だが」
と、本部長は、黒板に、ピンでとめた女の写真に眼をやって、
「なかなか、美人だね」
「生きている時は、もっと魅力的だったと思います。身長一七五センチ、体重四八キロ、色白で、きれいに、マニキュアしていました」
「女性にしては、長身だね」
「そうです。長身を生かした仕事をやっていた女かも知れません」
「と、いうと？」
「例えば、モデルです。あの業界では、一七五センチは、低い方だそうですから」
と、佐伯は、いった。
指紋の照会は、無駄だった。前科者カードにないという返事だったからである。
二十四日の朝刊に、事件の記事と、被害者の顔写

真が、のった。

それで、女の身元がわかるという保証はなかった。死顔と、生きていた時の顔とは、全く別人に見える時も、あるからである。

佐伯は、テレビ局にも、協力を要請した。特に、全国ネットのテレビ局には、ニュースで取り上げるとき、心当りの人は、すぐ、道警に連絡してくれるように、アナウンスすることを頼んだ。

夕刊にも、同じ要望を、のせて貰った。

だが、これはと思える連絡は、いっこうに、入って来なかった。

テレビ局や、捜査本部に、全く、連絡がなかったわけではない。

問い合せの電話は、何本か入ったのだが、身長一七五センチといっているのに、小柄な一人娘かも知れないという母親からの電話だったり、死んだのは、三月二十一日と、報じているのに、翌日から行方不明になった恋人の問い合せだったりするのである。

佐伯たちは、他の方法による身元確認を考えた。

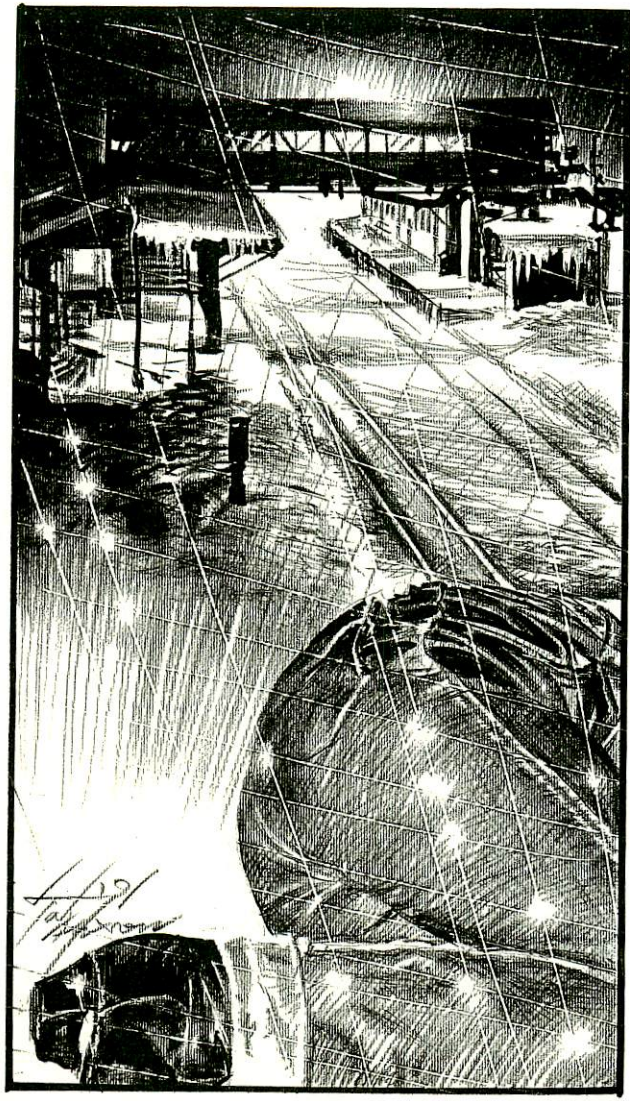
ショルダーバッグを下げ、カメラを持っていたことを考えれば、被害者は、観光客に違いない。

何処から来たかはわからないが、佐伯は、東京、大阪といった大都会に絞り、また、モデルだったのではないかということで、東京、大阪のモデルクラブにも、照会してみた。

この方針が、効を奏して、東京のモデルクラブ「KMG」から、ひょっとすると、うちにいた戸上みどりかも知れないという連絡があった。

身長、体重など、身体のサイズを添付した写真を、送ってきた。

顔はよく似ているし、血液型も、A型で、合致している。KMGでは、彼女が、今年の三月中旬から行方不明になっているとも、電話で、伝えて来た。



条件は、被害者とおおむね合致した。
佐伯は、東京の警視庁に連絡して、この戸上みどりのことを、調べてくれるように、要請した。死体が発見された三日後、三月二十五日の午後である。

4

河西は、まだ、稚内にいた。
二十四日までは、道警の要請によるものだったが、二十五日は、河西自身の判断だった。
二十四日には、三浦刑事が、旅館に訪ねて来て、河西の撮った写真を、全部、見せるようにいった。
仕方なしに、見せると、そのうち、山軽の廃駅で、捜査状況を撮ったフィルムは、押収されてしまった。
「これは、撮るなといった筈ですよ」
と、いうのである。
河西は、腹が立ったので、現場で拾ったカフスボタンのことは、三浦に、話さなかった。
二十五日の夜のテレビは、被害者が、東京のKMG所属のモデルだったらしいと、報じた。
モデルクラブのマネージャーが、テレビの画面で、彼女のことを喋った。
「うちでは、売れっ子のモデルでしたよ。二、三日休みをとって、温泉めぐりをして来たいといいましてね。それから、何の連絡もなかったです。心配して、探していたんですが、こんなことになるなんて、本当に、びっくりしています」
「ひとりで、温泉めぐりに行かれたんでしょうか？」
と、レポーターが、マイクを差し出してきく。
「それは、私どもにもわかりません。彼女のプライバシイですから」
と、マネージャーが、答えた。
画面には、去年秋のファッションショーで、活躍す

る戸上みどりの姿が、映し出されている。
毛皮ショーなので、彼女は、一着数千万円もする毛皮のコートを羽おっている。いかにも、高価な毛皮が似合いそうな女に見える。
その彼女が、天北線の廃駅で、雪に埋もれて死んでいたというのが、河西には、どうも、納得できなかった。
華やかな世界と思われるモデル業界の女が、旅行が好きで、しかも、廃線になったローカル線が好きだということがあっても、おかしくはない。
河西も、美人女優で有名なS子が、仕事のない時は、化粧のない顔で、ジーンズに、スニーカーという格好で、カメラ片手に、小さな漁港をめぐり歩いているのを知っていた。
だが、戸上みどりが、雪に埋もれて死んでいたのは、ぴんと来ないのである。
果して、彼女は、カメラを持って、山軽の廃駅を写しに来たのだろうか？
三月二十一日には、あの辺りには、大雪が降った。
その前も、あの辺りは、深い残雪が、被っていたと聞いた。戸上みどりは、その残雪を踏みしめて、廃駅に行き、写真を撮っていたのだろうか？
（どうも、想像しにくいな）
と、思ってしまうのだ。
しかし、彼女のカメラから、フィルムが抜かれていた。恐らく、彼女を殺した犯人が、フィルムを抜き取って行ったのだろう。と、すれば、彼女が、何かを撮ろうとしていた、或いは、撮ったのは、間違いないことになってくる。
河西は、テレビを消すと、もう一度、下り藤のカフスボタンに眼をやった。
これが、犯人のものだとすると、犯人は、金持ちか、お洒落かのどちらかだろう。それとも、貰い物

だったのか？

5

東京の警視庁では、道警の要請を受けて、被害者戸上みどりの交友関係を、調べることになった。

十津川は、亀井と西本に、調査を命じていたが、二人が戻って来る前に、上司の三上刑事部長に、呼ばれた。

「北海道の事件だがね」

と、三上は、十津川に椅子を勧めてから、切り出した。

「戸上みどりのことでしたら、今、亀井刑事と、西本刑事の二人が、調べています」

「わかっている。彼女の交友関係を調べているんだろう？」

「そうです。道警の話では、犯人は、カメラのフィルムを抜き取り、身元が確認できるものを、剝ぎ取ったと思われます。と、いうことは、顔見知りの犯行の線が強いと思うので、彼女の交友関係、特に、異性関係を、重点的に調べさせています」

「今日中に、結果が出るかね？」

「そう願っていますが」

「もし、特定の男の名前が出てきたら、道警に連絡する前に、私に、報告して欲しい。いや、道警には、私から、連絡するよ」

と、三上は、いった。

確かに、道警からの捜査協力の要請は、正式には、向うの本部長から、こちらの三上刑事部長を通して行われる。しかし、そのあとは、刑事同志で連絡し合うことが多い。その方が、効率的だからである。

それが慣習になっているので、十津川は、妙な気がしたが、部長の指示だから、おとなしく、「わか

りました」と、いって、自分の部屋に戻った。

夜になって、亀井と、西本の二人が、帰って来た。

「戸上みどりの異性関係は、かなり派手だったようです。パリへ行った時も、向うで、フランスの男性と親密になって、それを、週刊誌に書かれたことがあります。しかし、特に親しかった男性というのは、数が限られていて、いろいろな人間に会って聞いた結果、今のところ、二人に絞られると思います」

と、亀井は、いい、その二人の名前を書いたメモを、十津川に見せた。

○永井　哲也（三十歳）Kテレビの若手のプロデューサー

○久保田　剛（二十六歳）TVタレント。将来を嘱望されていて、歌手としても、何枚かレコードを出している。

二人の写真も、添えられている。

「二人とも、なかなか美男子だね」

と、十津川は、印象をいった。

「それに、今の時代の花形でもあります」

と、亀井が、いう。

「三月二十一日のアリバイは？」

「永井の方は、二十日から三日間、休暇をとっています。彼にいわせると、自宅マンションで、ゆっくりと、休みをとっていたといいますが、独身ですから、証明はできません」

「久保田の方は、どうなんだ？」

「面白いことに、彼は、新しく出したレコードの宣伝に、北海道へ行っているんです。小樽を歌った曲のために、一週間、道内を廻ったというわけです。三月二十一日には、旭川にいたと、いっています」

「面白いね」
「従って、二人とも、明確なアリバイはありません」
「動機は、どうなんだ？」
と、十津川がきくと、今度は、西本刑事が、
「二人とも、戸上みどりとの間には、別に問題がなかったので、殺すような動機はないと主張しています。しかし、われわれが調べたところ、戸上みどりは、一度、子供を堕ろしたことがあります。四ヵ月前ですが、彼女の女友だちの言によると、この件で、相手の男を、ゆすっていたのではないかというのです」
「ゆすっていた？」
「ええ。被害者に酷ない方かも知れませんが、彼女は、ぜいたくが好きで、やたらに、お金を欲しがる女だったそうです。相手の男を、ゆすっていたとしてもおかしくはありませんし、彼女の方には、ゆすっているという意識はなかったのかも知れません」
「だが、相手は、ゆすられていると思ったか？」
「そう思います」
「堕ろした子供が、この二人のどちらの子供か、わかるのかね？」
「調べれば、わかる筈です」
「彼女は、所属のプロダクションに、温泉めぐりをしてくるといって、休みをとったことになっているんだが、その点は、どうなんだ？」
と、十津川は、きいた。
亀井が、自分の手帳のメモを見ながら、
「モデル仲間の話では、彼女に、温泉めぐりをするような趣味はなかったようです。ただ、最近、カメラに興味は持っていたと、いっています」
と、いった。
十津川は、二人の男の名前を書いたメモと、顔写

真を持って、三上刑事部長の部屋へ行った。
三上は、あわただしく、二人の名前を見、写真を見ていたが、
「ご苦労さん。すぐ、道警の方へ、連絡してやってくれ。向うでも、待っている筈だから」
と、いった。
十津川は、呆気にとられて、
「それは、部長が、道警にお伝えになるんじゃなかったんですか？」
「いや、君から話してくれた方が、正確に伝わるだろうからね。頼むよ」
と、三上はいい、それで、窓の方に眼をやってしまった。
十津川は、首をかしげながら、部長室を出た。
なぜ、急に、三上の態度が変ったのか、見当がつかなかったからである。第一、捜査一課長を飛び越えて、刑事部長の三上が、十津川に指示してきたのも、不思議なのだ。そういう場合があれば、本多捜査一課長を同席させるのが、常識だった。
従って、三上部長の指示には、どこか、秘密めいた匂いがあったといえる。それなのに、急に、無関心になってしまったのは、なぜなのだろうか？
十津川は、部屋に戻ると、亀井に、改めて、道警への連絡を頼んでおいて、課長室へ、足を運んだ。
本多捜査一課長に、黙っているわけにはいかなかったし、報告する義務も、あったからである。
北海道の事件で、二人の容疑者が浮んできたことを話したあと、三上部長のことも、本多に伝えた。
「私が、話したことは、部長には、黙っていて下さい」
と、十津川は、いった。
本多は、笑って、
「もちろん、いわないさ」
「私には、どうにも、わからないのですよ。道警の

協力要請について、いちいち、部長が指示されることはなかったですし、また、必ず、私を通せといわれたのに、いざ、報告すると、今度は、全く無関心な顔をされたんです」
「確かに、おかしいな」
「気まぐれな人ですが、殺人事件で、いい加減なことは、いわれないと思うのです」
と、十津川が、いうと、本多は、
「そうだよ。むしろ、部長は、仕事では、慎重な人だ」
「ひょっとすると――」
「ひょっとすると、何だね？」
「部長は、お偉方と、よく、会っていますね？」
「ああ。部長になれば、政財界の人とのつき合いも生れてくるし、三上部長は、それが、嫌いじゃないからね」
と、本多は、笑った。
「その中の一人から、部長は、いわれたんじゃないでしょうか？　今度の事件について」
「どんなことをだね？」
「北海道で殺されていた戸上みどりについて、われわれは、道警に依頼されて、彼女の男関係を調べています。それに、自分の名前が、出て来ないかどうか、心配になった政財界人がいるんじゃないかと、思うんです」
十津川が、いうと、本多は、「なるほどねえ」と、肯いた。
「部長は、君の答の中に、頼まれていた名前が無かったので、ほっとしたのかも知れないね。安心して、道警への連絡を、自由にやってくれと、いったんだろう」
「そう思います」
「いいじゃないか。もう、部長に気がねなく、君が、自由に、道警に協力したらいいんだ」

「そうなんですが――」
「浮かない顔をしているが、まだ、心配なことがあるのかね？」
本多が、眉を寄せて、きいた。
「心配というよりも、疑問です。戸上みどりについて調べたところ、二人の男の名前が浮んで来ました。それが、そこに書きました永井哲也と、久保田剛ですが――」
「この二人は、被害者と、関係があったんだろう？」
「そうです」
「それなら、容疑者として、調べるのは、当然だよ」
「ですが、問題のXが、浮んでいません」
と、十津川は、いった。
「Xって、三上部長が、政財界の偉い人から、頼まれたのではないかという人物かね？」
「そうです。もし、これが当っていれば、そのXは、被害者の戸上みどりと、関係があった筈です。そうでなければ、わざわざ、刑事部長に、調べてくれと、頼んだりはしないと思うのです」
「そうだろうね」
「永井と、久保田ではないとすると、なぜ、Xが浮んで来なかったのか。それが、疑問になって来たんです」
「この二人以外には、男の名前は、浮ばなかったのかね？」
と、本多が、きく。
「異性関係は、派手な女性だったらしく、他にも、何人か、いたようです」
「それなら、Xは、その中に入っていたんだろう。まあ、X氏にとっても、良かったじゃないか。逆にいえば、X氏は、自分で心配したほど、彼女にもてていなかったということにもなるんだがね」

と、いって、本多は、笑った。
十津川は、自分の席に戻っても、疑問は、消えてくれなかった。
Xの名前がわかれば、簡単に、疑問は、解けるのだが、まさか、三上刑事部長に、Xさんに頼まれましたかと、聞くわけにはいかないし、聞いたところで、本当のことを話してくれる筈がなかった。Xには、内密でといわれているに違いなかったからである。
「道警には、二人の名前を、伝えておきました。顔写真も、電送しました。あとは、二人のどちらが、現場近くで、目撃されているかということになるでしょうね」
と、亀井が、十津川に、報告した。
「ああ、ご苦労さん」
「どうされたんですか？　これから先は、道警の仕事ですが」
「二人の他に、浮んだ男の名前は、メモしてあるかね？」
「ありますが、関係がうすいか、確かなアリバイのある男ばかりですが」
「いいよ。教えてくれ」
と、十津川は、いった。
亀井は、三人の男の名前を、見せた。
その中に、十津川が、知っている名前は、なかった。
亀井に聞くと、この三人は、まだ無名の二十五歳のタレント、同じモデルクラブの男のモデル、それに、売れないシナリオライターだという。
（どうも、Xではないようだな）
と、十津川は、思った。それでも、十津川は、念のために、その三人の男の名前を、自分の手帳に、写しておいた。
亀井は、じっと、そんな十津川を見ていたが、

「どうもわかりませんね。その三人が、気になるんですか？」
と、きいた。
「いや、ただ、念のためにね」
「しかし、その三人が、犯人だという確率は、ゼロだと思いますよ」
「わかっているさ」
と、十津川は、いった。

6

稚内署に設けられた捜査本部は、警視庁が送ってきた永井と、久保田の顔写真をもとにして、現場附近の聞き込みを始めた。
さすがに、問題の廃駅近くで、二人を目撃したという人間は、いなかったが、久保田が、二十一日に、音威子府から、稚内行のバスに乗っているのを見たという目撃者が、現われた。
目撃者は、地元のＯＬで、熱心な久保田のファンだった。
彼女は、音威子府に住んでいて、十八日には、札幌の小ホールで開かれた久保田の新曲発表会を、聞きに行っている。
二十一日に、旭川へ行こうと思い、ＪＲの駅へ歩いているとき、久保田を見かけたというのである。
久保田は、そのとき、稚内行のバスに乗ったと、証言した。
道警の三浦刑事が、同僚の前島刑事と、その証言を確めるため、すでに、帰京している久保田に会う目的で、飛行機で、東京にやってきた。
亀井が、羽田に迎えに行き、二人を、パトカーで、久保田のいるプロダクションに、案内した。
久保田の訊問には、亀井も、立ち会った。
久保田は、三浦刑事の質問に、あっさりと、二十

一日に、問題のバスに乗ったことを、認めた。
「あの日は、夜の八時まで、暇が出来たんで、稚内へ行ってみたんですよ」
と、久保田は、いった。
「なぜ、音威子府から、わざわざ、バスに乗ったんですか？」
三浦が、当然の質問をする。
「それはですね。前に、天北線に乗ったときのことを、思い出したからですよ。それで、音威子府でおりて、オホーツク廻りのバスに、乗ったんです。帰りは、宗谷本線にしましたが」
「昔の山軽駅で、降りたんじゃありませんか？」
「彼女が、死んでいたところですか？　いや、降りずに、稚内まで、行きましたよ」
と、久保田は、いった。
「何時のバスに、乗ったんですか？」
と、前島刑事が、きいた。
「正確な時間は、覚えていませんが、かなり早かったですよ」
「稚内に着いたのは？」
「昼過ぎでしたね。ずいぶん、時間が、かかりましたよ。だから、稚内には、あまり長くいられませんでした」
「帰りは、何時に、稚内をでたんですか？」
「それは、よく覚えています。急行『礼文』に乗らないと、旭川に、八時までに、戻れませんのでね。一六時〇六分の急行『礼文』に乗りました。旭川に着いたのは、一九時五六分で、辛うじて、間に合いました。いや、十分ぐらいおくれたのかな」
「すると、稚内にいたのは、四時間足らずということですね？」
「ええ」
「稚内にいたことを、証明できますか？」
と、三浦がきくと、久保田は、考えてから、

「駅前の食堂で、おそい昼食をとったんですが、その時、サインを頼まれましてね。色紙に、サインしました。確か、近江食堂という名前でした。その名前を、色紙に書いた覚えがありますから」
と、いった。
その証言を確認するために、三浦が、稚内署に、電話連絡している間、亀井は、パトカーで待つことにしたが、運転席に腰を下しているところへ、無線電話が、入った。
「私だ」
と、十津川が、いった。
「今いるところは、新宿だったね？」
「そうです。新宿駅西口です」
「帰りに、明大前へ寄ってくれ。私も、これから、明大前へ行く」
と、十津川が、いった。
「事件ですか？」
「そうだ。殺人未遂だ。被害者は、病院に運ばれたが、意識不明だよ」
「明大前の何処ですか？」
「『スカイマンションめいだいまえ』の306号室だ」
「わかりました。道警の二人を、ホテルへ送ってから、急行します」
「いや、連れて来てくれ」
と、十津川は、いう。
「向うの事件と、関係があるんですか？」
「あるかも知れないんだ」
と、十津川は、いった。

7

甲州街道から、少し入ったところに、「スカイマンションめいだいまえ」があった。

亀井が、三浦と前島の二人を連れて、到着すると、十津川が、迎えて、
「河西というカメラマンを、ご存知と思いますが」
と、三浦に、いった。
「ええ。今度の事件で、死体の発見者ですが」
「殺されかけたのは、その河西です」
と、十津川は、いい、306号室に、案内した。
1LDKの部屋である。
カメラマンの部屋らしく、調度品は、あまりなかったが、カメラだけは、いいものが、三台も、置いてあった。
バスルームが、現像室になっている。
「河西が、帰宅したところを、犯人が、背後から、殴りつけたようです。そうしておいて、部屋に入って、家探しをしているところへ、隣室の学生が帰宅して、犯人は、あわてて、逃げたんです。おかげで、河西は、一命を取り止めました。まだ、意識不明ですが」
と、十津川は、三浦に、説明した。
「北海道の事件と、関係があるんでしょうか？」
と、三浦が、きいた。
「わかりませんが、その可能性があると思って、お二人に、来て貰ったんですよ」
「しかし、ただ、第一発見者というだけのことですからねえ」
三浦が、当惑した顔で、いった。
「河西は、カメラマンでしょう。とすると、彼が、犯人にとって、不利なものを、写していたんじゃありませんか？　犯人は、それを見つけようとして、河西を殺そうとし、家探しをしたんじゃありませんかねえ」
と、亀井が、いった。
だが、三浦は、言下に、
「それは、ありませんよ」

「なぜ、ないといい切れるんですか？」
亀井が、不思議そうに、きく。
「実は、彼には悪かったんですが、撮ったフィルムを、全部、見せて貰ったんです。しかし、人間は、一人も写っていませんでした。また、捜査の助けになるようなものもです。従って、北海道の事件のせいで、河西が襲われたとは、思えないんですが」
と、三浦は、いった。
「そうなんですか」
亀井は、肩をすくめるようにして、いった。
三浦と、前島が、今日泊まるホテルに帰って行ったあと、亀井は、十津川に、
「どうやら、二つの事件は、結びつかないようですね」
と、残念そうに、いった。
「まだ、そうと決ったわけじゃないさ」
「しかし、河西が撮ったフィルムが、事件に無関係とすると、襲った奴も、関係ないんじゃありませんか？」
「カメラマンだからといって、カメラだけで、世の中とつながっているわけじゃないだろう」
と、十津川は、いった。
「そうですね。今度の事件の容疑者と、河西の人間関係を、調べてみましょう」
「その時には、永井と、久保田の他に、例の三人との関係も、調べて欲しいね」
と、十津川は、いった。
十津川は、帰りに、河西の運ばれた病院に寄ってみたが、彼の意識は、まだ、戻っていなかった。
世田谷署に、捜査本部が設けられ、亀井たちは、河西の交友関係を、洗っていった。
しかし、十津川が期待した結果は、出て来なかった。
永井、久保田の二人はもちろん、他の三人の名前

も、その捜査の中で、出て来ないのである。
殺された戸上みどりの名前もだった。この六人と、いくら調べても、河西は、交叉しないのだ。
「どうやら、私の思い違いだったようだ」
と、十津川は、亀井に、いった。
亀井は、なぐさめるように、
「しかし、まだ、そうと決ったわけじゃありませんよ」
「道警から、河西が撮った写真を、送って来たんだ。それを見たが、事件と関係があるようなものは、一枚もなかったよ」
「そうですか」
「だから、河西は、向うの事件とは、無関係に、襲われたんだ」
「しかし、警部、いくら調べても、河西は、他人に恨まれるようなことはしてないんです」
「だから？」
「河西は、他のカメラマンに嫉まれるほど、有名じゃありません。それに、彼が、得意としていたのは、人物じゃなくて、風景です。いわゆる社会派でもありません。ですから、写真の題材で、恨みを受けるということも、考えにくいんです」
「河西の女性関係は、どうなんだ？」
「ガールフレンドはいます。しかし、結婚を約束してもいませんし、彼女の方も、結婚を望んでいませんでした。従って、女性問題で、彼が狙われていたということは、考えにくいのです」
亀井は、一つ一つ、河西が襲われる理由を、消していった。
「つまり、河西が襲われたのは、やはり、北海道の事件のためだといいたいわけだね？」
と、十津川は、亀井に、いった。
「そうです。他に、理由が、考えられないのですよ」

「しかも、犯人は、河西の部屋を、家探しした形跡がある。そのために、河西は、襲われたともいえるんだ。だが、三浦刑事たちの話で、彼が撮った写真のためではないとわかった」
「しかし、何か、河西は、持っていたんですよ。向うの事件につながるようなものを」
と、亀井は、いう。
十津川は、じっと、考え込んでいたが、
「例の三人だがね」
「はい」
「あの中で、アリバイがあいまいなのは、誰だね？」
「原田利夫。二十六歳。売れないシナリオライターです」
「アリバイは、どんな風にあいまいなんだ？」
「仕事がない時は、朝から夜まで、パチンコをやっているというわけです。それも、一店で、ずっとやるのではなく、何店も、渡り歩くそうです」
「二十一日もかね？」
「二十日も、二十一日も、二十二日もです」
「なるほど、あいまいだね。それで、死んだ戸上みどりとの関係は？」
と、十津川は、きいた。
「Wテレビで、原田が書いたシナリオで、三時間のドラマをやったときがありまして、それに、彼女が出演したんです。これは、半年前ですが、その時に、原田の方から、誘って、交際が始まったようです」
「三時間ドラマ？」
「スペシャル番組です」
「売れないシナリオライターに、そんなスペシャル番組を、よく委したね」
「そうですね」
「Wテレビに電話して、なぜなのか、聞いてみてく

れないか」
と、十津川は、いった。
亀井は、すぐ、Wテレビの編成局長に、電話で聞いていたが、受話器を置くと、
「原田の才能を買ったんだそうです。今は、売れていないが、きらりと光る才能があり、それを、買ったと、いっています」
「三時間ものだと、制作費も、多額だろう？」
「そうです。有名なタレントが、沢山出ていますから、一億円は、軽くオーバーしたと思いますね」
「それなのに、きらりと光る才能だけで、無名に近いシナリオライターを起用するかね？」
「本当の理由を聞いて来ます。関係者に当って」
と、亀井は、いった。
亀井は、西本刑事を連れて、出かけて行った。
戻って来たのは、深夜になってからである。
「苦労しました。なぜか、この件では、関係者の口がかたくて」
と、亀井は、いきなり、苦笑して見せた。
「だが、聞き出したんだろう？」
「ええ。聞き出しましたよ。原田利夫は、実は、原田周一郎の次男なんですよ」
「原田周一郎？　聞いたような名前だが――」
「M製薬の社長ですよ。国務大臣をやったこともあります」
「ああ、思い出した」
と、十津川は、肯いた。
「M製薬は、例の三時間ドラマのスポンサーになっています」
と、亀井は、いった。
「なるほどねえ。それで、彼の息子の原田利夫が、シナリオを書くことになったのか？」
「そうなんです。テレビ局も、番組を制作するプロダクションも、スポンサーに弱いですからね」

「M製薬の社長は、大変な個人資産の持ち主だろう？」
「そうです」
「その子供なら、いくら売れないシナリオライターだって、朝から夜まで、パチンコで時間を潰しているというのは、おかしいな。彼は、どんなところに、住んでいるんだ？」
「売れないシナリオライターというので、調べませんでした。どうせ、貧乏暮しだと思って」
「調べよう」
と、十津川は、いった。
翌日、十津川は、原田利夫の住所を、亀井と、訪れてみた。
目黒のマンションの一室だった。真新しいマンションで、2DKの部屋である。
「いい所に住んでるじゃないか」
と、十津川は、いった。
都心のマンションには珍しく、駐車場付きである。管理人に聞いてみると、506号室に住む原田利夫は、国産だが、スポーツ・カーを、持っているという。
（やはりだな）
と、十津川は、思いながら、エレベーターで五階にあがって行った。
原田は、在宅していた。彼は、居間で、自分が書いた三時間ドラマを、ビデオで見ているところだった。
「こうやって、見返してみると、いろいろと、自分の脚本の欠点が見えて、参考になりますよ。活字では面白いと思っても、映像になると、全く詰らないというものが、ありますからね」
と、原田は、十津川たちに向っていい、手を伸して、テレビを消した。
十津川は、ちらりと、テレビに眼をやっただけ

で、
「戸上みどりさんのことで、伺ったんですがね」
「そのことなら、そちらの刑事さんに、くわしくお話しましたよ。つき合いのあったことは、認めているんです。ただ、僕は、売れないシナリオライターですからね。向うが、まともに、相手にしてくれませんでしたよ。それにしても、亡くなったと聞いて、ショックを受けています」
原田は、微笑した。彼女の死を悼む感じはなかった。
「シナリオライターとしては売れなくても、あなたは、M製薬社長の息子さんでしょう？　こんないいマンションに住み、スポーツ・カーも、持っていらっしゃる。それに、若くて、ハンサムだ。女性から見れば、魅力的な相手なんじゃありませんか？」
と、十津川は、いった。
原田は、肩をすくめて、
「世の中は、そんなに甘くありませんよ。シナリオライターとしては、まだ無名。これは、厳然たる事実ですからね」
「パチンコを、よくやられるそうですね？」
「ええ。暇がありますからね。よくやりますよ。安あがりの時間潰しには、一番いいんです」
「二十一日も、パチンコを、やっておられた？」
「ええ。まあ、二十一日に限らず、連日のように、やっています。二十一日も、たまたま、朝から夜まで、やっていたというだけのことです」
「それも、一つの店ではなく、いくつもの店でやるということですが？」
「ええ。あきっぽいんでしょうね」
と、原田は、笑った。
「写真は、お好きですか？」
「え？」
「そこにあるカメラは、かなり高価なものじゃあり

ませんか？」
　十津川は、無造作に置かれたカメラに、眼をやった。
「ああ、コンタックスの安いやつですよ」
「安いといっても、国産カメラに比べると、高いんでしょうね？」
「十二万かな」
　と、原田は、いった。少しばかり、自慢げないい方だった。
「それを持って、日本全国を、撮って歩かれるわけですか？」
　亀井が、きくと、原田は、あわてた表情になって、
「いや、私は、なまけものだから、旅はあまり好きじゃありませんね」
「北海道へ行かれたことは？」
　と、十津川が、きいた。
「昔、一度だけ、行っていますよ。今もいったように、旅行は、あまり好きじゃありませんから」
　と、原田は、繰り返した。
「ちょっと、トイレをお借りしたいんですが。どうも、食べ合せが悪かったのか、下痢気味でしてね」
　十津川は、照れ臭そうにいい、立ち上った。彼がいない間、亀井が、もう一度、二十一日のアリバイについて、質問した。
「朝から、パチンコということですが、何処のパチンコ店ですか？」
　亀井が、ねちっこく聞くと、原田は、うんざりした顔になって、
「新宿にあるパチンコ店を、何店か、梯子しました。先日も、そういった筈ですよ」
「普通は、一店か、二店で、じっくりやるものだと思いましてね」
「それは、その人の好き好きでしょう？　僕は、店

を変えると、気分が変って、よく出るんです」
「しかし、何店も変ると、お金がかかるでしょう？前の店の玉は、使えないから」
「そのくらいの出費は、たいしたことありませんよ」
「なるほど。やはり、M製薬の御曹子ですねえ」
「よして下さい。パチンコの金ぐらい、自分で出してますよ」
「しかし、このマンションの購入とか、スポーツ・カーは、お父さんが出されたんじゃありませんか？」
「まあ、援助は受けてはいますが、それが、事件と、どんな関係があるんですか？」
原田が、怒ったような声でいった時、十津川が、戻って来た。
「カメさん。そろそろ、おいとましようじゃないか」
「もうですか？」
と、亀井がきくのへ、十津川は、
「原田さんに、もう、お聞きすることは、ないようだからね」
と、いった。
マンションの外に出ると、亀井が、不満そうに、
「まだ、いくつか、彼に、聞きたいことがあったんですがね」
「わかってるよ。だが、当人に聞くより、周囲の聞き込みをやって欲しい」
「どんなことですか？」
「トイレに行ったら、廊下に、本棚があってね。旅の本が、何冊も入っていたよ」
「旅行嫌いなんて、嘘なんだ」
「それに、われわれのいた部屋だがね。壁の上の方に、ところどころ、色の変った場所があった。長方形にね」

「何でしょうか？」
「最初は、絵が掛っていたのかと思ったんだが、あんなに何枚も、絵を掛けるというのは、日本人はやらないだろう。とすると、写真を引き伸したパネルじゃないかと思うんだ。彼のマンションに遊びに行った友人か知人を見つけて、何が掛っていたか、聞いてみてくれ」
と、十津川は、いった。
捜査本部に戻ると、十津川は、本部長になっている三上刑事部長に、会いに行った。
「例の北海道の殺人事件ですが、新たに、一人、容疑者が、浮んで来ました。すぐ、道警に連絡したいと思います」
と、十津川は、いい、原田利夫の名前と、彼の写真を、見せた。
予想どおり、三上部長の顔色が変った。
「この男は、本当に、怪しいのかね？」
と、三上は、十津川に、きいた。

8

三上部長に、北海道の事件のことで、圧力をかけたのは、恐らく、原田利夫の父親で、M製薬社長の周一郎だろう。
長男の明は、現在、M製薬で、社長秘書をしているというから、将来は、社長になるに違いない。
次男で、売れもしないシナリオを書いている利夫は、父親から見れば、不肖の息子なのだろうし、それだけに、心配でもあるに違いなかった。
金銭面の援助をし、M製薬がスポンサーになって、三時間ドラマのシナリオも書かせた。利夫が、戸上みどりと、関係が出来たのも、当然、知っていた筈である。
だから、彼女が、北海道で殺されたと聞いた時、

父親の周一郎は、息子の利夫が怪しいと思ったのだ。彼女との仲が、まずくなっていることも、知っていたに違いない。

もし、利夫が犯人だったら、会社の信用にも影響してくる。シナリオライターとしては、無名でも、M製薬社長の息子としてのネームバリューがあるから、週刊誌などが、書き立てるだろう。

周一郎は、何とかしなければいけないと考え、知り合いの三上に、圧力をかけてきた。

三上は、まさか、十津川に、原田利夫のことは調べるなといえないので、

「慎重に頼むよ」

という、いい方をした。

「わかりました」

と、十津川は、肯いたが、中止する気はなかった。戸上みどりの捜査は、道警の仕事だが、河西カメラマンについての殺人未遂事件の捜査は、警視庁の仕事だからである。

亀井たちが、面白い情報を持って、帰って来た。

「原田の友人に会って、話を聞きました。例の居間に、掛っていたと思われるものですが、やはり、大きな写真のパネルです。三月十五日に、遊びに行った時も、五、六枚、掛っていたといっています。何の写真か、わかりますか？」

亀井が、ニコニコ笑いながら、きく。

「北海道の風景写真か？」

「それに、列車の写真です。原田は、自分で撮って、自分で引き伸したんだと、友人に自慢していたそうです」

「やっぱりね」

と、十津川は、満足そうに肯いてから、

「もう一つ、調べて貰いたいことがある。殺された戸上みどりが、病院で堕ろした胎児の血液型だ。もし、あとで、ゆする気なら、ちゃんと、医者に聞い

ている筈だよ」
　亀井は、西本刑事を連れて、すぐ、出かけて行ったが、電話で、連絡してきた。
「警部のいわれた通り、戸上みどりは、四ヵ月前子供を堕ろした時、医者に、胎児の血液型を、確認しておいて欲しいと、特に、頼んだそうです。医者は、それを、母親としての愛情の表われと、思ったそうです」
「それで、胎児の血液型は？」
「B型です。医者の話ですと、胎児は、母親とつながっているので、血液型は、あとで、変ることもあるそうですが、戸上みどりの子供の場合は、間違いないそうです」
「それで、父親の血液型は、どうなるんだ？」
「母親であるみどりの血液型を考えますと、父親は、胎児と同じB型になる可能性が高いと、医者は、いっています」
「原田利夫の血液型は、わかるかね？」
「調べて来ます」
　と、亀井は、いった。
　二人は、二時間ほどで、帰って来た。
「結論からいいますと、原田は、B型ですので、問題の胎児の父親である可能性が強いことになります」
　と、亀井は、十津川に報告した。
「原田は、三年前に、胃の手術をしていまして、その時、輸血をしなければならない場合を考えて、血液型を調べています。間違いなく、B型です」
　これは、西本が、説明した。
「あとは、戸上みどりが、それをネタに、原田利夫をゆすっていた証拠が欲しいね」
　と、十津川は、いった。
「戸上みどりの預金通帳は、調べましたね？」
「ああ。だが、特に、高額の振り込みはなかったん

だ」
「すると、彼女は、現金で貰っていたということになりますか？」
と、亀井が、きく。
「その方が、証拠が残らないと思ったのかも知れないね」
「その金は、どうしたんでしょうか？」
「金遣いが荒かったから、すでに、使ってしまったか、或いは、銀行の貸金庫に、入れてあるかも知れないね」
「彼女の通帳は、B銀行のものでした。それから考えて、貸金庫も、B銀行と思います」
「行ってみよう」
と、十津川は、いった。
「彼女を殺した犯人が、貸金庫のキーを奪い、それを使って、開けてしまっているんじゃないでしょうか？　キーと、印鑑があれば、開けられるんじゃありませんか」
「もし、開けていても、銀行の係が、その人間を、覚えてくれているよ。貸金庫を開ける時は、銀行の人間が、一緒に貸金庫室に入るからね」
と、十津川は、いった。
B銀行に行ってみると、やはり、戸上みどりは、ここに、貸金庫を持っていたし、三月二十一日以後、開けられていないということだった。犯人も、顔を覚えられるのが嫌で、来ることが出来なかったのだろう。
十津川と、亀井は、地下にある金庫室で、戸上みどりの貸金庫を、開けて貰った。ケースを取り出し、ふたを開けてみる。
三千万円の札束が、まず、眼に入った。小さな宝石ケースに入ったダイヤや、エメラルドの指輪、それに、封筒。封筒の中身は、堕ろした胎児の血液型を書いた医者のカルテだった。

「この三千万円は、原田利夫が、払ったんでしょうか？」
と、亀井が、きく。
「いや、払ったのは、多分、原田の父親で、M製薬社長の原田周一郎だよ」
と、十津川は、いった。
「なぜ、そう思われるんですか？」
「第一は、原田が、急に、こんなまとまった金を、自分で、用立てられるとは思えないからだ。第二は、戸上みどりの死体が見つかり、それも殺されたとわかってすぐ、原田周一郎は、うちの刑事部長に、息子の原田利夫が、容疑者となっているかどうか、内密に教えてくれるように頼んだ形跡があるからだよ。つまり、息子の利夫が、殺す動機を持っているのを、知っていたということさ。恐らく三千万円を要求された利夫が、父親に、泣きついたんだろう。だから、父親は、知っていたのさ」
「この医者のカルテは、戸上みどりにとって、打出の小槌だったわけですね？」
「原田家が、身内のスキャンダルを恐れている限りはね」
「しかし、警部。胎児の血液型だけでは、原田利夫をゆすることは、出来なかったんじゃないでしょうか？　B型の血液型で、戸上みどりの周囲にいた男性は、何人もいると思いますから」
「確かに、そうだな。だから、このカルテと、他にもう一つ、何かがあって、その二つを使えば、いくらでも、原田利夫をゆすれたんだと思うね」
と、十津川は、いった。
「しかし、この貸金庫には、それらしいものは、何も入っていませんが」
「いや、ちょっと待ってくれ」
と、十津川は、宝石箱を、手に取って、
「うちの奥さんの宝石箱は、二重底になっていて

ね。そこに、大事なものを納っているんだ」
「どんなものですか？」
「私の書いた誓約書さ」
「警部は、そんなものを書かれたんですか？」
「ああ、結婚する時にね」
と、十津川は、苦笑しながら、宝石をどけて、底を調べていたが、
「やっぱり、二重底になっている」
と、いった。
二重底に入っていたのは、マイクロテープだった。
十津川は、満足気に笑った。
「どうやら、これが、打出の小槌らしいね」

9

そのマイクロテープを持ち帰り、十津川は再生してみた。
どうやら、電話を録音したものらしく、音は悪いが、会話は、はっきりわかるし、女は、戸上みどり、男は、原田利夫だった。最初に、彼女が、「原田さん」と、呼びかけているからである。
「原田さん、どうしても、あなたの子供を生みたいのよ」
——駄目だよ。僕には、君と結婚して、子供を育てていく自信はないんだ。この間いったように、堕ろしてくれ。おやじの知り合いに、口のかたい産婦人科医がいるから、そこへ行ってくれよ。頼むよ。
「お父さんて、M製薬の社長さんね？」
——ああ、君が、まとまった金が欲しければおやじが出すといっている。
「お父さんも、お腹の子供のことを、知ってるのね？」

――ああ、僕が、話したからね。

こんな会話が、延々と続くのだ。戸上みどりは、あとで利用する気で、この電話を、録音したに違いなかった。だから、わざと、原田さんと、いったり、会話の中で、M製薬社長という言葉を入れているのだろう。

「このテープも、医者のカルテも、何回でもコピーできますね」

と、亀井が、いった。

「そうだよ。文字通り、打出の小槌で、何回でも、ゆすれるんだ」

「しかし、貸金庫に入っていたのは、三千万だけでしたね」

「それでも、大金だよ」

「ええ。しかし、原田家の個人資産は、二百億円以上と、聞いていますし、戸上みどりは、当然、それを知っていたと、思います」

「三千万、四千万ではなく、もっと、まとまったものが、欲しくなったのかも知れないな」

と、十津川が、いう。

「原田家の財産ですか？」

「ああ。そうだ。原田利夫は、次男だが、父親が死ねば、遺産が、入ってくる」

「そうですね。子供は二人だけですから、母親が、遺産の半分の百億、残りの百億を子供二人で分けるとして、五十億です」

「五十億の財産家の夫人というのは、悪くない。戸上みどりは、そう考えたんじゃないかな。そして、それが、彼女の命取りになったのかも知れないな」

と、十津川は、いった。

「これで、動機は、十分ですが、原田利夫が、犯人だと証明するのは、難しいんじゃありませんか。一番難しいのは、三月二十一日に、原田が、現場であ

る山軽の廃駅に、行ったことの証明です。雪に埋もれた廃駅に、わざわざ行く人はいないでしょうから、目撃者は、なかなか、見つかりませんよ」

と、亀井は、いった。

「それに、殺したあと、雪が降っているからね。足跡も、消されてしまっている」

「そうです」

「ただ、カメラマンの河西が、襲われたことがある」

と、十津川は、いった。

「警部は、やはり、原田が、犯人と思われますか？」

「思うね」

「しかし、襲った理由は、何でしょう？」

「河西が撮った写真が、理由じゃない。彼が山軽の廃駅へ行ったのは、殺人の翌日だからね」

「ええ」

「道警は、戸上みどりの死体を掘り起こし、ハンドバッグ、カメラ、ショルダーバッグなどを見つけた。だが、その中に、原田利夫の恐れるものは入ってなかったと思う。もし、入っていたなら、原田が、河西を襲っても、仕方がないんだからね」

「すると、河西が、現場で、何か見つけたということですね。少くとも、原田は、河西が見つけた、と思ったということになりますね」

「問題は、河西が、何を見つけたかだね」

と、十津川は、いい、電話を取りあげ、河西の入院している病院に、かけてみた。彼の意識が回復していれば、現場で、何があったか、聞きたかったからである。もし、何か拾っていれば、それを見せて貰いたい。

しかし、受話器を持った十津川の顔色が、変ってしまった。

「すぐ行きます」

と、いって、電話を切ると、十津川は、亀井に、
「河西が、死んだよ」
「本当ですか？　生命に別条はないと、いっていた筈ですが」
亀井も、青ざめた顔になった。
「それなんだが、また、頭の中で、内出血があって、それが、命取りになったらしい」
と、十津川は、いった。
二人は、パトカーを飛ばして、病院に走った。
十津川が、証言を期待した河西は、白い布をかけられて、霊安室に横たえられていた。もう、何も、証言してはくれない。
「犯人は、このことを知ったら、さぞかし、ほっとするでしょうね」
と、亀井が、口惜しそうに、いった。
河西が、語ってくれなければ、他の方法で、必要なことを、知らなければならない。
十津川は、医者と、看護婦に、
「河西さんが、何かいい残したことはありませんか？」
と、きいてみた。
しかし、意識が戻らないままに、河西は、亡くなってしまったという。
あとは、遺品を調べるより他に、方法はない。
十津川と、亀井は、病院がとっておいてくれた河西の所持品を、見せて貰った。彼の背広のポケットに入っていたものが、殆どである。
財布、キーホルダー、ボールペン、運転免許証、名刺、腕時計、テレホンカード、手帳といったものである。
財布の中には、現金四万二千円と、CDカードが、入っていた。
手帳に、何か書いてあればと思い、十津川は、一ページずつ、丁寧に見ていったが、そっけない予定

表が、書き込まれてあるだけで、今度の事件の参考になるようなことは、何一つ、記入がなかった。

名刺の中に、原田利夫のものでもあればと思ったのだが、名刺は、十二枚とも、本人のものだった。

「ありませんね」

と、亀井は、がっかりした顔で、十津川を見て、

「犯人は、河西を襲い、彼のマンションの部屋を、家探しした筈です。その時、自分に不利なものを、見つけてしまったんでしょうか？」

と、きいた。

「それなら、われわれは、お手上げだがね」

「もう一度、彼のマンションを、探してみませんか」

と、亀井が、いった。

二人は、パトカーを、病院から、明大前の河西のマンションに向けた。

二人が着いた時、マンションから嫌な匂いがしていた。消防車が、六台とまっている。

十津川が、パトカーから降りて、マンションを見上げると、三階の部屋が、焼け焦げているのが、わかった。

「306号室が、焼けました」

と、ロープを張って、野次馬の整理に当っていた警官が、十津川に、いった。

「306号室には、今は、誰もいない筈だぞ」

「だから、不審火だと思われます」

と、警官が、いう。

十津川と、亀井は、階段を三階に駈け上った。三階の廊下は、放水で、水浸しになっている。焼けた匂いが、鼻を打つ。消防署の係員が、出て来て、

「灯油を撒いて、火をつけていますね。明らかに、放火です。部屋は、完全に、焼けてしまっています」

と、十津川に、教えてくれた。



「原田ですか？」
亀井は、小声で、きいた。
「他には、考えられないよ」
「しかし、なぜ、放火なんかしたんでしょうか？」
「原田は、どうしても、何かを見つけたかったんだよ。だが、見つからなかった。見つかっていれば、放火なんかする必要はないからね。それで、とにかく、燃やしてしまえということで、灯油を撒いて、火をつけたんだと思うよ」
「もしそれが、部屋にあっても、燃えるか、熱で溶けてしまっていますね」
「完全に、息の根を止められたということかね」
と、十津川は、いった。
それでも、二人は、諦め切れなくて、特別に、焼けた部屋を見せて貰った。
消防隊員の案内で、足を踏み入れる。なるほど、灯油の匂いがする。
（すごいな）
と、十津川は、思った。
何もかも、焼けてしまっているのだ。机も、椅子も、タンスも、完全に、原型をとどめていない。三つあったカメラも、溶けて、不様なかたまりになっている。多量の灯油を、ばらまいたに違いない。
「問題の品物は、手紙とか、写真といったものじゃないな」
と、十津川は、いった。
「そうですね。そういう燃え易いものなら、こんなに、灯油を撒いて、徹底的に燃やす必要はないでしょうから」
と、亀井も、いった。
「とすると、燃えにくいものだね。金属とか、ガラスといったね。そうしたものを、溶かしてしまおうと思ったんだろう」
二人は、焼けただれた306号室を出た。

「西本刑事たちを呼んで、聞き込みをやってくれ。原田が、灯油缶を持って、うろうろしているのを、見た人間がいるかも知れないからね」
と、十津川は、亀井に頼んだ。

10

聞き込みは、不発に終った。
今日の夜明け近くに、マンションの傍で、挙動不審の男を見たという人間は、見つかったが、それが、原田利夫だと断定することは、出来なかったからである。
翌日の午後、河西の妹の京子が、十津川にあいさつに現われた。
河西の遺体を、郷里の水戸に運んで、そこで、葬儀をするという。
「東京に、兄のお友だちがいるので、東京でと思ったんですけれど、場所がありません。マンションの部屋は、焼けてしまいましたし、知っているお寺もありませんので」
と、京子は、いった。
十津川が、肯くと、京子は、続けて、
「それで、兄の所持品も、持ち帰って構いませんか？　棺の中に入れてあげたいので」
「構いませんよ。一応、調べましたから」
「病院には、兄の背広などもありましたけど、それも、兄の形見ですので」
「どうぞ。もともと、お兄さんのものです」
と、十津川は、いった。
大学三年だという河西京子が、帰ってしまうと、十津川は、小さな溜息をついた。
北海道で、戸上みどりを殺したのも、河西を死に到らしめたのも、彼の部屋に放火したのも、原田利夫だと、十津川は、確信している。

しかし、確信だけでは、逮捕することは出来ない。

その上、原田の背後には、製薬会社の社長で、政界にも力を持っている父親の周一郎がいるのだ。

三上部長は、それだけに、慎重の上にも、慎重にと、ブレーキをかけている。

(壁にぶつかったな)

と、十津川は、思った。

亀井が、そんな十津川を心配して、コーヒーをいれて、

「元気を出して下さい」

と、声をかけた。

「出したいんだがねえ」

「原田利夫が、犯人であることは、間違いありませんよ」

「わかってるさ」

「それなら、徹底的に、奴を尾行したらどうでしょう。二十四時間、監視し、尾行したら、いらだって、ボロを出すんじゃありませんか？」

と、亀井が、いった。

「圧力をかけるのか？」

「そうです。前にも、成功したことがありましたよ。わざと、尾行していることを、見せつけて」

「ああ、覚えてるよ。だが、今回は、その手は、使えないな。原田の父親が、うちの上の方に圧力をかけてくるに決っているからだ。原田が犯人という証拠はないんだから、抗議されれば、止めざるを得ない」

「そうですか」

「もともと、三上部長は、原田犯人説に反対だからね」

と、十津川は、いった。

「では、何をしますか？　何が出来ますか？」

と、亀井が、きく。

「時間がかかっても、地道な聞き込みをやるより仕方がないね」
十津川は、肩をすくめるようにして、いった。
改めて、原田利夫の周辺の聞き込みが、始められた。
道警でも、現場である廃駅周辺での聞き込みが、再開された。
だが、一日、二日しても、収穫はなかった。もともと、聞き込みは、すでに行われていたのだから、新しい発見がなくても、仕方がなかった。
その上、原田家の顧問弁護士が、警察は、無実の原田利夫を、犯人扱いするのかと、抗議してきた。
三上部長は、すっかり弱気になってしまって、十津川たちに原田利夫の捜査を中止するように、いった。
「しかし、原田以外に、犯人は、あり得ません」
と、十津川は、いった。
「だが、証拠もなく、逮捕も出来んのだろう？」
「今は、残念ながら、そうです」
「北海道で、事件が起きてから、もう、何日になるんだ？」
「河西が襲われてから、まだ、数日しかたっていません。亡くなってからは、まだ、三日です」
「今までやって、証拠が見つからんのなら、これ以上、捜査を続けても無駄じゃないのかね。捜査は、止めるんだ」
三上が、繰り返していった。
「一日だけ、考えさせて下さい」
と、十津川は、いって、引き退ったが、このまま、捜査を中止する気はなかった。そんなことをしたら、完全な警察の敗北に終ってしまうからだ。第一、殺人犯人を、このまま、野放しには出来ない。
だが、今日中に、奇蹟的に、原田が犯人という証拠は、見つかりそうもなかった。

考え込んでいると、

「警部。警部宛に、書留速達が、届いています」

と、日下刑事が、封筒を差し出した。

書留速達の赤いゴム印が押され、表には、「十津川警部様」と、書かれていた。

裏を返すと、差出人は、「河西京子」になっていた。住所は、水戸市内である。

十津川は、河西の妹の顔を思い出した。もう、河西の遺体は、茶毘に付され、遺骨は、墓地におさめられているだろう。

十津川は、そんなことを考えながら、封を切った。

便箋の他に、小さな布の包みが入っている。

十津川は、まず、手紙に、眼を通すことにした。

〈先日は、いろいろと、有難うございました。おかげさまで、郷里で、葬儀を行うことが出来ました。兄の霊も、これで、少しは、安らかになったと思います。

棺には、兄の所持品を入れました。あの時、病院から持ち帰った背広、靴、ワイシャツ、ネクタイなどもですが、ワイシャツについていたカフスボタンを見て、首をかしげてしまいました。片方は、兄らしい地味な安物でしたが、もう片方は、プラチナに、ダイヤが埋め込まれた高価なもので、兄が使うようなものではないからです。それに、このカフスボタンは、下り藤の家紋をデザインしたもので、これも、河西家のものではありません。わが家の家紋は、鷹ノ羽のぶっちがいですので。

これは、何かあるのではないかと思い、警部さんに、お送り致します。

河西京子

十津川警部様〉

十津川は、小さな布の包みを開けてみた。手紙にあったようなカフスボタンが、転り出た。

手に取ってみる。プラチナの輝やきがある。精巧な彫りで、下り藤の家紋が、作られている。注文で作ったとすれば、二つ一組で、何万、いや、何十万もするのではないか。

「カメさん！」

と、十津川は、急に、大声で呼んで、

「例の原田家の家紋を調べてくれないか。大至急だ」

「家紋ですか？」

「そうだよ。二引きとか、巴とかいった家紋だ」

と、十津川は、いった。

亀井は、電話を掛けまくっていたが、それがすむと、

「原田家の家紋は、下り藤だそうです」

「やっぱり、そうか」

「家紋が、どうかしたんですか？」

「これを、読んで見たまえ」

といって、十津川は、書留速達を、亀井に渡した。

亀井は、手紙を読み、それから、プラチナのカフスボタンに、眼をやった。

「なるほど。河西カメラマンが、北海道の現場で拾い、原田が、必死になって、取り戻そうとしていたものですね？」

「家紋まで入れた特製品だからね。恐らく、廃駅で、戸上みどりを殺した時、ワイシャツの袖から、落ちてしまったんだろう。そのあと、大雪が降って、死体もろとも、隠してしまった。原田は、探しに行こうと思っていたんだろうが、その前に、カメラマンの河西が、廃駅の写真を撮りに行ってしまったんだ」

「拾った河西が、家の中に隠していたら、今頃、原田の手に取り返されてしまっていたでしょうね」
「河西は、多分、カフスボタンが気に入って、自分で愛用していたんだ」
と、十津川は、微笑した。
「彼は、なぜ、これを、道警に届けなかったんですかね？」
「これは、想像だがね。道警は、河西の撮った写真を、全部、提出させている。道警としては、捜査に役立てたいと思ってのことなんだろうが、河西は、容疑者扱いされたと、腹を立てたんじゃないかね」
「なるほど」
「このくらい高価で、手の込んだものなら、特別に作らせたに決っている。聞き込みをやって、原田利夫が注文主かどうか、確認して貰いたい」
と、十津川は、いった。
この聞き込みに、時間はかからなかった。問題のカフスボタンを作る段階で、原田は、別に、自分の名前を隠していなかったからである。
銀座の有名な貴金属店「K」で、去年の十月、原田が、このカフスボタンを作らせていることがわかった。依頼するとき、原田は、自分でデザインを描き、いくらかかってもいいと、いったという。
十津川は、その店の店員の証言と、カフスボタンを持って、捜査本部長に、会うことにした。
あとは、詰めだけである。三上部長は、渋い顔をするだろうが、これで、事件は解決だなと、十津川は、思っていた。

死への近道（アクセス）列車

1

平山は、綿密に計算した。なにしろ、人を殺すのだ。失敗すれば、警察に捕って、刑務所行だ。どんな小さなミスも、許されない。

あけみを殺したあと、平山は、香港に飛ぶつもりだった。

そのあとは、何処へでも逃げられると、考えていた。年に四、五回は、東南アジアを旅行していたから、向うの生活は、苦にならない。

一七時五五分成田発のノースウエストの切符は、すでに、買ってあった。一時間前までに、チェック・インして、搭乗手続を取る必要があるから、一六時五五分に空港ロビーに入っていればいいだろう。

平山は、そこから、逆算していった。一番怖いのは、空港に手配されて、高飛びが出来なくなることだったからである。あけみを殺してから、なるべく早く、機上の人になり、警察が、彼のことを手配した時には、香港に着いていたい。

と、いって、成田から香港までの飛行時間は、短縮できない。平山が、いくら力んでも、この便に乗れば、嫌でも、四時間と二十五分かかるのである。

とすれば、あけみを殺してから、ノースウエストのこの便に乗り込むまでの時間を、少しでも、短縮するしかない。

あけみのマンションは、新宿の初台にある。京王線の初台駅から、歩いて、十分ほどの場所だった。

彼女は、銀座のクラブ「フリージア」のホステス

で、午前中は、寝ていて、平山が訪ねて行っても、会おうともしない。

午後一時頃に起き出し、出かけるのは、午後六時過ぎである。従って、殺すチャンスは、その間ということになる。

殺したあと、成田空港に急ぎ、一七時五五分出発のノースウエスト一七便に乗ってしまえば、成功ということになる。

問題は、あけみのマンションから、成田空港までだった。車では、渋滞に巻き込まれる恐れがある。

それが、春のダイヤから、新宿から成田空港まで、直通の特急列車が、走ることになった。成田エクスプレス、略して、〝NEX〟である。

新宿、東京から乗車できて、成田空港ターミナル直下の空港駅まで走る。この列車が生れたので、平山は、新宿から成田までの時間も、計算できることになった。

成田空港に、一六時五五分に着けばいいとすると、丁度、ぴったりの成田エクスプレスがあることに、気がついた。

一六時五五分に成田空港に着く、成田エクスプレス31号である。この列車の新宿発は、一五時四〇分だから、何時に、あけみを殺さなければならないかも、自然に、導き出されてくるのだ。

あけみのマンションから、新宿駅まで、余裕をみて、三十分と考えておくことにした。タクシーを拾って、甲州街道を走らせてもいいし、タクシーが拾えないようだったら、京王線を利用すればいいし、それでも、三十分あれば、ゆっくり、新宿駅に着くことが出来る。

引き算をしていくと、あけみを殺す時刻が、自然に、わかってくる。

一五時一〇分。これが、あけみを殺すぎりぎりの線なのだ。これ以前に殺せばいいのだが、あまり前

では、成田から飛行機に乗るまでに死体が発見され、手配されてしまう。何しろ、あけみが死ねば、真っ先に疑われる立場にいるからである。

だから、一五時一〇分になるべく近い時間に、彼女を殺し、計画に従って、成田エクスプレスに乗り、成田空港に行かなければならないのだ。

平山は、現在、三十四歳、傷害事件を起こして、執行猶予の刑を受けたことはあるが、もちろん、人を殺した経験はない。

（人を殺すというのは、どういうことなのだろうか？）

と、平山は、考え、

（おれに、本当に、人が殺せるだろうか？）

と、不安になる。

だが、あけみを殺さなければ、自滅することも、はっきりしているのだ。何しろ、あけみが、水商売で貯めた二億円の金を、欺しとっていたからである。

平山の人生は、嘘でぬりかためられていた。

現在、彼の名刺の一つには、「平山交易　株式会社取締役社長　平山　実」の肩書きがついているが、そんな会社は、実在しない。他にも、いろいろな名刺を刷って、用意してある。

「××探偵事務所」もあれば、「××法律事務所」もある。これは、もっぱら、相手を脅すためのもので、前者は、小金を貯めている相手を、欺すためのものだった。

今まで、それで、何とか、うまくやって来た。平山の武器は、何となく信用できそうな容貌と、滑らかではないが、相手を信用させてしまう話し口だった。

それが、あけみで、失敗してしまった。

欲張り過ぎたのがいけなかったのだと思う。今までは、小悪党らしく、百万円単位の金を欺しとって

いたから、平山が、姿を消してしまえば、諦めてくれたのだが、あけみの場合は、二億円の大金を、平山交易に、投資させてしまったのである。

あけみは、突然、二億円を、一週間以内に返さなければ、暴力団に頼んで、平山を殺してやると、いい出したのだ。単なる脅しと思えなかったのは、その前に、K組の新井という暴力団員を、叔父だといって、紹介されたことがあったからである。

もちろん、叔父というのは嘘だが、あけみは、次第に、平山を信用できなくなって、欺すと怖いわよという脅しをかけたのだろう。

平山が、私立探偵に頼んで、調べて貰ったところ、新井には、殺人の前科があり、K組の組員だが、一匹狼に近く、金のためなら、どんなことでもやるということで、組でも、やや、持て余し気味だと、わかった。

そんな男に、あけみが、金を払えば、間違いなく平山は、殺されてしまうだろう。東南アジアに逃げても、K組は、東南アジアに強いから、追いかけてくるに違いなかった。

平山に残された道は、二つしかなかった。二億円を返すか、あけみが新井に、金を渡して、殺しを頼む前に、彼女を殺して、逃げ出すかである。

二億円の中、一億円近くは、使ってしまったから、返すことは、出来ない。とすれば、あけみが、金を新井に渡す前に、殺して、逃げ出すしかない。新井だって、金にならなければ、平山を、追い廻したりは、しないだろう。

ただ、警察に追われることだけは、覚悟しなければならない。あけみは、店のママや、マネージャーに、平山の会社に投資していることを話していたし、同僚のホステスにも、投資させていたからである。あけみが、殺されれば、間違いなく、真っ先に、平山が、マークされるのだ。

JR

2

「明後日の午後二時過ぎに、金を返しに君のマンションに行くよ」

と、平山は、あけみに、いっておいた。

そして、昨日の午後、実際に、計画通りに、動いてみた。

あけみのマンションの傍から、午後三時一〇分に出発して、京王線を使って、新宿に出て、一五時四〇分発の成田エクスプレスに乗り込み、成田空港に向った。

平山は、成田エクスプレスに乗るのは、初めてだった。この列車が走る前は、タクシーを、成田まで飛ばしたり、上野から、京成電鉄を利用して、不便な空港だなと、腹を立てていたのである。

新宿駅も、この列車の発着のために、変ってしまっていた。

南口が、きれいになり、改札口を通って、コンコースに入ると、その奥に、有料の待合室が、作られていた。多分、会社関係の人間が、成田から出発する上司や同僚を送別するのに、使うのだろう。

成田エクスプレスが発着するのは、新しく作られた3・4番ホームである。ホームへおりるエスカレーターに乗りながら、平山は、ホームの番号を頭に叩き込んだ。あわてて、間違えたら、計画が、めちゃめちゃになって、香港行の便に、乗れなくなってしまうからである。

列車は、三両編成。赤黒白と三色に塗りわけられた車両だった。ホームには、同じ赤、黒、白のカラーのユニホームを着たコンパニオンがいて、彼女が、改札して、車内に入る。成田まで、車内改札がないのは、有難かった。

普通車二両と、グリーン一両で、グリーンには、

四人用のコンパートメントもあった。

平山は、グリーン車に乗ってみた。その方が知った人間に顔を合せる可能性が、小さくなると、思ったからである。

この日は、成田まで、知った人間には、会わなかった。明日も、同じであって欲しい。

列車は、東京駅の地下で、横浜から来た列車と、ドッキングして、成田に向う。

成田空港駅には、定刻の一六時五五分に着いた。プラットホームは、地下二階で、改札口は、地下一階になっている。

この外が、セキュリティエリアである。更に進むと、中央ビルの地下で、北ウイングの表示と、一階の到着ロビー、四階の出発ロビーへの矢印が、眼につく。

平山は、腕時計を見ながら、実際に、出発ロビーまであがってみた。明日は、この他に、パスポートや、手荷物のチェックなどに時間がかかるが、何とか、間に合って、香港行の飛行機に乗れることを、確認した。

(これで、大丈夫だ)

と、平山は、自分にいい聞かせたのだが、やはり、明日は、あけみを殺さなければならないと思うと、夜、ベッドに入っても、なかなか、眠れなかった。

金は、もう、香港の銀行に移してある。香港まで逃げられれば、何とかなるのだ。そういい聞かせても、寝つかれない。夜明け近くなって、やっと、うとうとしたが、逃げ切れずに、K組の新井に刺される夢を見て、飛び起きてしまった。

弱気になってくる自分を励まし、午後一時に、あけみに、電話をかけ、念を押した。

「これから、金を持って行くからね」

と、平山は、いった。

「全額、持って来てくれるんでしょうね？」
「ああ、大丈夫だよ。午後二時までに、必ず行く」
と、平山は、いって、電話を切った。
平山は、自宅マンションを出ると、まず、新宿駅に行き、南口のコインロッカーに、トランクを入れておいて、京王線で、初台に向った。
三日前に買ったナイフを、内ポケットに忍ばせていた。殺し方については、いろいろと、考えた。あけみの部屋には、鉄製の灰皿があるから、これで殴りつけてもいいし、コードや、ロープで、首を締めてもいい。だが、それが、上手くいかなかった時に使うつもりで、ナイフを、買ったのだ。
失敗は許されなかった。失敗したら、あけみが何をするか、わからないからである。警察に通報するのは、まだいい方で、例の新井に、平山を殺させるかも知れない。多分、失敗は、死に通じるのだ。
二時十五分前に、あけみのマンションに着いた。
ベルを鳴らすと、ネグリジェ姿のあけみが、顔を出した。
「入ってよ」
と、彼女が、いった。
平山は、内ポケットのナイフを確かめてから、中に入った。
あけみは、平山の身体を、じろじろ見つめてから、
「手ぶらなの？　お金はどうしたの？」
と、眉を、吊りあげた。
「車に置いてあるよ」
「じゃあ、すぐ、持って来て」
「その前に、冷たいものを、一口飲ませてくれないか。今日は、暑くてね。そのあとで、取ってくるよ」
と、平山は、いった。のどが渇いているのは、本当だった。が、気温のせいではなく、緊張のせいだ

った。
「ビールでいいの？」
「ああ、それで結構だ」
と、平山が、いうと、あけみは、背を向けて、キッチンに立って行った。
（今だ！）
と、平山は、自分にいい聞かせた。
テーブルにあった鉄製の灰皿を摑んで、あけみの背後に忍び寄り、振りかぶった。
とたんに、平山は、自分の後頭部に、強烈な衝撃を受けて、眼がくらんだ。誰かが、もう一人、この部屋にいたのだ。
（畜生！）
と、思いながら、平山は、気を失っていった。

3

意識が、戻った。
反射的に、腕時計を見る。ほとんど、時間は、たっていなかった。十二、三分である。
まだ、後頭部が、ずきずきする。起き上ったとき、彼の眼に、倒れているあけみの姿が、飛び込んできた。
最初は、ただ、倒れているだけだと思ったのだが、ネグリジェ姿の背中に、ナイフが突き刺さり、流れ出た血が、ピンクのネグリジェを、赤く染めているのに、気がついた。
見覚えのあるナイフだった。内ポケットに手をやると、ナイフが、無くなっている。
無くなっているのは、ナイフだけではなかった。香港までの航空券、財布、それに、香港に支店のあるM銀行の通帳まで、消えてしまっている。
（あいつだ）
と、思った。

新井に違いない。

あけみは、平山が、信用できずに、万一に備えて、新井を呼んでおいて、バスルームにでも、潜せておいたのだろう。

平山が、あけみを、殴り殺そうとしたので、新井が、飛び出して来て、平山を、殴った。

ところが、そのあと、新井は、変心した。あけみを殺し、平山の財布、航空券、預金通帳などを奪った。あけみの金だって、奪ったかも知れない。

そして、香港に逃げる気だ。

(畜生!)

と、思い、平山は、何とかしなければと、自分にいい聞かせた。

洗面所で、顔を洗った。殴られた後頭部を、冷やしながら、どうしたらいいか、考えた。

新井は、平山の用意した航空券で、一七時五五分のノースウエスト一七便に乗る筈だ。追いかけて、つかまえて、奪われたものを、全部、取り返さなければならない。

(香港へ行くのは、おれでなければならないんだ)

平山は、キッチンに行き、そこにあった出刃包丁を、抜き取り、タオルでくるんだ。

マンションを飛び出し、丁度、通りかかったタクシーに乗り込んで、新宿駅南口に急いだ。

新井だって、一七時五五分発のノースウエスト便に乗るには、成田エクスプレスに乗らなければ、間に合わないのだ。それは、平山自身が、計算したのだから、わかっている。

新宿駅南口に着くと、コインロッカーのことを思い出して、寄ってみた。が、その時になって、ロッカーのキーも、奪われていることに気がついた。

新井は、コインロッカーのキーも、奪ったのだ。きっと、何か、金になるものが、そこに入っていると思ったのだろう。そのトランクの中には、金は入

ってないが、全く、金目のものが入っていないこともない。自宅マンションの中にあった、高価なものだけを、放り込んで来たのだ。平山は、カメラ道楽で、昔のライカや、ハッセルブラドなどを持っていたから、それを、トランクの中に入れて来ていた。

それも、新井に、奪われてしまった。腹立たしさが、平山の胸の中で、倍加した。

(取り返してやる)

と、誓った。香港へ行くのは、自分でなければならないのだ。

暴力団員だということは、怖い。だが、今は、怒りが、怖さに勝っていた。それに、相手は、あけみを殺して、逃げようとしているのだ。向うには弱味がある。それだけ、こちらが、優位に立っている筈だった。

成田エクスプレスの切符を買い、3・4番ホームに降りていった。

まだ、一五時四〇分発の電車は、ホームに入っていなかった。平山は、ホームで、待っている人々の中に、新井の姿を探したが、見つからない。キヨスクのかげにでも、隠れているのか。見つからないうちに、電車が、3番線に入って来た。

乗客が、どっと、乗り込む。大きな荷物を持った人が多いのは、やはり、成田空港へのアクセス列車である。

平山も、トランクケースを持って、乗る筈だったのに、今は、人を追って、乗り込んだ。

動き出すと、彼は、ゆっくりと、一両ずつ、通路を歩いて行った。

座席は、ほぼ、満席に近かった。帰国するらしい外人客もいれば、座席を向い合せにして、お喋りをしている家族連れもいる。やたらに、車内の写真を撮っている若者は、多分、成田から飛行機に乗るのではなく、この列車を見物しに乗ったのだろう。

四人用のコンパートメントには、乗客の姿はなかった。

全部の座席を見たつもりだが、新井の姿はない。トイレに入っているのかとも考え、近くで、じっと待っていたが、出て来たのは、若い女性だった。

（いない）

と、思い、

（おかしいな）

と、首をかしげた。

平山は、成田空港までのルートを、いくつか考えて、比べてみたのだが、成田エクスプレスを利用するのが、一番、早いのである。

しかも、一七時五五分発の香港行のノースウエスト機に乗るのなら、成田エクスプレスを利用しなければ、間に合わない筈だった。一時間前に、チェック・インしておこうと思えばである。

だが、二度、車内を往復しても、新井の姿はなかった。

成田エクスプレスは、次の停車駅の東京まで、ノンストップで走る。使用するレールは、環状線である。

平山は、念のために、車掌に、東京駅の到着時刻を聞いてみた。一六時丁度に着くという。新宿から、二十分かかるのだ。

これなら、新宿で、中央快速に乗った方が、四谷、御茶ノ水、神田と停車しても、早く、東京駅に着くのではないか。平山も、何回か、中央快速に乗ったことがあるが、確か、十二、三分で、東京に着いた筈である。

（それなら、新井は、東京まで、中央快速に乗ったのかも知れない）

と、平山は、考えた。それなら、この成田エクスプレスに乗っていなくても、おかしくはないのだ。

車掌のいった通り、一六時丁度に、東京駅の地下ホ

ームに着いた。昨日、乗ったときと、もちろん、同じである。

前方に、横浜発の成田エクスプレスが、先に来て停車していて、ここで、連結される。

ホームで、その様子を見守っている野次馬がいるが、平山は、東京駅から乗ってくる乗客を、見つめた。

十二、三人が、乗って来た。が、なぜか、新井の姿は、なかった。

(おかしい)

と、思っているうちに、六両編成になった成田エクスプレス31号は、東京駅を発車した。

これから先は、成田空港まで、ノンストップである。錦糸町近くで地上に出ると、一三〇キロのスピードで走る。

新宿から、東京までは、中央快速に乗ってもいいのだが、東京から先は、この成田エクスプレスより早く、成田空港に着ける交通機関はない筈である。

それなのに、新井は乗っていない。

平山の航空券を奪って、香港に行くつもりだったが、気が変ったのだろうか?

(待てよ)

と、平山は、思った。

あけみのマンションにいたのを、暴力団員の新井と、決めつけていたが、或いは、別人かも知れないと、思い始めたのである。

新井は、確かに、腕力もありそうだし、人殺しの前科もある。脅しに利用するには、恰好の男だろう。

しかし、恋人の感じではない。

マンションに潜んでいたのは、あけみの恋人だったのではないのか?

新井なら、前に、叔父として、平山に紹介しているのだから、別に、隠れている必要もなかったので

はないか。堂々と、平山の前に出て来た方が、彼を、ビビらせる効果はある筈だからだ。

平山の知らない恋人だったら、話は別である。万一に備えて、バスルームに隠れていてくれと、あけみが頼んだことは、十分に考えられる。

その恋人が、欲に眼がくらんで、彼女を、裏切ったのではないのか？

それなら、いくら新井を探しても、見つからない筈なのだ。

あけみに、自分以外に、二、三人の男がいたことは、平山も、気付いていた。

彼女の働いていたクラブのマネージャーとも、関係があったと、同僚のホステスから、聞いている。

あのマネージャーなら、よく顔を知っているが、この列車には、乗っていない。

他の男たちの顔は、残念ながら、平山は、知らないのだ。

成田空港着が、一六時五五分だから、あと、五十分近くある。

平山は、自分の座席に腰を下し、必死に考えた。

あけみ本人が、恋人のことを、何かいってなかったか、同僚のホステスが、それらしい男のことを、話してくれていなかったか、それを思い出そうと努めた。

あのクラブには、十五、六人のホステスがいた。

その中に、一人、古参のホステスで、噂好きで、お喋りがいた。名前は、確か、ひろこだった。そのひろこが、あけみの休みの時、彼女について、あれこれ喋ってくれたことがあったのだが。

4

捜査一課の十津川たちは、その頃、あけみこと、井上冴子の死体の傍にいた。

隣室の女が、冴子の部屋のドアが、開けっ放しになっているので、おかしいと思い、のぞき込んで、死体を見つけたのである。

刺された背中から流れ出した血は、すでに、乾いてしまっている。

発見者の隣りの女性が、十津川に、彼女のことで、いろいろと、話してくれた。

「彼女はね、銀座のクラブ『フリージア』で働いてたの。あたしも、似たような仕事をしてるから、彼女と、よくお喋りをしたわ。嫌な客のこととか、お金儲けのおいしい話はないかとかね」

「犯人に、心当りは？」

と、十津川が、きいた。

「多分、平山という男ね」

「どういう男ですか？」

「口の上手い男だわ。貿易会社の社長だってことだけど、本当かどうかわからないわ。多分、インチキね。彼女、そのインチキに欺されて、二億円近くも、むしり取られたのよ。投資したことになってるのに、ぜんぜん返してくれないって、いつも、怒ってたわ。どんなことをしても、取り返したいっていうから、あたしの知ってる怖いお兄さんに、頼んでみたらって、いったこともあるわ」

「怖いお兄さんというのは、暴力団員のことですか？」

「ええ。K組の新井って人。ちょっと知ってたんで、彼女に、紹介してやったのよ。彼女、新井を使って、平山を脅したみたいだわ。おかげで、二億円を返してくれそうだって、喜んでたんだけど、平山には、その気がなかったみたいね」

「平山の住所は、わかりますか？」

「中野のマンション。ヴィラ『中野東』の306号室だわ」

「よく知っていますね」

「彼女に、連れて行かれたことがあるの。その頃は、彼女、平山のことを信用していて、あたしにも、投資をすすめたの。あたしは、お金がなかったから、損しなくてすんだけど」

と、笑った。

十津川は、すぐ、若い西本刑事たちを呼んで、平山と、K組の新井に、会ってくるように命じた。

新宿のK組に行った日下刑事から、まず、連絡が入った。

「新井と、K組の事務所で会いました。平山には、会ったことがあるといっています。あけみが、彼に、自分のことを、叔父だと紹介したそうです。脅しに、新井を使ったんでしょう。その礼として、十万貰ったと、いっていますが、もっと、貰ったかも知れません」

と、日下は、いった。

続いて、中野に行った西本刑事から、電話があった。

「平山は、いません。管理人に開けて貰って、部屋に入りましたが、これは、高飛びしたあとですね。目星いものは、何もありませんから、持って逃げたんだと思います」

「被害者から欺し取った二億円は、どうなったか知りたいね。近くに、銀行はないか？」

と、十津川は、きいた。

「M銀行の支店があります」

「そこへ廻ってくれ。午後三時を過ぎているが、まだ、支店長はいるだろう。平山が、預金してないかどうか、聞くんだ」

「わかりました」

と、西本はいって、電話を切った。

死体は、解剖のために、運ばれて行った。十津川は、鑑識課員に、

「指紋は、採れそうかね？」

と、きいた。
鑑識の一人が、
「指紋は、べたべたついていますよ。犯人は、よほど、あわてて逃げたんでしょうね。拭き取った気配もありませんね。ドアのノブにもついているし、テーブルにもついています」
「ナイフの柄には？」
「そこだけは、拭き取っていますよ」
と、鑑識課員は、いった。
部屋の中を調べていた亀井刑事が、被害者が、男と撮っている写真を見つけ出した。
四十歳前後の実直なサラリーマンタイプの男と、腕を組んでいる写真だった。隣りの女性に見せると、それが、平山だと、いう。
「まじめそうな顔をしていますね」
と、十津川がいうと、彼女は、苦笑して、
「一見、まじめな感じの顔に、みんな欺されるのよ」
と、いった。
M銀行中野支店に廻った西本刑事から、電話が、入った。
「今、銀行にいます。平山は、一億円あまりの預金をしていたそうです」
と、西本が、いった。
「その預金は、今、どうなってるんだ？」
「それが、面白いことに、最近になって、M銀行の香港支店の方に、どんどん、送金されているんです。平山が、香港に行ったとき、向うで、口座を作ったんだと思いますね」
「香港か」
「全部で、日本円にして、一億二千万円ほどだそうで、中野の口座は、五百円しか、残っていません」
と、西本は、いった。
「五百円じゃあ、ラーメン一杯だな」

「そうです。香港で、生活する気なのかも知れません」
「平山の逃げた先は、香港かも知れんな」
と、十津川は、いった。
「今頃、成田に向っているか、もう、着いているかも知れません」
と、亀井が、横からいった。
十津川は、西本との電話を切り、腕時計に眼をやった。
午後四時二十五分。
「カメさん」
と、亀井に、眼をやって、
「午後四時からあとの全ての香港行の飛行機の乗客名簿の中に、平山の名前があるかどうか、知りたいね」
「すぐ、成田に、電話してみます」
と、亀井が、いった。

5

平山は、思い出そうと、努めていた。
ひろこというホステスが、何を話してくれたかをである。
丁度、店に行ったら、あけみが、休んでいた時だった。
平山のテーブルに、ひろこと、もう一人、若いホステスが、来たのだ。
平山が、あけみを口説いて、「平山交易」に出資させ始めた頃だったと思う。ひろこには、平山が、あけみに、熱をあげていると、映っていたらしい。
「あけみちゃんには、好きな人がいるのよ」
と、ひろこは、忠告めいた口調で、いったのだ。
あの時、平山は、もっともらしく、
「じゃあ、僕のライバルってわけだね」

と、ひろこにいった。その後、ひろこが、あけみの恋人について、いろいろと、お喋りをしてくれたのだった。

平山は、必死になって、その時のひろこの話を思い出そうとした。

二、三人の男の話をしたのだが、ひろこが、特に、くわしく話してくれた男のことがあった。

名前は、忘れてしまったが、ひろこは、ニヤニヤ笑いながら、

「それが、本当に、いい男なの」

と、いっていた。

「男前だけなら、ドラマの主役をやれると思うんだけど、なぜか、人気がないのよね」

とも、ひろこは、いった。

俳優なのだ。その男に、あけみが、惚れていると、いっていた。あの時は、平山は、あけみの金を巻きあげるのが目的だったから、別に、彼女に恋人がいても、どうということはなくて、聞き流してしまったのである。

ひろこと一緒に、平山のテーブルに来た若いホステスも、その男について、何かいった筈なのだ。

確か、アメリカの俳優の誰かに似ているといったのではなかったか。かなり有名な俳優で、彼が主演した映画のことが、話題になったのを、思い出した。

平山も、その映画を見ていたから、ひろこたちと、話が、はずんだのである。平山は、年間、一本か、二本しか映画を見ていない。従って、その映画は、限られてくる。

(何という映画だったろうか?)

平山は、最近見たアメリカ映画の題名を、思い出そうとした。

今年は、まだ一本も見に行っていないし、去年も、二本しか見ていないから、題名は、簡単に、思

い出せた。

多分、その二本のどちらかなのだ。

平山は、恋愛映画は、苦手で、勇ましいか、はらはらする映画しか見ない。去年見たのは、ダイ・ハード2と、インディ・ジョーンズの三作目である。

そのどちらかに出ている俳優と、似ているということなのだ。

ダイ・ハード2の主演は、ブルース・ウィリス。インディ・ジョーンズは、ハリソン・フォードだった筈である。

そのどちらだったろうか。平山は、また、記憶の糸を、必死に、つむぐことにした。確か、若いホステスが、自分も、その俳優が好きだといったのだ。そのくせ、映画は、ほとんど見ないとも、いっていた。

と、すると、彼女は、テレビで、その俳優を見たのだ。どちらの俳優が、テレビに出ていたろうか？

インディ・ジョーンズの第一作が、テレビで放映されたことがある。確か、午後九時からの放映だった。ダイ・ハード2は、まだだが、1の方が、最近、放映されている。それに、「こちら、ブルーム探偵社」という、ブルース・ウィリスのドラマが、連続して、放映されている。

これでは、どちらともいえないのだ。

（それに、夜の仕事のホステスが、夜に放映されたドラマを見るだろうか？）

もちろん、ビデオで録画しておけば、見られるが、あのホステスは、そんな面倒なことをしそうな女ではなかった。

とすると、あと考えられるのは、CMだった。アメリカの有名な俳優が、日本のCMによく出ているから、ホステスは、それを見たのではないか。

そう考えると、ブルース・ウィリスの可能性が強くなってくる。最近、ダイ・ハードのパロディで、

CMに、ひんぱんに出ているからだ。
（ブルース・ウィリスに似た男か）
日本人と、アメリカ人では、骨格が違うから、ブルース・ウィリスにそっくりの日本人がいる筈がない。恐らく、感じが似ているのだろう。
平山は、その気になって、もう一度、車内を、歩いた。
成田エクスプレスは、時速一三〇キロで、走り続けている。快適なスピードながら、かなりゆれる。
平山は、身体の平衡を保ちながら、通路を歩いた。何となく、航空機の機内を思わせる車内である。
国際空港行ということで、外国人の姿も多い。ふと、ブルース・ウィリスに似た顔を見つけて、はっとしたが、それは、本物の外国人だった。
肝心の男は、なかなか、見つからない。考えてみれば、ブルース・ウィリスに似ているといったのは、ホステス二人で、彼女たちの勝手な考え方かも知れないのである。
平山は、別の方法をとることにした。
新宿駅南口のコインロッカーから奪われたサムソナイトのトランクのことだった。ブルーのトランクで、隅にフィリピン旅行の時につけた傷がある。
この列車には、荷物を入れる場所が多い。座席の頭上に、航空機と同じ開閉式の荷棚があるが、あのトランクは、入らないだろう。
と、すると、各車両のデッキ近くにある大型荷物の置場にある筈だと思い、平山は、見ていった。
さすがに、海外旅行をする乗客が多いので、どの車両の荷物置場も、トランクや、スーツケースで、一杯だった。
本来なら、平山が、ここにトランクを置いて、グリーンの座席に腰を下し、香港旅行の夢を見ている筈なのだ。

似たようなトランクもあって、よくわからない。
平山は、しゃがみ込んで、念入りに、調べていった。通りがかった乗客が、変な顔をして、見ていく。
一両、二両と、調べていった。見つからないと、もう一度、逆の車両から、調べていった。
(見つけたぞ!)
と、思った。
やっと、見つけたのだ。間違いなく、自分のトランクだった。
グリーン車の荷物置場である。
平山は、サングラスを掛け直して、改めて、座席を見て歩いていった。

6

成田空港に問い合せていた乗客名簿について、回答が、十津川に届いた。
平山の名前が、今日の一七時五五分発、香港行の乗客名簿に、のっているという回答である。
十津川は、反射的に、時計に眼をやった。
一六時三〇分を過ぎたところだった。
「国際線は、何時間前に、行けばよかったかな?」
と、十津川は、部下の刑事たちの顔を見廻した。
「確か、一時間前だったと思います」
と、亀井が、答える。
「すると、あと、二十五分か」
「空港派出所に電話して、平山が現われたら、逮捕しておくように、頼んでおきましょう」
「出来れば、われわれも、成田へ行きたいがね」
と、十津川は、いった。
「普通の方法では、とても、間に合いません。ヘリコプターを、頼みましょう」
と、亀井がいった。

警視庁航空隊のヘリに運んで貰うことにした。
それも、基地まで行っていたのでは間に合わない。そこで、近くの中野の小学校の校庭を、借りることにした。
十津川たちは、パトカーで、話のついた中野×小学校の校庭に、急行した。

7

ゆったりしたグリーン車の通路を、平山は、ゆっくり歩いて行った。
向うは、平山の顔を知っている筈だった。背後から殴って、気絶させ、彼を、あけみ殺しの犯人に仕立てたのは、そいつに、違いなかったからである。
だが、平山の方は、ブルース・ウィリスに似た俳優としか、わからないのだ。
座席は、通路の両側に一列ずつというぜいたくさで、回転式なので、窓に向けて、座っている乗客もいる。
(おれを見て、逃げ出すのが、奴なのだ)
と、思い、平山は、わざと、サングラスを外して、歩いて行った。
だが、見つからない。
(あとは、個室だ)
と、思った。この列車には、四人用のグリーン個室がある。四人分だけ、料金さえ払えば、一人で占領することも、出来る筈だった。
平山は、閉っているドアをノックした。
「車掌です。開けてくれませんか」
と、大声で、いうと、ドアが、小さく開いた。
顔が合ったとたんに、平山は、
(こいつだ!)
と、直観した。雰囲気が、あのブルース・ウィリスなのだ。

あわてて、ドアを閉めようとする男を、蹴飛ばして、平山は、自分も、個室の中に、入って行った。他に、乗客はいない。やはり、ひとりで、占領していたのだ。

「あけみを殺したな！」

と、平山は、叫んだ。

「そんなことは、知らん！」

と、男も、大声で、叫んだ。

「とぼけるんじゃない！　おれを、あけみ殺しの犯人にして、香港へ飛ぶ気なんだろう。遊んで帰って来る頃は、おれが、犯人として、捕ってるとでも思ったのか」

「何のことか、わからないね」

男は、青ざめた顔ながら、落ち着いた眼になって、平山を見返した。

（こんなことには、馴れてる奴なのか）

と、平山は、思った。

ブルース・ウィリスに似て、がっしりした身体つきである。傷害事件くらい起こしている男かも知れない。

平山は内ポケットから、持って来た出刃包丁を取り出した。乱暴に、巻いていたタオルを振りほどく。

とたんに、男の顔が、緊張し、怯えの色が走った。

「まず、おれの航空券や、預金通帳を返して貰おうか」

と、平山は、包丁を、男に突きつけて、いった。平山の方も、緊張のあまり、声が、ふるえてしまった。

「わかったよ」

と、急に、男が、小さく、手を広げるようなポーズを作った。

平山も、一瞬、拍子抜けした感じで、

「それなら、全部、返すんだ。それから、君には、自首して貰う。おれは、やってもいない殺人で、警察に追いかけられるのは、嫌だからな」
「わかってるよ。全部、返すよ」
と、男は、いい、内ポケットに、手をやるようなゼスチュアを見せてから、いきなり、右足で、平山を、蹴りあげてきた。
油断していたところを蹴られて、平山は、反対側のソファに、引っくり返った。
手に持っていた包丁が、飛んで、床に落ちた。
「畜生！」
と、跳ね起きて、個室から逃げ出そうとする男の腰に、しがみつく。
間もなく、成田である。逃がしてたまるかという気持だった。
男は、振り向くと、凄い眼つきで、平山を睨んだ。いきなり、男の右の拳が、飛んできた。
ぐわんと、激しい衝撃が、平山を、また、はじき飛ばした。一瞬、目まいがした。床に転がったが、伸した手の先に、包丁があった。それをつかむと、
「殺してやる！」
と、平山は、叫んだ。
本当に、殺す気になっていた。
男は、通路に飛び出すと、突然、「助けてくれ！」と、大声で、叫んだ。
「こいつは、人殺しだ！　東京で、人を殺して来たんだ！」
続いて飛び出した平山は、男のその叫びに、立ちすくんだ。
車内の乗客が、一斉に、自分を見ているのに、気付いたからだった。
殴られた時、唇を切って、血が流れている。
そんな男が、出刃包丁をつかんで、仁王立ちになっているのだから、誰が見ても、人殺しの感じだろ

う。
外国人の女性が、派手な悲鳴をあげた。
男は、じりじりと、後ずさりしながら、
「皆さん。用心して下さい！　あいつは、見境いなく、人を殺しますよ！」
と、叫び続けている。
乗客たちは、怯えて、立ち上り、逃げ出して行く。
「違うんだ。そいつが、人殺しだ！」
と、平山は、怒鳴り返した。
が、誰も、信じる気配はない。
騒ぎで、車掌が、飛び込んで来たが、平山に向って、両手で、押し戻すような仕草を見せて、
「お客さん。何があったのか知りませんが、落ち着いて下さい！」
と、声をふるわせて、いった。
「おれは、人殺しなんかじゃない！」
「わかっています。わかっています。だから、落ち着いて下さい」
と、何もわかっていない顔でいう。
その間にも、あの男は、逃げる乗客と一緒に、姿を消してしまった。
いつの間にか、グリーン車の中は、平山と、車掌の二人だけになっている。
（このまま、成田空港駅に着いてしまったら、あの男に、まんまと、逃げられてしまう）
と、平山は、思った。
あせった。間もなく、空港なのだ。
「列車を止めろ！」
と、平山は、包丁を突きつけながら、車掌に、いった。
「それは、出来ません。間もなく、空港駅に着きます。そうしたら、ゆっくり、話し合いましょう」
と、車掌が、いう。彼も逃げたいのだろうが、責

任があるので、逃げられないでいる感じだった。
「話し合いなんか必要ないんだ。今、逃げて行った奴が、人殺しなんだよ。捕えて、警察に突き出してくれ。おれは、何にもやってないんだ」
と、平山は、繰り返した。
「それを、私と一緒に行って、警察に話したらいいですよ」
車掌は、努めて、優しい声を出した。
平山は、話しても、駄目だと思った。車掌は、全く、彼の言葉を信じていないからだ。空港駅に着いたら、すぐ、警察に突き出す気なのだ。そうなれば、平山には、犯人ではないことを証明する手段がない。
平山は、車掌を説得するのを諦めて、非常用ボタンを探した。
このまま、この列車を、空港駅に着けてはいけない。その意識だけが、平山の頭を、支配していった。
もう、香港に行きたいとは、考えなくなっていた。
あいつを、行かせてはならない。もし、奴が、香港に逃げてしまったら、間違いなく、自分が、あけみ殺しの犯人にされてしまうだろう。
十分すぎるほどの動機があるし、現に、殺そうとして、あけみのマンションに、出かけているのだ。
それに反して、シロだと、証明するものは、何もないに等しい。あいつが、犯人だと主張したって、平山は、名前さえ知らないのだ。これでは、警察が、信用してくれる筈がない。
何としてでも、あいつを捕え、警察に引きずって行って、白状させるより、仕方がないのだ。
(見つけた!)
平山は、非常用ボタンを見つけ、それを思いっ切り、押した。

六両編成の成田エクスプレスは、悲鳴をあげながら、急停車した。

「やめて下さい！」

と、車掌が、金切り声を、あげた。平山が、列車をとめて、包丁を振り廻すと、思ったのだろうか？他の乗客たちも、列車が急停車したことで、悲鳴をあげ、騒ぎ立てた。

平山は、出刃包丁を手に持って、必死で、あの男を、追った。

男は、グリーン車から、他の車両に逃げてしまっていた。平山は、グリーン車から、隣りの車両へ、突き進んだ。そこの乗客が、血を流し、包丁を持っている平山を見て、逃げまどった。

そのうちに、一人の乗客が、自動ドアを手で押し開けて、地面に、飛び降りた。続いて、もう一人が、降りると、あとは、どっと、車両から、逃げ出した。

「危険ですから、外へ出ないで下さい！」

車掌が、悲鳴に近い声をあげた。が、それがかえって、乗客の恐怖心に、拍車をかけた感じだった。

乗客が、次々と、飛び降りて行く。

この辺りは、もう、成田空港に近く、線路の両側には、畠や、雑木林が、広がっている。

線路に人が入り込むのを防ぐためか、コンクリートの壁が、続いている。

線路に飛び降りた乗客は、その壁を、よじ登ったり、線路を、空港の方向に向って、走って行く。

（あいつは、何処へ行った？）

平山も、線路に飛び降り、血走った眼で、あの男を探した。

逃げ走る乗客たちで、あの男が、なかなか、見つからない。

（何処へ行きやがった？）

平山は、唸り声をあげながら、男を探し続けた。

その平山の頭上を、巨大なボーイング747が、低く、飛び去って行った。

8

生徒たちが帰宅してしまった小学校の校庭は、ひっそりとしている。

十津川と亀井は、校庭の隅にとめたパトカーの中で、ヘリが来るのを、待った。パトカーの中にいるのは、西本刑事たちからの報告を、聞くためだった。

被害者あけみこと、井上冴子について、その後、わかったこと、容疑者の平山について、調べたことなどを、次々に、知らせてくるのを、最後まで、聞きたかったのだ。

平山について、西本が、無線電話で、報告してきた。

「平山は、詐欺の常習犯みたいなものですよ。特に、女を欺して、貯めた金を巻きあげて、暮らしていたようです」

「なぜ、今まで、捕まらなかったんだ」

と、十津川が、きいた。

「それが、せいぜい、一人の女から、百万単位の金しか巻き上げないので、相手の女性も、告発しなかったからのようです」

「なるほどな」

「それが、あけみこと井上冴子からは、二億円もの大金を巻きあげたので、彼女も、必死になって、取り返そうとしたんだと思います」

「ヤクザの新井なんかも、そのために、使ったんだろうね」

「そう思います。それで、平山は、逃げ切れなくなって、彼女を殺したんだと思います。殺しておいて、香港へ逃げる気だったんじゃないでしょうか。

平山は、よく、東南アジアへ旅行していたといいますから、香港から、東南アジアへ、逃げる手筈と、思います」

「目撃者は、まだ、見つからないか？」

と、十津川は、きいた。

「一人見つかりました。マンションの前にある喫茶店のオーナーですが、午後三時十二、三分頃、マンションから、一人の男が、血相を変えて、飛び出してくると、タクシーを拾って、新宿方面に、消えたと証言しています」

「その男が、平山に似ているということかね？」

「そうです。このオーナーが話す男の顔立ちや、背恰好は、明らかに、平山です」

「今、血相を変えて、飛び出して来たと、いったね？」

「喫茶店のオーナーは、そう証言していますが」

「わかった。指紋の方は、どうなった？」

「今、照合しているところのようで、鑑識からは、まだ、何もいって来ていません」

と、西本は、いった。

無線が切れてすぐ、頭上に、轟音が聞こえて、ヘリコプターが、姿を現わした。

警視庁の文字の入ったヘリは、ゆっくりと、舞いおりて来た。

十津川と、亀井が、パトカーから降りて、ヘリのところへ走った。二人が、乗り込むと同時に、ヘリは再び、舞いあがった。

高度をあげると、今度は、東に向って、スピードをあげた。

六人乗りのヘリのシートに、十津川と、亀井は、並んで腰を下した。が、何か、困惑した表情の十津川を見て、亀井が、

「どうされたんですか？」

と、声をかけた。

ヘリの機内は、音がやかましい。十津川は、最初、亀井の声が聞こえなくて、
「え？」と、聞き返したが、
「何か、困ったことでも、ありますか？」
と、亀井に、きかれて、
「一つ、引っかかることが、あってね」
「何ですか？」
「マンションの前の喫茶店のオーナーの証言さ」
「平山が、飛び出してくるのを見たという証言でしょう？」
「そうだ」
「どこか、おかしいですか？」
「血相を変えて、飛び出して来たと、証言したそうだ」
「それが、おかしいですか？」
「平山は、詐欺の常習犯だと、いっている。悪党だよ。それが、被害者を、殺したわけだが、香港に逃げるルートを確保しておいて、計画的に、殺したんだ」
「そうです」
「ナイフも、用意して行き、それで、刺殺したと思われる」
「そうです」
「それなら、落ち着き払って、怪しまれないように、現場のマンションを出て来るんじゃないかねえ？」
「詐欺の常習犯だったとしても、人を殺したのが初めてなら、落ち着きを失ってしまったとしても、おかしくは、ないと思いますが」
「落ち着きを失ったというのならいいんだ。青ざめた顔でもいいのさ。血相を変えて、飛び出して来たというので、引っかかってしまったんだ。言葉の綾も知れないが、やはり、おかしいと、思うんだよ」

と、十津川は、いった。
「しかし、犯人は、平山以外は、考えられませんが」
と、亀井が、いう。
「私も平山が、犯人と思うがね。彼が、計画通りに、彼女を殺したとしよう。初めての殺人だから、カメさんのいうように、カッとしてしまうだろうし、落ち着きを失ってしまうだろうと、私も、思うよ。しかし、それでも、マンションを、飛び出しはしないと、思うんだがね。そんなことをすれば、怪しまれるのが、わかっているからだ。足が宙に浮いていても、努めて、落ち着き払って、タクシーをとめると思うよ。まだ、成田空港には、間に合うからだ」
と、十津川は、いった。
「そういえば、何となく、変だという気がしてきましたが――」
と、亀井も、いった。
「血相を変えて、飛び出すというのは、どういう場合だろうか？」
十津川は、自問の調子で、いった。
「そうですねえ」
と、亀井は、考え込んでいたが、
「裏切られた時ですかね。とにかく、予期しないことにぶつかった時ということが多いと思いますがね」
「同感だね」
「警部は、平山も、そういうケースだったと、思われるんですか？」
「いや、断定はしないよ。証言者が、果して、事実をいっているかどうか、今の段階では、わからないからね。人間というのは、思い込んでしまうことがあるからだ」
「そうです。西本刑事は、喫茶店のオーナーに、向

いのマンションで、殺人があったことを話して、何か見ませんでしたかと、問うたと思うのです。先入主を与えられているわけですからね。飛び出してきたとか、血相を変えていたとか、自然と、そんな表現になったとしても、おかしくは、ありません」

と、亀井は、いった。

「確かにね」

と、十津川も、肯いた。

先入主の他に、証言者が、質問者の刑事に、おもねてしまうということもあるのを、十津川は、知っていた。

刑事が期待しているだろう答を、考えて、それに合せてしまうのである。

だが、十津川は、そのあとで、「しかし」といった。

「喫茶店のオーナーが、ありのままを、証言している場合も、あり得るんだ」

「ええ。あり得ます」

と、亀井は、肯いたが、

「しかし、今のところ、平山以外に、犯人は、考えられませんが」

「だから、当惑しているんだよ」

と、十津川は、苦笑した。

彼は、機内の無線電話を借りて、西本刑事に、連絡を取った。

「被害者の周辺を、徹底的に、調べてみてくれないか」

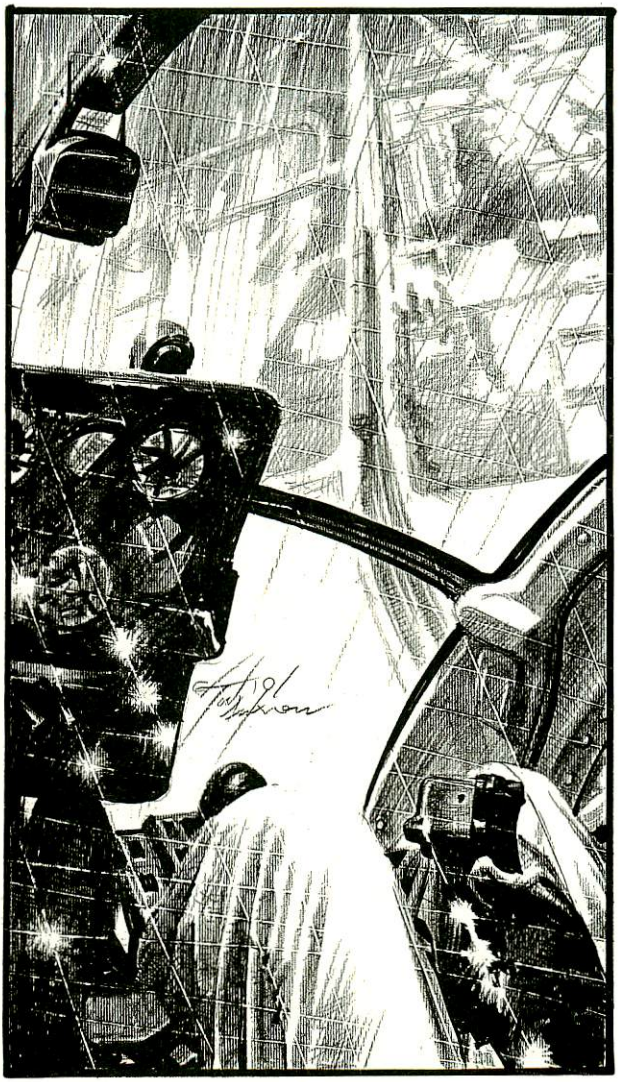
と、十津川は、エンジン音に負けないように、大声を出した。

「調べますが、一番、動機のあるのは、平山ですよ」

と、西本が、いう。

「わかっている。彼女のマンションの部屋を、隅から隅まで、調べれば、平山以外の男の名前が、出て

くるんじゃないかと、思っているんだよ。どんな男か、知りたいんだ」
「それは、今、日下刑事たちが、調べていますから、出てくれば、わかると思います」
「わかったら、すぐ、報告してくれ」
と、十津川は、いって、いったん、電話を切った。
その間も、十津川たちを乗せたヘリコプターは、成田空港に向けて、飛び続けている。時速は、約三〇〇キロ。成田エクスプレスの二倍以上のスピードである。
「下を見て下さい！」
と、突然、副操縦士が、振り向いて、十津川に、声をかけた。
「どうしたのかね？」
「成田エクスプレスが、立ち往生しています。どうしたのかな？」
と、副操縦士が、いう。
十津川と、亀井も、眼をこらした。
成程、眼下に、六両編成の列車が、駅でもない場所で、停車している。
十津川は、成田エクスプレスに、一度だけ、乗ったことがあったが、すぐには、同じ列車には、思えなかった。
十津川は、一週間ほど前、アメリカから帰国した友人を迎えに行ったとき、成田エクスプレスに乗ったのである。
その時、赤、黒、白の三色に塗りわけられた車体を見て、いかにも、国際空港へのアクセスらしい列車だと、思ったものである。
だが、今、空から見下すと、屋根しか見えないから、別の列車に見えたのだ。屋根は、赤一色だからだろう。
なぜか、列車の外に、散らばっていた乗客たち



が、戻って来て、列車に、乗り込もうとしている。
「何があったんですかね？」
と、亀井が、見下しながら、きいた。
操縦士（パイロット）は、高度を下げ、ホバリングさせた。
ヘリを見上げている乗客もいる。
「故障して、動かなくなったんで、諦らめて、列車を降りて、歩き出したら、また、動くことになって、あわてて、乗っているのかも知れないな」
と、十津川は、いった。
「もし、あの列車に、平山が乗っているとしたら、われわれの方が、成田空港に、先廻り出来ますよ」
亀井が、嬉しそうに、いった。
「早く行ってくれ」
と、十津川は、操縦士（パイロット）に、いった。
二人を乗せたヘリコプターは、再び、スピードを上げて、空港に向った。
すでに、前方に、成田空港が、見えている。長く延びた滑走路が、西陽の中で、光って見え、離陸して行くジャンボ機も、見える。
ヘリコプターは、低く飛び続け、空港の隅に、着陸した。
午後五時十五分。問題の香港行のノースウエスト機の出発まで、あと、四十分である。
十津川と、亀井が、出発ロビーに入って行くと、成田エクスプレスが、遅れていることが、話題になっていた。
成田エクスプレスには、当然、この成田空港から、出発する乗客が、何人も、乗っているからだろう。
搭乗手続きは、一応、一時間前までにということになっているが、成田エクスプレスの到着がおくれているので、ぎりぎりまで受けつけるという掲示が出ていた。
「成田エクスプレスは、故障だったんですか？」

と、十津川は、ＪＲの駅員に、きいてみた。
駅員は、苦笑しながら、
「それが、乗客の一人が、非常ボタンを押して、列車を停めてしまったんですよ」
「なぜ、そんなことをしたんですか？」
「間もなく、その列車が到着しますから、はっきりしたことが、わかると思いますが、車掌が、連絡したところでは、問題の乗客が、列車を停めた上、出刃包丁を振り廻したそうなんです」
と、ＪＲの駅員が、いった。
十津川は、びっくりして、
「なぜ、そんなことを、したんですかね？」
「全くわかりませんが、車掌の話では、その男の人は、乗客の一人を、殺そうとしているみたいだったということです」
と、駅員は、いった。
それだけでは、よくわからないし、包丁を振り廻した人間の名前も、わからないのだ。
十津川は、ノースウエストの営業所へ行き、一七時五五分の便に乗る予定の平山が、搭乗手続きを取ったかどうかを、聞いてみた。
「まだ、手続きをとっておられませんが、ついさっき、電話がありました」
カウンターにいた若い女子社員が、ニコヤカに、話してくれた。
「電話で、何と、いったんですか？」
と、十津川は、きいた。
「成田エクスプレスの故障でおくれているが、必ず行くと、おっしゃいましたわ。それから、妙なことも、おっしゃっていました」
「どんなことを、いっていました？」
「航空券を盗まれた。盗った男が、乗ろうとするかも知れないが、その男は、人殺しだから、乗せないでくれと」

「盗られたですか」
「はい。ファーストクラスの航空券です」
「平山は、電話で、自分の名前を、いったんですね？」
「はい。平山だと、おっしゃいました」
「彼が、現われたら、教えて下さい。われわれも、見張っていますが」
と、十津川が、いうと、カウンターの女性は、急に、こわばった表情になって、
「何か、事件に関係した方なんでしょうか？」
と、きく。
「いや、参考人です。あなたは、ただ、知らせてくれれば、結構ですよ」
十津川は、相手を、怖がらせないように、おだやかに、いった。
十津川が、亀井のところに戻ると、亀井が、
「間もなく、成田エクスプレスが、到着するそうです。地下二階のステーションには、空港派出所の警官が、飛んで行っていますよ。車内で、出刃包丁を振り廻した男がいるというので」
と、報告した。
「どうやら、その男が、平山らしいんだ」
「なぜ、彼は、そんなことをしたんでしょうか？」
「ノースウエストのカウンターに、電話して来て、航空券を盗られたと、いったらしい」
「妙な具合ですね。香港に逃げるんなら、騒ぎ立てて、注目されるのは、損でしょうにね」
と、亀井が、首をかしげた。
「その通りだよ。血相を変えてたという証言にしろ、出刃包丁を振り廻す行為にしろ、妙なことばかりなんだよ」
「警部は、どう思われるんですか？」
と、亀井が、きいた。
「カメさんは、気に食わないかも知れないが、見方

を変えた方が、いいかも知れないと、思っているんだがね」
「平山が、犯人ではないということですか？」
「その可能性が、出て来たような気がしているんだよ。平山も、誰かに、はめられたんじゃないかと、思ってね」
「しかし、証拠は、ありませんよ」
と、亀井が、いった。
「もう一度、西本刑事に、連絡してくる。もし、平山が現われたら、知らせてくれ」
と、十津川は、いい、公衆電話ボックスのところへ走って行った。
西本刑事を、電話で、呼び出した。
「今、成田空港だが、被害者の男関係で、何か、わかったかね？」
と、きくと、西本が、待っていたように、
「彼女の部屋を探していた日下刑事が、手紙と写真を見つけました。ラブレターが、五通で、彼女の男であることは、間違いないと思います。面白いことに、その手紙の中に、平山の名前も出て来ます」
「平山のことを、どんな風に、書いてあるんだ？」
「読みます。『平山という男は、くわせ者とおもうが、君に惚れていれば、うまく利用したらいいよ』と、あります。彼女は、平山について、その男に、相談していたものと思います」
「名前は、何というんだ？」
「小島祐一郎。三十代の男ですね」
「タレントみたいな名前だな？」
「俳優です。テレビドラマのロケ先からの手紙も一通ありまして、撮影の模様が、書いてあります」
「顔写真が、欲しいな」
「空港へ、電送しましょう。それから、清水刑事が、この小島祐一郎のマンションに飛びましたが、留守だそうです」

「いま、何処にいるか、どんな男か、至急、知りたいね」
と、十津川は、いった。
「他の連中で、小島について、聞き込みをやっていますから、何かわかると思います」
「パスポートを持っているかどうかも、知りたいね」
「持っています。今、いったロケ先は、カナダですから」
と、西本が、いった。
「それなら、予約の航空券があれば、簡単に、香港に行けるわけだ」
「香港に行こうとしているんですか？」
「多分ね」
「ちょっと待って下さい。今、小島祐一郎について、聞き込みをやっていた北条刑事が、戻って来たので、電話に出します」
と、西本がいい、北条早苗の、やや甲高い声に、代った。
「小島は、女にだらしのない男です」
と、早苗は、いきなり、いった。
十津川は、思わず、苦笑して、
「ずいぶん、直截ないい方だね。何か、それらしい話があるのかね？」
「小島は、二枚目という定評があるのに、売れません。関係者の話では、売れない理由は、二つで、大根だということと、性格が悪いことだそうです。傲慢で、冷酷だといっています。それで、あんな二枚目なのに、端役しか来ないのだといいます」
「女に、だらしがないというのは？」
「売れない俳優ですが、とにかく、美男子ですから、女にもてるそうで、小島は、関係した女から、金を貢がせているという話です。あれだけ、女を泣かせていると、そのうちに、ひどい目にあうだろう

といっている人もいます」
「井上冴子との関係は？」
「これは、彼女の方が、熱をあげていたようです。小島が、属しているプロダクションの人たちの話では、彼女が、撮影現場にも、押しかけて来たことがあると、いっていました。小島の方は、あの女は、いろいろと物をくれるから、つき合ってやっているんだと、嘲笑っていたようで、そうした冷たさが、嫌われる理由だったんじゃないでしょうか？」
「平山とは、三角関係ということだったのかね？」
「それは、違うと思います。井上冴子は、小島には、男として、魅力を感じていたんだと思いますが、平山の方は、貯めたお金を、増やしてくれる機械みたいに考えていたようです」
「ところが、その機械が、とんだ喰わせ物だったわけだな」
「平山の方は、誠実さを装って近づき、冴子から、大金を巻きあげようとしていたわけです。小島が、同じプロダクションの人間に、『あのバカが、サギ師に、大金を巻きあげられやがった』と、舌打ちして見せたことがあるそうです」
と、早苗は、いった。
「すると、小島は、平山に腹を立てていたわけだね？」
「本当は、腹を立てる理由なんか、何もないんです。井上冴子が、大金を欺し取られたって、それは、彼女のお金であって、小島のお金じゃないんですから」
と、早苗は、腹立たしげに、いった。
十津川は、クスッと、笑ってから、
「そりゃあ、そうだな」
「小島が、腹を立てているのは、自分のものになるかも知れないお金が、平山のふところに入ってしまったからなんです」

「二人の悪党が、獲物の取り合いをしていたということか」
「そうです。可哀そうなのは、井上冴子ですわ。平山に欺し取られなければ、小島に、巻きあげられていたと思いますから」
と、早苗は、いった。
「小島が、今、何処にいるかわからないのかね？」
「わかりません。プロダクションの人の話では、珍しく、連ドラの話が来たので、今朝から、小島に連絡を取ろうとしているが、全然、取れなくて困っているそうです」
「凶暴な男かね？」
と、十津川は、きいた。
「小島は、空手を習っていたことがあって、よく、それを、ひけらかしていたそうです。小島に、空手で、胸を突かれ、肋骨を折って、入院したタレントもいると、聞きました」
と、早苗は、いう。
「わかった。続けて、調べておいてくれ」
と、十津川は、いった。

9

空港事務所の職員が、亀井と一緒に、小走りに、やって来た。
「小島祐一郎の顔写真が、送られて来ました」
と、亀井が、職員から受け取った写真を、十津川に見せた。
FAXで送られたので、白黒になっている。が、美男子ということは、すぐ、わかった。いかにも、いい男、女に好かれるだろうなという顔である。
そうした自信が、表情に見えた。
十津川は、持って来てくれた職員に、礼をいってから、

「犯人は、平山か、この小島か、どっちともいえなくなったよ」
と、亀井に、いった。
「小島が、平山の航空券を奪って逃げ、それを、出刃包丁を持った平山が、追いかけて来て、成田エクスプレスの中で、乱闘になったというわけですか？」
「そう考えると、辻褄が合ってくるんじゃないかね。平山が、井上冴子を殺して、成田エクスプレスで、逃げたとする。これでは、彼が血相を変えて、冴子のマンションから飛び出して来たという証言が、おかしくなってしまう。それに、成田エクスプレスの中で、出刃包丁を振り廻した理由も、わからない」
「小島が、犯人なら、上手く説明がつくでしょうか？」
亀井は、まだ、半信半疑の顔だった。
「平山は、井上冴子を殺して、予約しておいたノースウエスト機で、香港に逃げる気だったんだと思うよ。そのつもりで、彼女のマンションに行ったのも、事実と思うね。彼が、そのマンションから、飛び出してくるのを、目撃されているからね。だが、計画が、狂ったんだ」
「それが、小島ですね？」
「恐らくね。小島は、日頃から、平山を憎んでいたということだ。自分の女である冴子の金を、平山が、巻きあげたからだよ」
「悪党が、悪党に、腹を立てていたわけですか？」
「ああ、そうだ。小島は、今日、平山が、冴子に会いに来ると知って、マンションに行き、日頃のうっぷんを、晴らそうとしたんだろうね」
「航空券を、奪ってですか？」
「そんなことで、すむものか。また、平山が、血相を変えたりしないだろう」

「冴子を、小島が、殺して、その罪を、平山になすりつけた――？」

「それだけでもあるまい。金だよ。平山は、冴子から巻きあげた金を、日本の銀行の香港支店に、送金していたらしい。小島は、その通帳なり、証書なりを、奪い取ったんだろう。その上、冴子を殺して、平山を犯人にして、逃げたんじゃないかな。だから、平山が、血相を変えて、追いかけたんだ」

「なるほど。しかし、なぜ、成田エクスプレスに、二人とも乗って、車内で、乱闘になってしまったんでしょう？　タクシーでもいいわけですし、上野から、京成でも、来られるでしょう？」

「それは、一七時五五分発の航空券のせいだよ。さっき、ノースウエストのカウンターで聞いてみたんだが、今、都内から成田空港まで一番早い交通機関は、成田エクスプレスだそうだ。だから、この便に乗るために、二人とも、成田エクスプレスに、乗ったんだよ」

と、十津川は、明確に、いった。

「その成田エクスプレスは、もう着いていますが、平山も、小島も、まだ、現われていませんね」

亀井は、出発ロビーの中を、見廻した。

「出刃包丁を振り廻して、車内で乱闘をやったとすると、そのまま、乗っているわけには、いかなかったんだろう。だが、ノースウエスト機に間に合うと思えば、ここへ来る筈だ」

と、十津川は、いった。

亀井は、もう一度ロビーを見廻していたが、

「ノースウエストのカウンター係が、こっちを見ていますよ」

と、十津川に、囁やいた。

十津川が、見ると、さっきの女子社員が、しきりに、眼で合図している。

十津川と、亀井は、カウンターに、駈け寄った。

女子社員は、青ざめた顔で、
「今、刑事さんのいっていた男の方が、来ました」
と、いう。
「平山だね？」
「はい。予約されていた方です」
「それで？」
「航空券のナンバーをいわれて、この航空券を持った男は、まだ、来ないかと、聞かれました。なんでも、盗まれたとか、おっしゃって」
「それで？」
「そのナンバーの航空券をお持ちの方は、まだ、見えませんといいましたら、急に、姿を消してしまって――」
「われわれに気付いたのかも知れませんね」
と、亀井が、小声で、いった。
「探そう」
と、十津川は、短かく、いった。

二人は、平山を求めて、出発ロビーを、探して歩いた。
海外旅行ブームで、出発ロビーには、人があふれている。人々の流れが、邪魔になって、なかなか、平山が、見つからない。
「もう、外へ出てしまったんじゃありませんか？」
と、歩きながら、亀井が、いった。
「平山が、井上冴子殺しの犯人なら、カメさんのいうように、素早く逃げてるさ。しかし、犯人でなければ、逃げない筈だ」
「なぜですか？」
と、亀井が、きく。
「平山が、犯人でなければ、何とかして、自分の無実を証明しようと思うだろう。唯一の方法は、彼の航空券を盗った男、つまり、小島を捕えて、白状させることだ。だから、平山は、ここから、逃げられないんだよ。自分の航空券を持って現われる小島

を、捕えなければならないからね」
と、十津川は、いった。
「その小島は、ここに、現われるんでしょうか？」
「どうかな」
と、十津川が、いったとき、亀井が、急に、眼を光らせて、
「いました！」
と、小さく、叫んだ。
二人は、走り出した。人波を、かきわけるようにして、十津川と、亀井は、ちらりと見えた平山に向かって、突進した。
平山が、逃げ出す。彼に体当りされた女性が、悲鳴をあげて、横転した。
十津川は、彼女を飛び越えて、平山に、躍りかかった。
亀井が、それに続く。近くにいた人々が、あっけにとられて、見守っている。
十津川は、平山と一緒に、床に転がった。平山は、何か叫びながら、十津川に向って、殴りかかってくる。
「君を、井上冴子殺人の容疑で、逮捕する！」
と、十津川は、わざと、大声で、いった。
周囲を取り巻いていた人々が、驚きや、好奇の眼になって、平山を見つめている。
「おれは、殺してない！」
と、平山が、叫ぶ。
「そんな嘘が通用すると、思ってるのか！」
十津川は、押さえつけるようにいい、平山の腕をねじあげて、手錠をかけた。
「おれじゃない！」
と、また、平山が、甲高い声で叫ぶのを、十津川は、いきなり、殴りつけた。
「人殺しが、見苦しいぞ！」
と、十津川は、怒鳴りつけた。

それでも、平山が、また、何かいおうとするのを、十津川は、また、殴りつけた。

十津川は、亀井と、平山の両腕をつかみ、引きずるようにして、空港派出所に、連行して行った。

空港派出所に着くと、十津川は、平山を、奥へ連れて行った。そこにいた警官たちに、十津川は、

「この男を頼むよ」

「何ですか？　こいつは？」

「殺人容疑者だよ」

「それでは、ここで訊問ですね？」

と、警官が、きくのへ、十津川は、

「その暇はないんだ。この男のいい分は、君たちが、聞いておいてくれ」

「私たちがですか？」

「そうだよ。いろいろというだろうが、全部、聞いておいてやって欲しい」

と、いい残して、十津川は、亀井と、派出所を出た。

亀井は、並んで、出発ロビーに戻りながら、ニヤニヤ笑った。

「やはり、あれは、芝居だったんですね」

「下手な芝居だと、自分でも、照れ臭かったよ」

と、十津川も、笑った。

十津川は、よほどの怒りがなければ、逮捕した相手を殴ったりしない。手錠をかけても、相手は、まだ、犯人と決ったわけではないのだし、第一、相手を殴れば、自分が傷つくだけだからだ。

だが、今日は、平山を殴りつけた。理不尽な殴り方をした。それは、全て、周囲のヤジ馬に、みせるためだった。

「あれで、効果がありましたかね？」

と、亀井が、きいた。

「ヤジ馬の中に、真犯人の小島がいてくれれば、効果があったと思うんだがね」

「もし、いなかったら、どうなりますか？」
「いなければ、ゼロだね。バカな独り芝居ということさ。しかし、私は、小島は、いたと思っている。平山が犯人として、逮捕されれば、彼は、安心できるからだよ」
「安心して、香港へ行けるというわけですね」
「そうさ。そんな甘美な誘惑に勝てると思うかね？」
と、十津川は、いった。
亀井が、歩きながら、腕時計に眼をやった。
「一七時四十分。あと十五分で、問題のノースウエスト便が、出発します」
「急ごう」
と、十津川は、いった。
ノースウエスト便の搭乗が、すでに始まっていた。
十津川は、カウンターに行き、さっきの女性に、
「例の航空券の客は、来ましたか？」
と、きいた。
「はい、いらっしゃいました」
「この男ですか？」
十津川は、小島祐一郎の顔写真を、相手に見せた。
「この方ですわ」
「間違いありませんね？」
「ええ」
「もう乗ってしまったのかな？」
「丁度、ギャングウェイを、歩いていらっしゃるところだと思いますけど」
と、いう答だった。
十津川と、亀井は、飛行機に連絡するギャングウェイに向って、走った。
航空券を改めている係員に、警察手帳を見せて、ギャングウェイの中に、駈け込んだ。

手荷物を持って、乗客が、ゆっくり歩いて行く。
それを、追い越しながら、小島の姿を探した。
日本人にしては、背の高い、スタイルのいい男の後ろ姿が、見えた。
「小島祐一郎！」
と、亀井が、大声で、呼びかけた。
男が、びくっとしたように、立ち止まって、振り向いた。
十津川と、亀井が、さっと近寄って、両側から、挟みつけた。
「殺人容疑で、君を逮捕する。それに、窃盗もある」
と、十津川が、いった。
小島の彫りの深い顔が、ゆがんだ。
「何かの間違いだよ。僕は、休暇で、香港へ行くんだ」
「井上冴子殺害容疑だよ」
と、亀井が、いった。
「その犯人なら、さっき、捕った筈だ。そうだろう？」
小島がいうと、亀井が、思わず笑い出した。
「やっぱり、あれを見ていたんだな」
と、亀井がいうと、小島は、きょとんとした顔になって、
「そうだ。あんた方が、さっき、井上冴子殺しの犯人を、逮捕したんじゃないか。それなら、僕は、関係ないよ。間もなく、出発なんだ。放っておいてくれ」
「君は、乗れないんだよ。君が行くのは、香港じゃなくて、刑務所だ」
と、亀井が、いった。

10

平山は、釈放された。

だが、彼が乗ることになっていた香港行のボーイング747は、すでに、飛び立ってしまっていた。

小島に奪われた銀行の通帳などは、返して貰えなかった。事件の重要な参考資料として、預かっておくといわれたのである。

平山が、文句をいうと、亀井刑事が、怖い顔で、

「もともと、その金は、死んだ井上冴子から巻きあげたものだろうが。逮捕されなかっただけよかったと、思うんだな」

と、いった。

「逮捕って、何もやってませんよ。彼女を殺したのは、小島という男なんだ」

平山が、主張すると、今度は、十津川が、彼を睨んで、

「何もやっていないだって。君を逮捕しようと思えば、いくらでも、理由があげられるよ。君は、出刃包丁を、成田エクスプレスの車内で、振り廻している。これだけだって、十分に、逮捕の理由になるんだ。それに、井上冴子を欺して、二億円を詐取した。サギ罪に当る。それに、小島の証言では、君は、彼女を殺そうとしている。どうだね？」

と、十津川は、いった。

これ以上、文句をいえば、本当に逮捕されそうなので、平山は、逃げ出した。

預金通帳も、航空券もない。財布の中には、二万円足らずの金が入っているだけだった。

香港に着けば、いくらでも、銀行でおろせると思って、当座の金は、用意しなかったのだ。

今度の事件で、裁判が始まれば、証人として出廷して貰うから、海外へは、出ないようにと、十津川に、釘を刺されていた。

（預金通帳が、戻ってくるまで、何とかして、稼がないとな）

と、平山は、考えた。

東京に戻るために、今度は、上りの成田エクスプレスに乗った。

なけなしの金をはたいて、グリーン車にした。

おかげで、外国帰りらしい女性が、見つかった。

年齢は、三十歳前後、キャリア・ウーマンという感じだった。シャネルのバッグを持ち、シャネルの腕時計を、身につけている。スーツケースには、アメリカ東海岸のラベルが、貼りつけてある。

（土産品（スーベニール）を持っていないところをみると、家族はいないのだろう）

平山が、狙うには、丁度いい女に見える。

彼は、そっと近づいて、声をかけた。

「失礼ですが、ニューヨークで、お見かけしたような気がするんですが――」

●初出

「二階座席の女」（小説現代'91年1月号）
「十津川警部C11を追う」（〃 '91年3月号）
「北の廃駅で死んだ女」（〃 '91年5月号）
「死への近道列車」（〃 '91年7月号）

十津川警部C11を追う

一九九一年十月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―西村京太郎 © 1991 KYOTARO NISHIMURA Printed in Japan

発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二十一二十二一 郵便番号一一二―〇一 編集部〇三―五三九五―三五〇六 販売部〇三―五三九五―三六二六 製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所―大日本印刷株式会社 製本所―大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181582-2（文三）

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろし長編ミステリー&エロス
秘書室の殺人　豊田行二

書下ろし長編伝奇ミステリー
時をさまよう恋人たち　鳥井加南子

書下ろし歴史伝説ミステリー
南紀殺人海の密室　長井彬

長編サスペンス&エロス
成城官能夫人　南里征典

書下ろし長編官能サスペンス
自由ケ丘密会夫人　南里征典

書下ろし二四郎記者事件帖
特ダネ記者殺人事件　中津文彦

乱歩賞SPECIAL 奥羽八百年黄金伝説
伊達騒動殺人事件　中津文彦

書下ろし長編旅情ミステリー
ラトビアの霧　中津文彦

書下ろし新本格推理
消失！　中西智明

書下ろし長編本格推理
下北の殺人者　中町信

書下ろし長編本格推理
津和野の殺人者　中町信

長編青春サスペンス・ロマン
国境の女　夏樹静子

推理傑作集
女の銃　夏樹静子

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件　西村京太郎

長編野球ミステリー
日本シリーズ殺人事件　西村京太郎

鉄道推理
L特急鶴り子号殺人事件　西村京太郎

長編鉄道推理
寝台特急「北陸」殺人事件　西村京太郎

乱歩賞SPECIAL 新トラベルミステリー
オホーツク殺人ルート　西村京太郎

鉄道推理
行楽特急ロマンスカー殺人事件　西村京太郎

長編新トラベルミステリー
南紀殺人ルート　西村京太郎

鉄道推理
特急「おき3号」殺人事件　西村京太郎

新トラベルミステリー
阿蘇殺人ルート　西村京太郎

新トラベルミステリー
日本海殺人ルート　西村京太郎

新トラベルミステリー
寝台特急六分間の殺意　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
釧路・網走殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
アルプス誘拐ルート　西村京太郎

傑作鉄道ミステリー
特急「にちりん」の殺意　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
青函特急殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
山陽・東海道殺人ルート　西村京太郎

傑作鉄道ミステリー
最終ひかり号の女　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
富士・箱根殺人ルート　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
十津川警部の困惑　西村京太郎

長編鉄道ミステリー
津軽・陸中殺人ルート　西村京太郎

長編本格ミステリー
十津川警部の対決　西村京太郎

最新鉄道ミステリー
十津川警部C11を追う　西村京太郎

長編医学ハードロマン
癌病船　西村寿行

動物小説代表作
捜神鬼　西村寿行

長編国際冒険ロマン
赤い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
黒い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
白い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
碧い鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
緋の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
遺恨の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
幽鬼の鯱　西村寿行

長編国際冒険ロマン
神聖の鯱　西村寿行

生命賛歌ハードロマン長編
鬼狂い（ものぐるい）　西村寿行

長編バイオレンス
鬼の登（あしおと）　西村寿行

長編バイオレンス
異常者　西村寿行

長編パニック&バイオレンス
癌病船応答セズ　西村寿行

長編大冒険ロマン
旅券のない犬　西村寿行

書下ろし爆笑ミステリー
ヴァージン家族　新津きよみ

書下ろし大好評爆笑推理
ヴァージン家族2・殺人デパートの巻　新津きよみ

書下ろし青春ミステリー
パソコン通信殺人事件　乃南アサ

書下ろし青春新本格推理激烈デビュー
密閉教室　法月綸太郎

豪華絢爛新本格推理の雄作
雪密室　法月綸太郎

新本格推理稀代の異色作
誰彼（たそがれ）　法月綸太郎

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

孤高の新本格推理
頼子のために 法月綸太郎

ネオ時代アクション
戦国魔火矢 羽山信樹

超大型新人歴史アクション
花月秘拳行 火坂雅志

書下ろし大型歴史アクション
花月秘拳行2 北斗黒帝篇 火坂雅志

書下ろし本格推理・トリック&真犯人
十字屋敷のピエロ 東野圭吾

書下ろし渾身の本格推理
宿命 東野圭吾

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
アリバイ特急＋一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
津軽海峡＋一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
寝台特急「出雲」＋一の交叉 深谷忠記

書下ろし大トリック・アリバイ崩し
北津軽 逆アリバイの死角 深谷忠記

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ一 藤川桂介

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ二 藤川桂介

書下ろし長編歴史シンフォニックロマン
剣鬼幻々斎志楽 心ノ三 藤川桂介

長編ソフトボイルド推理
タイホされたし度胸なし 藤田宜永

書下ろしロマンティック・ミステリー
瓜先(つまさき) 牧南恭子

長編本格推理
殺人行おくのほそ道[上][下] 松本清張

長編サスペンス
湖底の光芒 松本清張

長編サスペンス
塗られた本 松本清張

長編時代推理
異変街道[上][下] 松本清張

書下ろし本格推理！意外な結末
武蔵野殺人$_{4}$(ルート4)の密室 水野泰治

書下ろし本格推理&驚愕のラスト
奥多摩殺人3Wの逆転 水野泰治

書下ろし本格トリック推理
密室殺人講座 水野泰治

書下ろし古典に隠された暗号文
光源氏殺人事件 皆川博子

書下ろし怪奇幻想ホラー
聖女の島 皆川博子

書下ろしアリバイが崩れたとき戦慄の真相が！
殺人特急逆転の15分 峰隆一郎

書下ろし本格トラベルミステリー
殺人急行北の逆転240秒 峰隆一郎

書下ろし男と女のトラベル推理
西鹿児島発「交換殺人」特急 峰隆一郎

書下ろしトラベル推理
新潟発「あさひ」複層の殺意 峰隆一郎

書下ろし本格トラベル推理
東京－上野3.6キロの完全犯罪 峰隆一郎

長編本格推理
捜査線上のアリア 森村誠一

乱歩賞SPECIAL「前代未聞の殺人」プロジェクト
螺旋状の垂訓　森村誠一

長編サラリーマン推理
社（しゃど）奴　森村誠一

大手企業脅迫殺人事件
社賊　森村誠一

長編本格推理「行先不明列車」
銀河鉄道殺人事件　森村誠一

傑作ミステリー
暗渠の牧場　森村誠一

本格ミステリー犯人はこの中にいる
白夜の虹　森村誠一

ハードボイルド長編推理
狙撃者の悲歌　森村誠一

長編本格推理
明日なき者への供花　森村誠一

長編本格ミステリー
背徳の詩集　森村誠一

書下ろし本格推理
南海航路（さんぷらわあ）殺人事件　本岡　類

書下ろし究極のトリックミステリー
桜島一〇〇キロ殺人空路　本岡　類

書下ろし長編トリック推理
奈良「ささやきの小道」殺人　本岡　類

書下ろし本格トリック推理
陸奥こけし殺人事件　山村正夫

本格長編推理・酒呑童子伝説の謎
丹後半島鬼駒殺人　山村正夫

名探偵・令嬢キャサリンの推理
ヘアデザイナー殺人事件　山村美紗

長編本格推理・白猫怪死の謎
京都紫野殺人事件　山村美紗

長編本格推理・蹉死した花嫁
京都新婚旅行殺人事件　山村美紗

ミステリー傑作集
愛人旅行殺人事件　山村美紗

長編本格トリック推理
京都再婚旅行殺人事件　山村美紗

税関検査官・陽子の推理
大阪国際空港殺人事件　山村美紗

長編旅情ミステリー
小京都連続殺人事件　山村美紗

長編ミステリー　真犯人は誰？
シンデレラの殺人銘柄　山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
グルメ列車殺人事件　山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
シンガポール蜜月旅行殺人事件　山村美紗

令嬢探偵キャサリンの推理
天の橋立殺人事件　山村美紗

旅情ミステリー&トリック
愛の飛鳥路殺人事件　山村美紗

最新傑作ミステリー
紫水晶殺人事件　山村美紗

長編本格推理
愛の立待岬　山村美紗

長編時代伝奇ロマン
闇の太守Ⅰ　山田正紀

長編時代伝奇ロマン
闇の太守Ⅱ　御賢衆の巻　山田正紀

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

長編時代伝奇ロマン
闇の太守III 鬼道の巻　山田正紀

長編時代伝奇ロマン
闇の太守IV 桃源の巻　山田正紀

実録マージャン小説
伝説の雀鬼　柳史一郎

書下ろしユーモアミステリー
香港迷宮行　山崎洋子

書下ろし本格推理&暗号
「双子座」12文字の殺人　矢島　誠

書下ろし本格推理&暗号
寝台特急「北斗星」○文字の殺人　矢島　誠

伝奇スーパーアクション
黄金宮 勃起仏編　夢枕　獏

伝奇スーパーアクション
黄金宮II 裏密編　夢枕　獏

伝奇スーパーアクション
黄金宮III 仏呪編　夢枕　獏

書下ろしハイパー伝奇アクション
ぶった斬り　横溝美晶

殺意の匂い書下ろし推理
ピンクのおもちゃネコ殺人事件　ルディー和子

長編法廷推理
悪の扉[上][下]　和久峻三

現代悪女ミステリー
死刑台の女　和久峻三

長編推理 銀行オンラインジャック
一億分の一秒の侵入者　和久峻三

長編法廷推理
失踪宣告　和久峻三

パニック長編
東京インフェルノ　和久峻三

長編法廷ミステリー
エイズ街の連続殺人　和久峻三

長編サスペンス推理
新宿25時の戦慄　和久峻三

法廷ミステリー
マイナス百九十六度の相続人　和久峻三

法廷サスペンス
眠らない目撃者　和久峻三